
魔法少女まどか マギカ ~ 革命を促す者 ~

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ〜革命を促す者〜

【Nコード】

N7950S

【作者名】

TR

【あらすじ】

変えることのできない運命。

その運命は絶望の一角であった。

そんな中現れたのは運命を決める”世界”からの希望の光だった。

その光が照らし出す先にあるものとはなんなのか……それはまだ誰も知らない。

*不定期更新ですが、一生懸命に頑張っていますので、よろしく
願います*

9月16日追記：完結いたしました。
今まで応援していただきありがとうございました

前書き

初めまして、TRと申します。

今回は本作を読んで頂きありがとうございます。

本作読まれる際には以下の点にご了承いただける場合のみでお願い
します。

- ・ 本作内には残酷な描写が多々含まれます。
- ・ 本作に登場する人名団体名地名、またその他の名称はすべて架空
のものであり、実在するものとは一切関係ありません。
- ・ 本作では原作崩壊、独自解釈、オリキャラのチート現象などが含
まれています。
- ・ 本作内で登場する理論は、そのすべてが架空、または科学的根拠
のない物であり、必ずしも正しいとは限りませんのでご注意ください。
い。

以上偉そうに申しあげましたが、ご指摘やアドバイス等がありましたら、遠慮なくお知らせください。
また更新間隔は早くても3日、長くても2週間はかかりますので、
ご了承ください。

それでは、本作をお楽しみください。

プロローグ 魔法とは（前書き）

いよいよ始まります本作。

なんだか最初から難しくなりそうですが、楽しんで頂ければ幸いです。

プロローグ 魔法とは

魔法

それはたった二文字の何気ないもの。

しかし人々は何故この文字に惹かれるのであろうか？

誰しもがこれに惹かれてしまうのだ。

あなたも、私も。

それはまるで悪魔の囁きのように。

魔法使い。

そう呼ばれる者たちは、一種の契約を交わす。

相手は”世界”。

姿の見えないもの。

そして魔法使いは全員が代償を支払う。

それが世界の摂理だ。

「僕と契約して、魔法少女になって欲しいんだ」

そしてまた、ここに一種の契約がなされようとしていた。

あなたは魔法使いになりたいですか？

もしなれたら、あなたたちは魔法を何に使いますか？

それでは、始めましょう。

一種の契約がはびこり、歪のある世界の物語を。

プロローグ 魔法とは（後書き）

始まりがこんな感じです。

しかしあまり期待しないでください。

おそらく次回のほうでは、この感じが一気に崩れています。

後書きって何を書けばいいのかがいまいちよく分かりません。

それでは、次回でお会いしましょう。

主人公設定（ネタバレ注意）（前書き）

必要に応じてどんどん追加していく予定です。

7月26日追記：性格・武器・能力欄を追加しました

主人公設定（ネタバレ注意）

主人公設定

名前：小野 涉

性別：男

年齢：15歳

身長：169？

性格・その他：いつもはおおらかで、ボケをかましたりして場の雰囲気良くする。

ただし戦うときや真剣な話をしている時になると、人が変わったような性格になる。

その目的を果たすためであればどのような犠牲も厭わないという思想の持ち主。

正義のため〜と言鵜思想を持つてる人や偽善者を特に嫌い、敵だと判断した者に関してはどのような手段を講じてでも抹殺しようとする。

涉の正体は、世界の因果律を調整したり、見たりする役割を盛る、世界を統括する三神の一人、世界の意志である。

時間軸の不自然な繰り返しの原因を探るため、世界に降り立った。

武器：神剣・吉宗、正宗

相手の攻撃を防ぐ楯の役割の”吉宗”、相手に攻撃を仕掛ける矛の役割の”正宗”の二本で一本という不思議な剣。

世界の意志の涉が持つ、固有武器である。

能力

・気法

気の力で魔法のような技を使う。
ただしその正体は？

・レインソード

複数の剣を具現化（召喚）して、それを一気に降り注ぐ技。
雨のように降ることから、そう名付けられている。

・真実照らし出し眼

渉が持つ能力。

どのような秘匿テレパシーでも、傍受することができる。
そのほかにもその人物が、偽物か本物を見分けたりすることができる。

・因果接続

特定人物の因果（運命）に接続して、その人物の状態、死んでいる場合はその停止を見ることが出来る能力。
それを操作することで、死の時期を早まらせたり遅らせたりなどの処置ができる。

・爆斬剣

神剣・正宗を中心に爆発を起こす。
その威力は小規模。

・輪廻断ち切る光の輪

神剣を使って行う術。
その人物を斬ることで、その人物の使っている魔法などが強制解除される。

・挫折導き負の誘い

相手に対して夢を見せるもの。

その夢は、相手にとって一番見たくない内容であるため、精神的ダメージを与えることが可能。

・リミットブレイク

渉の封じられた”力”を開放する鍵の言葉。

封印の段階は、ブート1, 2, 3そして真名解放の4段階だ。

ブート1：身体能力と封じられた力を25%解放。

ブート2：身体能力と封じられた力を50%解放。

ブート3：身体能力と封じられた力を75%解放（ここまで開放すると、服装が変わる）

真明解放：すべての能力等を完全開放。（自分の正体を明かすようなもののため、姿自体が変わる）

・力を断ち切りし炎天の光

『輪廻断ち切る光の輪』の改良版。

力の放出を停止させることができる。

力自体を消すことができないため、あまり使いどころがない。

・神術

神が使う力。

魔法とは対なるもので、さまざまな現象を引き起こす。

渉が使っていた気法は、この神術の劣化版。

・最終審判、レクリエム

渉が使う超必殺技。

その光を浴びた物には裁きを下し、ダメージを与える。

例え魔女であろうと、一瞬にして消滅させることが可能な強力な力を持つ。

単語

・第一種接触・召喚禁止部族

会ったり、召喚をして呼び寄せるのを禁止している部族。

理由としては様々だが、接触・召喚したために世界の状態が不安定になることを防ぐためだとも言われている。

この部族には世界を創造した『創造の神』、世界を揺るがすようなことをする者がいないかを監視し、いた場合には直接対処する『裁きの神』、世界の運命や人の運命をつかさどり、世界を安定させる『世界の意志』の三神。

第1話 平和の終わり・転校生現る(前書き)

早速第1話が始まります。

とりあえずこんなもんでいいですよね？

第1話 平和の終わり・転校生現る

何気ない朝は本当に素晴らしいと思う。

何せ、どんなにお金を出しても平和と言つのは得ることはできないのだから。

「おっはようー!」

僕達のいるところに、ピンク色の髪を両端に束ねている少女が駆け寄ってきた。

「おはようございます」

「まどかおそーい」

今駆け寄ってきた少女の名前は、鹿目 まどかそして彼女の横にいる青髪の少女は、美樹 さやか、最後に緑色の髪をしている大人の雰囲気をした少女が志筑 仁美だ。

この3人はいつも仲がいいのかよく集まって話をしている。かくなる僕も今はそのグループに入っているわけだが。

「お?可愛いリボン」

「そ、そうかな?派手すぎない?」

「とても素敵ですわ」

「そうそう、恥ずかしがることはないって」

一人がりボンの話題になれば、僕もついていく。女子の話についていくのは微妙に大変だ。

そして僕たちは学校へと向かうのだった。

「
でね、ラブレターでなく直に告白できるよつでなきやダメだって」

「相変わらずまどかのママはカッコいいなあ。美人だしバリキヤリだし」

「そんな風にきっぱりと割り切れたらいいんだけど……はあ」

さやかという言葉に、今まで先を歩いていた仁美がこちらの方に振り返った。

彼女の悩みは、ラブレターだ。

何でもたくさんもらってしまうのだとか。

一部の女子にはかなりの確率で妬まれる悩みだが。

「羨ましい悩みだねえ」

「良いなあ、私も一通ぐらいもらってみたいなあ。ラブレター」

まどかが頬に手を当ててそんな事を呟く。

「ほう？だつたら涉にでも書いて貰ったら？」

「え、ええ！？」

突然僕の名前が出てきたな。

ツと、そういえば自己紹介がまだだった。

僕の名前は、小野 涉おのわたるどこにでもいる普通の中学生です。

「おやおや？これは脈ありですなあ」

「あうう〜」

まどかは顔を赤くして下を向いていた。

「さやか、からかうのもそこまでに」

僕の注意にさやかは『はい』と生返事をした。

「それにしても、昨日転校してきて知り合ったばかりだっていうのに本当に馴染んでいますね」

「そう？今でもあなた達の話題についていくので精一杯なんだけどね」

どうでもいいことだが、僕は昨日転校してきたのだ。

そこで僕について話していた3人を見つけて、声をかけたということだ。

最初は訝しんでかなり警戒していたが、今ではこう自然に話せるようになっていた。

そして僕たちは、今度こそ学園へと向かう。

これがもし僕たちにとって何気ない1日と言っているのであれば……

今この時が最後だったのかもしれない。

「ごほんっ、皆さんに大事なお話があります。心して聞くように」
HR、教室でそう切り出したのは眼鏡をかけた、僕達のクラスの担任の早乙女先生だった。

「目玉焼きとは固焼きですか？それとも半熟ですか？はい、中沢君
！！」

「え、ええっと、どっちでもいいんじゃないかと」

「その通り！どっちでもよろしい！たかが卵の焼き加減なんかで、女の魅力が決まると思ったら大間違いです！」

そういつて早乙女先生は思いっきり指揮棒のようなものを割った。

「女子の皆さんは、くれぐれも半熟じゃなきゃ食べられないとか抜かす男とは交際しないように！」

「だめだっ たんだ」

「だめだっ たんだね」

先生の様子に、さやかとまどかは苦笑いを浮かべていた。

「そして、男子のみなさんは、絶対に卵の焼き加減にケチをつけるような大人にならないこと！」

「それって、先生の男を見る目がな 駄目だよっっちゃー！！ んん
うう！？」

僕の静かな突込みに、隣に座っていたまどかが思いつきり口を塞いできた。

「はい、あとそれから、今日はみなさんに転校生を紹介します」

まどかの拘束を説いた僕は、そのままの体制で固まった。

「じゃ、暁美さん、いらっしやい」

先生に促されて一人の少女が教室に入ってくる。

「うわ！すげえ美人」

「うそつ、まさか」

まどかはその少女を見て信じられないといった表情で見ている。

僕も、少女を見やる。

長い黒髪で、確かにさやかと言う通り見かけならば美人だ。だが……

(寂しそうな目だ。何もかもに絶望しきっている、悲しい感じだ)

僕は転校生のあまりの冷酷な雰囲気、冷や汗をかいていた。

「はい、それじゃあ自己紹介と行きましょう」

「暁美ほむらです」

暁美さんはそれだけしか自己紹介をしなかった。

そして固まっている先生をしり目に彼女は自分の名前を、ホワイトボードに書くのと丁寧に礼をした。

そのあまりのことに、クラスも固まっていたが、たどたどしくではあるが拍手の音が場を包んだ。

「え？えつと……あの」

暁美さんはまどかの方をじっと睨みつけていた。

休み時間、暁美さんはクラスのみんなから質問攻めにあっていた。

「不思議な雰囲気の方ですわね、暁美さん」

「ねえまどか、あの子知り合い？なんかさつきすんごいガン飛ばされてなかった？」

「え？えっと……あの……」

さやかの問題かけに、まどかは何かを言い渋っていた。すると、暁美さんがこっちに向かってきた。

「鹿目まどかさん。あなたがこのクラスの保健委員よね。連れてってもらえる？保健室」

「あ……あのう……その……私が保健係って……どうして」

彼女から放たれるオーラにまどかは、完全にたじたじだった。

「早乙女先生から聞いたの」

「あ、そうなんだ」

「僕も、同伴させてもらおうよ」

僕は念のために、まどかについていくことにした。

「え？あ、うん。え、えっと保健室は……ああっ」

「こっちよね」

突然歩き出した暁美さんは、まるで保健室を知っているように歩いていく。

「あ、あの、暁美……さん」

「ほむらでいいわ」

そんなやり取りを僕は横で一緒に歩きながら静かに聞いていた。そして人通りの少ない場所に来るや否や、こちらに振り返った。

「鹿目まどか。貴女は自分の人生が、貴いと思う？ 家族や友達を、大切にしてる？」

「え……えつと……わ、私は……。大切……だよ。家族も、友達みんなも。大好きで、とつても大事な人達だよ」

突然の問いかけに、まどかはたじろぎながらもこたえる。
僕はそれを静かに静観する。

「本当に？」

「本当だよ！嘘なわけないよ」

「そう。もしそれが本当なら、今とは違う自分になろうだなんて、絶対に思わないことね」

暁美さんはそこで話を切った。

「さもないければ、全てを失うことになる」

「え？」

突然の宣告にまどかは声を上げて驚いた。

「貴女は、鹿目まどかのままでもいい。今までどおり、これからも」

そう言っただけで僕たちに背を向けると、すたすたと歩いて行った。

「それと……」

だが、数歩歩いたところで、もう一度こちらに振り返った。今度は僕を見た。

しかしその視線は、とても冷たくかなりの敵意を感じるものだった。

「私の邪魔をするなら、容赦はしない……それだけは覚えておいて」「は？それってどういう」

僕の疑問に答えることなく、暁美さんは今度こそ去って行った。

『……………』

僕達は只々そこに立ち尽くすだけだった。

（一体どういう意味だ？彼女の言葉と”あれ”とは関係があるのか？）

僕は心の中でただそのことを考えていたのであった。

第1話 平和の終わり・転校生現る（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだまだあの人は登場しません。

次回は元凶との出会いまでになりそうです。

それでは、これにて失礼します。

第2話 訪れた異変（前書き）

今回はあの悪魔の動物が登場します。

第2話 訪れた異変

放課後、俺達は近場のファーストフード店にいた。

「ええ！？何それ？」

「わけわかんないよね……」

まどかの話を聞いたさやかがすつとんきよな声を出した。

「文武両道で才色兼備かと思いきや実はサイコな電波さん。くー！どこまでキャラ立てすりゃあ気が済むんだ？あの転校生は！？萌えか？そこが萌えなのかあ！？」

「まどかさん。本当に曉美さんとは初対面ですか？」

「うん…常識的にはそうなんだけど」

項垂れていたさやかは、まどかの言葉に反応して顔を思いつきりあげた。

「何それ？非常識なところで心当たりがあるか？」

「あのね…昨夜あの子と夢の中で会った………ような………」

「あははは。すげー、まどかまでキャラが立ち始めたよ」

まどかの言葉に、さやかと仁美は大きな声で腹を抱えながら笑い出した。

「ひどいよう。私真面目に悩んでるのに」

「仕方ないでしょ。いきなり夢で会ったなんて言われれば、ねえ？」

俺は苦笑いを浮かべながら答えた。

「あー、もう決まりだ。それ前世の因果だわ。あんた達、時空を超えて巡り合った運命の仲間なんだわあ！」
「夢って、どんな夢でしたの？」

前世の因果とまで言われたまどかに仁美が尋ねる。

「それが、何だかよく思い出せないんだけど……とにかく変な夢だったっただけで」

「もしかしたら、本当は暁美さんと会ったことがあるのかもしれないわ
せんわ」

「え？」

仁美の仮定に、まどかが驚いたような声を上げる。

「まどかさん自身は覚えていないつもりでも、深層心理には彼女の印象が残っていて、それが夢に出てきたのかもしれない」

「それ出来過ぎてない？どんな偶然よ？」

「そうね」

さやかという言葉に、仁美は苦笑いを浮かべながら答えた。

その後お稽古事で帰る仁美を見送り、さやかがCDショップに行くので、それに付き合うことにした。

【助けて！】

「ん？」

そんな時、突然頭の中に声が響いた。

【助けて！だれか！！】

「え？え？」

隣にいたまどかも反応している。

「まさか今の聞こえたのか？」

「え！？渉君も聞こえたの！？」

驚いた様子で、まどかが聞いてくる。

【僕を、助けて】

「とりあえず行ってみよう！」

「う、うん！」

そして俺達は声のする方へと走っていった。

「誰？誰なの？」

【助けて………】

声を頼りに誰もいないフロアに来てしまった。
どうやら改装中らしい。

「ねえ渉君。なんで金属の棒を持つてるの？」

「何が出るかわからないからね。一応護身用だ」

俺は右手に金属の棒を持っていた。

【助けて……】

「どこにいるの？あなた……誰？」

「……来る！」

俺は気配を感じ、そう呟いた次の瞬間。

「きゃ！？」

天井から落ちてきたのは、傷だらけの見たことのない生き物だった。

「あなたなの？」

「助けて……」

どうやらその通りらしい。

そんな時、俺達の前に立つ人がいた。

「ほむら…ちゃん？」

暁美さんだった。

何だか服装が見たことのないものであった。

それが彼女を冷酷な風貌に、仕立て上げていたのだ。

「そいつから離れて」

「だ、だって……この子、怪我してる」

俺は、やれやれと演じながらまどかの前に立つ。

「おいおい、小動物を痛めつけるのが趣味なのかい？恐ろしい性格だな」

「邪魔しないで」

暁美さんが目を細めてこつちを睨みつける。

「はっ！俺は小動物虐待を見逃せない性質でね。どうしても退かせたいのなら、力づくでやってみな！」

俺はそう挑発して手にした金属の棒を構えた。言葉では言えない緊張感が漂った時だった。突然、暁美さんが白い煙に覆われた。

「まどか、涉！こつち！！」

「さやかちゃん！」

「ナイスだ、さやか！！」

頼もしい援軍に、俺達はさやかの背後に移動すると、さやかは手にしていた消火器を暁美さんに投げつけ俺達は走って逃げた。

「何よあいつ。今度はコスプレで通り魔かよ！っ！か何それ、ぬいぐるみじゃないよね、生き物？」

「わかんない。わかんないけど……この子、助けなきゃ」

そんな時、またぞつと背筋に寒気が走った。

さっきのよりはかなり強い。

「気を付ける！来るぞ！！！！」

「え？」

俺の警告と同時に、周りの景色が一変した。

「あれ？非常口は？どこよこい」

「変だよ、ここ。どんどん道が変わっていく」

二人は周りを見回す。

「あーもう、どうなってんのさ!」

「やだっ。何かいる」

確かに何かの気配が強くなる。

そして出てきたのは、毛玉に髭の生えた生物だった。
何かを呟いている。

「冗談だよな? 私、悪い夢でも見てるんだよね? ねえ、まどか! 涉
!」

「いや、冗談でもない。こいつら俺達を殺す気だ」

俺が奴らの言葉が理解できていた。

「い、いや……」

二人は俺の背中にぴったりしがみ付いていた。

「二人とも、逃げろ」

「え?」

「聞こえなかったか? 俺が囹になる、だからお前らは逃げろ」

俺は二人に声をかけた。

「そ、そんな!」

「そんなことしたら涉が!」

「それがなんだ? 女の一人も守れねえ男なんて、生きる価値なんて

ない!!!」

「あ、あれ?!」

「これは?」

そんな時、突然俺達の周りをオレンジ色の明かりが包み込むと、あの生物が消えていた。

「とても素晴らしいわ」

凜々しく透き通る声と拍手の音に、俺達は振り返ると、そこには金色の髪をぐるぐる巻きにした少女が、向かってきていた。

「あら、キュウベえを助けてくれたのね、ありがとう。その子は私の大切な友達なの」

「私、呼ばれたんです。頭の中に直接この子の声が」

「ふうん……なるほどね。その制服、あなたたちも見滝原の生徒みたいね。2年生?」

言われてみれば、彼女の来ている服は俺達の通っている見滝原の制服だった。

「あ、あなたは?」

「そうそう、自己紹介しないとね」

その瞬間、断ち切りばさみの音が聞こえる。

「でも、その前に」

少女は華麗なステップを踏んで、胸の前の卵のような何かを構えた。

「ちょっと一仕事、片付けちゃっていいかしら」

その瞬間、突風が吹きつけ思わず目を閉じた。

そして目を開けた瞬間、上空にまるで別人だと思っほほど服装が変わった少女が浮いていた。

「はッ！」

少女が手を横に振ると同時に、展開されていたライフル銃のようなものが一斉に火を噴く。

「す……すごい」

その手際の良さにまどかが感嘆の声を上げた。

そう、それはまさに一言で言ってしまえば”魔法”そのものだった。すると、再び景色が揺らぎ元いた場所の風景に戻った。

「も、戻った！」

「魔女は逃げたわ。仕留めたいならすぐに追いかけてなさい。今回はあなたに譲ってあげる」

突然現れた曉美さんに、少女はそう告げる。

俺は二人の一步手前に出て、金属の棒を構えた。

「私が用があるのは……」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの。お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

なおも食い下がる曉美さんに少女はあからさまに、口調を変えた。少女の言葉に、緊張感が漂う。

「？」

俺は違和感を感じた。

睨み合いの末、暁美さんが立ち去ったのだが、その時一瞬ではあったがとても悔しそうな表情をしているように見えた。

「ふう」

二人は暁美さんが引いたのを見て体の力を抜いていた。そして少女はキュウベえと呼ばれた動物を受け取ると 回復魔法のようなものをかけた。

「ありがとうママ、助かったよ」

キュウベえと呼ばれた動物は、突然立ち上がって真美と呼ばれた少女にお礼を言った。

「お礼はこの子たちに。私は通りかかったただけだから」

「どうもありがとう。僕の名前はキュウベえ」

「あなたが、私を呼んだの？」

まどかはキュウベえに尋ねる。

「そうだよ、鹿目まどかと美樹さやか、それと小野 涉」

「なっ!？」

「何で、私たちの名前を？」

俺とさやかはきうべえが俺達の名前を知っていたことに驚いて声を上げた。

「僕、君たちにお願いがあって来たんだ」

「お、おねがい？」

キユウベエの言葉に、まどかがオウム返しに聞く。

そしてキユウベエは俺達に告げる。

「僕と契約して、魔法少女になつて欲しいんだ」

それは今思えば、悪魔の契約のようなものだったのかもしれない。

第3話 魔法少女

「私はバマミ。あなたたちと同じ、見滝原中の3年生。そして……」
目の前にいる巴先輩は言葉を区切ると、駆け寄ってきたキュウベエを抱きかかえて告げた。

「キュウベエと契約した、魔法少女よ」

確かに言葉通りだった。

「さてと、ここじゃなんだし、ちょっと私と一緒に来て貰っていいかしら？」

「あ、はい!！」

「右に同じく」

と言うことで、俺達は彼女についていくのであった。

「あの、巴先輩」

「私は先輩っていうがらじゃないから普通に巴でいいわよ」

「そ、それじゃ巴さん。一体どこに行く気ですか？」

俺の問いかけに、巴さんはにこやかな笑顔で振り返ると

「それはついてからの楽しみよ」

と言われたので、俺はただ静かについて行く事にした。
そして到着したのが、巴さんの自宅だった。

「うわあ……………」

「素敵なお部屋……………」

「これは何とも……………」

「独り暮らしだから遠慮しないで。ろくにおもてなしの準備もない
んだけど」

そこはまさに豪邸だった。

いやマンションの一室だとは想像もできないほど広かった。

そして巴さんは紅茶とケーキを4人分用意するとテーブルに置いて、
俺達に座るように促してきた。

「ママさん。すっごく美味しいです」

「んー、めっちゃうますよ」

「ありがとう。キュウベえに選ばれた以上、あなたたちにとっても
他人事じゃないものね。ある程度の説明は必要かと思って」

まどかとさやか感想に、巴さんは嬉しそうに言うと言と本題を切り出
した。

「うんうん、何でも聞いてくれたまえ」

「さやかちゃん、それ逆」

さやかの言葉に、まどかは苦笑いを浮かべながら突っ込む。

「というより、さっき一番怖がっていた奴 わー！わー！わー！そ
れ以上言うな！……」

俺のため息交じりの言葉に、さやかは喚きながら遮った。

「わあ、きれい」

「これがソウルジェム。キュウベえに選ばれた女の子が、契約によつて生み出す宝石よ」

そういつて巴さんが俺達の前に差し出したのは黄色の卵の形をした、宝石のようなものだった。

「魔力の源であり、魔法少女であることの証でもあるの」

「契約つて？」

「僕は、君たちの願いごとを何でも一つ叶えてあげる」

さやかの疑問にキュウベえは表情を変えずに答えた。

「え、ホント？」

「願いごとつて……」

「なんだつて構わない。どんな奇跡だつて起こしてあげられるよ」

まどかの言葉にキュウベえが答えた。

「金銀財宝とか、不老不死とか、満漢全席とか？」

「いや、最後のはちょっと」

「お前どんだけ貪欲だよ」

俺はたまらず突っ込んだ。

「でも、それと引き換えに出来上がるのがソウルジェム。この石を手にしたものは、魔女と戦う使命を課されるんだ」

俺の突っ込みを無視して淡々とキュウベえが説明を続けた。

「魔女？」

「魔女って何なの？魔法少女とは違うの？」

「願いから産まれるのが魔法少女だとすれば、魔女は呪いから産まれた存在なんだ。魔法少女が希望を振りまくように、魔女は絶望を蒔き散らす。しかもその姿は、普通の人間には見えないから性質が悪い。不安や猜疑心、過剰な怒りや憎しみ。そういう災いの種を世界にもたらしているんだ」

さやか疑問にキュウベえが答えた。

（プラスとマイナスか）

俺は心の中でそう考えていた。

もしかしたら魔女と言う存在は”世界にとって”必要なものなのかもしれない。

陰陽学がいい例だ。

同じ数だけの陰と陽があれば世界が安定すると言われているそれによるが。

でも言えない。

言ってしまうはおそらくこの場にいる全員の冷たい視線が贈られるからだ。

「理由のはっきりしない自殺や殺人事件は、かなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ。形のない悪意となって、人間を内側から蝕んでゆく」

真剣な面持ちで巴さんが説明する。

「そんなヤバイ奴らがいるのに、どうして誰も気付かないの？」
「魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね。さつき君たちが迷い込んだ迷路のような場所がそうだよ」
「結構、危ないところだったのよ。あれに飲み込まれた人間は、普通は生きて帰れないから」

俺はその言葉を聞いてぞっとした。
俺がどうなるかよりも、もしまどか達まで犠牲になった時の事を考えたからだ。

「マミさんは、そんな怖いものと戦っているんですか？」
「そう、命懸けよ。だからあなたたちも、慎重に選んだ方がいい。キュウベえに選ばれたあなたたちには、どんな願いでも叶えられるチャンスがある。でもそれは、死と隣り合わせなの」

まどかの言葉に、巴さんは表情を崩さずに忠告してきた。

「ふえ……」
「んー、悩むなあ」
「そこで提案んだけど、二人ともしばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」

悩んでいる二人に巴さんは突然そう提案してきた。

「「ええ？」」
「魔女との戦いがどういうものか、その目で確かめてみればいいわ。そのうえで、危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの」
「とじろでね」

さやかはそう切り出して、話題を変えた。

「あの転校生も、えっとその……魔法少女なの？マミさんと同じ」
「そうね。間違いないわ。かなり強い力を持つてるみたい」

さやかの仮説を巴さんは肯定した。

「でもそれなら、魔女をやっつける正義の味方なんだよね？それがなんで急にまどかを襲ったりしたわけ？」

「彼女が狙ってたのは僕だよ。新しい魔法少女が産まれることを、阻止しようとしてたんだらうね」

さやかの疑問にキュウベえが答えた。

確かにそれなら頷ける。

「何で？同じ敵と戦っているなら仲間が多い方がいいんじゃないの？」

「それが、そうでもないの。むしろ競争になることの方が多いのよね」

「そんな……どうして？」

俺はもうすでに読めていた。

競争になるということは倒したことに對しての報酬関連だらう。

「魔女を倒せば、それなりの見返りがあるの。だから、時と場合によつては手柄の取り合いになって、ぶつかるともあるのよね」

巴さんは目元を細めて不快なオーラを全開で答える。

「つまりアイツは、キュウベえがまどかに声掛けるって最初から目を付けてて、それで朝からあんなに絡んできたってわけ？」

「たぶん、そういうことでしょうね」

巴さんはそう言いながらソウルジェムに手をかざして、指輪のようなものに形を変えた。

「…………でもね」

とここで、俺は口を開いた。

「本当にあいつは悪いやつなのか？」

「何を言ってるの？あの転校生はキュウベえを襲ってたじゃないか！」

俺の言葉に、さやかが反論してくる。

「それはそうなんだが…………何だかこう、引つかかるんだよね」

もしかしたらあの一瞬の表情を見たからかもしれない。

俺はあの表情を見て、彼女が三人が想像しているような存在ではないかと思っっているのだ。

「確かに、渉君の言うとおりね。何でもかんでも疑ってかかるのは良くないわね」

すると、巴さんが俺の言葉に賛同した。

「あ、いや。もしかしたら俺の気のせいかもしれないですから」

俺はそう言ったものの、曉美ほむらと言つ存在が気になるのであった。

そしてこの日は別れることになった。

魔女退治が実際に始まるのは、明日の放課後らしい。

「まどか遅いな〜」

「また寝坊じゃないの?」

翌日、俺達はいつものように学園へと向かっていた。

「おっはよう〜」

「おはよ……うわっ!?!」

さやかがまどかを見た瞬間に声を上げた。

俺も一瞬あげそつになつたぐらいだ。

なぜなら……

「おはよう、さやか」

まどかの方に乗っているキュウベえがいたのだから。

「どこかしましたか？さやかさん」

驚いているさやかの様子を気にした仁美が、心配そうに声をかける。

「やっぱりそいつ、私達にしか見えないんだ」

「そうみたい」

ものすごい速さでまどかに近づくと、小声で話した。
と言うより、こっちにまで聞こえてるぞ。

「あの……」

「ああ、いや、何でもないから！いいこ、いいこ！」

不思議がる仁美を、さやかは強引に連れて歩き出す。

【頭で考えるだけで、会話とかできるみたいだよ】

頭の中にまどかの声が響いてきた。

【ええ？私達、もう既にそんなマジカルな力が？】

さやかは体を引きつかせていた。

まあ突然聞こえれば驚くよな。

ちなみに念のために言うが、俺は驚いてないぞ？

【いやいや、今はまだ僕が間で中継しているだけ。でも内緒話には便利でしょう？】

【何か変な感じ】

まどかとさやかは俺と仁美を置いて歩いて行こうとした。

【でも慣れれば便利じゃないか？】

ここぞとばかりに俺も参加する。
意外と面白い。

「お二人とも、さっきからどうしたんです？しきりに目配せしてますけど」

「え？いや、これは……あの……その……」

仁美の言葉にまどかはあからさまに動揺する。
それだと何かありましたって言ってるもんだよ？

バタン！

すると、案の定仁美はバッグを地面に落とした。

「まさか二人とも、既に目と目でわかり合う間柄ですか？！まあ！
たった一日でそこまで急接近だなんて。昨日はあの後、一体何が！
？」

「いや、そりゃねーわ。さすがに」

「確かに色々……あっただけだよ」

二人の否定ともいえない否定が飛んでくる。

「でもいけませんわ、お二方。涉さんと言う心に決めた人がいるの
に、女の子同士で。それは禁断の、恋の形ですよー！！」

仁美が走り出す。

それはまあいいとしよう。

しかしなぜか俺をの手をつかんで、だ。

「って、なんで俺の手をつかむ！？そして俺を引きずるな〜！！！！」

俺はまるで人形のように引きずられていくのであった。

「バッグ忘れてるよー！」

後ろからさやかの声が聞こえる。

それを言う前に助けてよ……。

ちなみにこの後……

「ああ……。今日の仁美ちゃん、何だかさやかちゃんみたいだよ」

「どーゆー意味だよ、それは」

と言うやり取りがあったとかなかったとか。

ちなみに仁美が俺を引きずっていることに気付いたのは、学校のクラスについた時だった。

彼女曰く、バッグと勘違いしていたらしい。

(俺の存在意義って、バックなのか?)

この時、本当に泣きそうになったのは秘密だ。

それからしばらくしてやってきたまどか達は仁美の方に駆け寄ると、謝っていた。

彼女は彼女でお怒りモード全開だし。

「災難だったねえ」

「大丈夫？ 渉君」

二人の真逆の言葉がかけられる。

ちなみに名誉のために言うと、上からさやか、まどかだ。

「ああ大丈夫だ。人間ジェットコースターを体験できたしね」

俺は皮肉交じりに答えた。

「ふう……」

【つーかさ、あんた、のこのご学校までついて来ちゃって良かったの？】

席に着くや否やキュウベえにさやかがテレパシーで話し掛ける。

【どうして？】

【言ったでしょ？ 昨日のあいっ、このクラスの転校生だって。あんな命狙われてるんじゃないの？】

【さやか、少しは考えろよ】

俺はたまらずにさやかにツッコんだ。

理由なんて簡単だ。

【渉、それってどういう】

【むしろ、学校の方が安全だと思うな。ママもいるし】

さやかの言葉を遮ってキュウベえが答えた。

つまりはそついう事だ。

【マミさんは3年生だから、クラスちょっと遠いよ？】

【ご心配なく。話はちゃんと聞こえているわ】

すると、突然巴さんの声が聞こえた。

【この程度の距離なら、テレパシーの圏内だよ】

なるほどな、そついう事が。

【あ、えっと……おはようございます】

まどかはあたりさわりのない挨拶をした。

【ちゃんと見守ってるから安心して。それにあの子だって、人前で襲ってくるようなマネはしないはずよ】

【なら良いんだけど……】

「あつ!?!」

その時、教室に暁美さんが入ってきた。

【げ、噂をすれば影】

そして暁美さんは席に着くや否や、まどかの方を……具体的には胸に抱かれているキュウベえを睨みつけた。

【気にすんなまどか。アイツが何かちよっかい出してきたら、私がぶっ飛ばしてやるからさ。マミさんだってついてるんだし】

【そつよ。美樹さんともかくとして、私が付いているんだから大

丈夫。安心して】

さやかの言葉に反応して巴さんが安心させるように言った。

【ともかくってゆーな!】

【ふ、結界で怖がっていた奴が　　】

【わくたくるゝ?後でちょっとお話ししようか?】

【ぜ、全力でお断りさせていただくです!!--!】

そんなこんなで、この日の授業が始まるのであった。

第3話 魔法少女（後書き）

ようやくアニメの第2話の前半部分が終わりました。
次回は後半部分に入っていきたいと思います。

それでは、また次回でお会いしましょう。

第4話 それは過去の偉大な人物の物語（前書き）

ようやく話が進んだような気が……

そして今回は、今後の展開に非常に重要なところでもあります。
感想ありがとうございます。

第4話 それは過去の偉大な人物の物語

昼休み、屋上に移動した俺とまどかにさやかは、優雅に昼食を摂っていた。

「はい」

「あむ」

いや、3人と1匹だった。

「ねえ、まどか。願い事、何か考えた？」

そんな時、唐突にさやかが口を開いた。

「ううん。さやかちゃんは？」

「私も全然。何だかなあ。いくらでも思いつくと思ったんだけどなあ。欲しい物もやりたい事もいっぱいあるけどさ、命懸けって所で、やっぱり引つ掛かつちゃうよね。そうまでする程のもんじゃないよなーって」

「うん……」

「意外だなあ。大抵の子は二つ返事なんだけど」

さやかの答えにキュウベえは顔色一つ変えずにそう反応した。

「まあきつと、私達がバカなんだよ」

「え……そうかな？」

さやかはベンチから立ち上がると、そのまま金網の所まで行った。

「そう、幸せバカ。別に珍しくなんか無いはずだよ？命と引き換えにしてでも、叶えたい望みって。そう言うの抱えている人は、世の中に大勢いるんじゃないのかな。だから、それが見付からない私達って、その程度の不幸しか知らないって事じゃん。恵まれ過ぎてバカになっちゃってるんだよ。何で……私達なのかな？不公平だと思わない？こうゆうチャンス、本当に欲しいと思っっている人は他にいるはずなのにね」

「さやかちゃん……」

その時だった。

突然暁美さんが現れたのだ。

俺とさやかはまだかをかばうように立ち上がる。

【大丈夫】

突然のテレパシーに俺達はふと横を見ると、少し離れた建物に巴さんらしき人影と光が見えた。

どうやら向こうが何かをしようとしたときは、攻撃をするという事だ。

そして一瞬暁美さんが横に目を配るとそのままスタスタと俺達の元に歩いてきた。

「昨日の続きかよ」

「いいえ、そのつもりはないわ。そいつが鹿目まどかと接触する前にケリをつけたかったけれど、今更それも手遅れだし。で、どうするの？ 貴女も魔法少女になるつもり？」

さやかという言葉に暁美さんはキュウウべえを見やるとそう答え、まどかに問いかける。

「私は……」

「あなたにとやかく言われる筋合いはないわよ！」

まどかの言葉を遮ってさやかが叫ぶ。

俺は事の成り行きを静観しているだけだ。

「昨日の話、覚えてる？」

「うん」

暁美さんの問いかけに、まどかは頷いた。

「ならいいわ。忠告が無駄にならないよう、祈ってる」

その答えに満足したのか、暁美さんはそのまま踵を返した。

「ほ……ほむらちゃん。あの……あなたはどんな願いごとをして魔法少女になったの？」

まどかの疑問に、暁美さんは一瞬こっちの方を見る。

「あ……」

まどかが声を上げた。

俺にもわかった。

彼女の表情がものすごく、悲しげだったことに。

しかし、すぐにそのまま背を向けて去って行った。

「何なの？あいつ」

さやかがぶとつぶやく。

見れば巴さんの姿もなかった。

「……………二人に歴史の話でもしようか？」

「ふえ！？」

「な、なぜにそこで歴史？」

俺の突然の提案に、すかさずさやかつつこみが入る。

「いやいや、悩んでいる二人にはいい道しるべになるものだ」

二人はお互いに顔を見合わせると、そのままさっきのようにベンチに腰かけたのを見て、俺はそれを承諾と捉えもといた場所に座ると話を始めた。

「何かしらかの偉大な事をした者は、歴史に名を刻むことになる」

「それって坂本 馬みたいなの？」

さやかの返しに、俺は苦笑いを浮かべながら頷く。

（なんでそこで出てくるのが竜 なんだ？）

「これは、偉大なことをやったのに名を残せなかった無名の偉人の話だ」

そして俺は歴史を話し始める。

時代は古代ヨーロッパ時代。

とある国にある孤児院のような場所にとある少年がいた。

少年は幼いころに両親を亡くし、友達もいないという孤独だった。周りの者たちも彼に近づく者はいなかった

そんな少年にある転機が訪れる。

それは少年のいる孤児院を襲った立てこもり事件だ。

犯人の数は3人。

全員がライフル銃を構えていた。

人質になったのは孤独な少年だった。

それ以外の者達は、少年をおいて逃げ出してしまったのだ。

警察も人質の安全のために、突入が出来ずにいた。

そんな膠着状態を崩したものがいた。

それが人質になっていた少年だった。

とは言え、何をしたのかと言えば、隠し持っていたはさみを無我夢中で突き刺したことだった。

突き刺したのは立てこもり犯の首謀者。

首謀者は瀕死の重傷を負ったが、それによって形成の崩れた犯人グループは一網打尽で逮捕された。

そして少年はそのまま病院へと収容されたが、それからしばらくして、彼の周囲は一変した。

少年をほめたたえる物がいたのだ。

その理由は少年の勇猛果敢なところと、逮捕した犯人グループがその国で最も脅威となっていたグループであったことにあつた。

少年はそれを見て、こう思った。

『悪い人をいっばい倒せば、孤独じゃなくなる』と。

そして少年はその後トレーニングを欠かさなかった。
体を鍛え、剣術を学んでいった。
そして頼まれるがままに少年は、悪人を殺していった。
殺した悪人の数に応じて集まる人が激増した。
そして何時しか彼は”英雄”と称えられた。

「英雄かあ」

「いいよね、あたしも呼ばれてみたいな、英雄って」

俺の話を途中まで聞いていたまどかとさやかは英雄と言う単語に反応した。

「……だったら良かったのだから」

「??」

「それってどういう」

俺の呟きに反応した二人をしり目に、俺は話を続けた。

英雄と呼ばれた彼はさらに悪人を消していった。

そして少年が18才になった時、彼の周りは常に人であふれていた。だからこそ少年は天狗になってしまった。

大を救うためならば小を切り捨てるという考え方になっているのに気付かなくなってしまうことが、転落の幕開けだった。

そんなある日だった。

それはあるテロ組織が役場のような場所に対する攻撃事件だった。

少年は当然のごとくそのテロ組織の殲滅を命じられたのだ。

そして少年がテロ組織の一味と接触した時だった。

その中に少年の友人が武装をしていたのだ。

これは後程分かったことだが、このテロ組織は洗脳をして人員を増やしていったらしい。

つまり、その友人は操られていたのだ。

この時少年は考えた。

一人の友人を失ってもこのテロ組織を撃退すれば寄ってくる人は、数十人にも及ぶ、と。

そして少年は何のためらいもなく友人を切り捨てた。

その後、任務を無事に終え戻ってきた少年を待っていたのは、周りの者達からの畏怖の目だった。

それもそのはずだ。

ほんのちよつとしたことが理由で自分たちまでもが殺されるのが怖いからだ。

そしてそれからしばらくして少年は村人たちに暗殺された。

「
そしてその少年は、どことも知れない土地
に無造作に埋められたのだった。めでたしめでたし」
「あうう……………」
「……………」

俺の話聞き終えたまどか達は何も言わない。
いや、周りの雰囲気重い。

「ゴホンッ！つまり俺が言いたいの、願い事をするときはその
後のマイナスも考えろと言っことだ」
「いやそれだけの為にここまで雰囲気暗くしたのかい!？」

さやかがツツコンでくる。
「そうだけ何か？重くさせないと実感わかないでしょ？」
「いや、だからってあんたね」

その時、予鈴が鳴った。

「あ、昼休み終わった。」
「そうだね、ってあたしお昼食べてない!?!?!?」

学校中にさやかのむなしい叫び声が響き渡った。

放課後、俺とまどかにさやかの3人は先日寄ったファミレスで巴さんと合流した。

「さて、それじゃ魔法少女……魔女退治体験コース第一弾、張り切っていつてみましょうか。」

俺がいるのに気付いて言い直してくれた巴さんの優しさに、俺は涙が出そうだった。

「みんな準備はいい？」

「準備になってるかどうかわからないけど……持って来ました！何も無いよりはマシかと思って」

さやかが取り出したのは、金属バットだった。

「まあ、そういう覚悟でいてくれるのは助かるわ」

「でも、あんましそう言うのはこついうところを出すのはやめような」

俺はさらっと注意した。

こんな所で物騒なものを掲げるなんて、信じられない。

「ま、まどかは何か、持って来た？」

「え？えっと。私は……」

そう言ってまどかが取りだしたのは一冊のノート。
そこに書かれていたのは、何とも言い難いイラスト集だった。

「うーわー」

それを見たさやかと巴さんが呆然としているほどだ。

「と、とりあえず、衣装だけでも考えておこうと思って」

その瞬間、二人は思いつきり笑い始めた。

「え?!ふええ!?!」

それを見たまどかは恥ずかしさのあまりに、俯いていた。

「うん、意気込みとしては十分ね」

「こりゃあ参った。あんたには負けるわ」

「どうやらまどかは形から入るタイプらしいな」

「~~~~~!!!!!!」

「そういう渉は何か持ってきたの?」

笑いを収めながらさやかか聞いてきたので、俺は待つてましたと言わんばかりにバックからある物を取り出し、それをテーブルの上に置いた。

「…………それは?」

俺はその問いかけに答えるように包みを解いていった。

「神剣です」

「いやいやいや!? あんたの方がよっぽど物騒だよ!!--と言っよ
り真剣!!--?」

さやかはツツコミが入った。

他の二人も啞然としていた。

「いや、剣術だったら自信があるんですよ俺。と言っことで、まど
かいる?」

「い、いらぬよ!!--!」

剣を差し出したら拒否された。

「あ、大丈夫だよ。だつて……」

俺はそう言いながら、カバンの中に手を入れた。

「もう一本あるし」

「二本もあるんかい!!--?」

この日何度目か分からないさやかのツツコミが入った。

ちなみに、この日のまどかのノートは完全な黒歴史と化してしまっ
た。

まあ当然だろうけど。

こうして俺達の魔法少女もとい、魔女退治体験ツアーは幕を開けた。

第4話 それは過去の偉大な人物の物語（後書き）

この中で登場した歴史話は、某ゲームの人物とは全く関係ありません。

ちなみに誤字だと思われるような場所がありますが、誤字ではありません。

そして次回は魔女退治ということになりそうです。
それでは、次回でお会いしましょう

第5話 魔女退治体験ツアー（前書き）

今回の見せ場はマミさん8割、渉が2割です。

第5話 魔女退治体験ツアー

喫茶店を後にした俺達は、昨日魔女がいた場所まで来ていた。

「これが昨日の魔女が残していった魔力の痕跡。基本的に、魔女探しは足頼みよ。こうしてソウルジェムが捉える魔女の気配を辿ってゆくわけ」

「意外と地味ですね」

「地味だからこそ意味があるんだろ？」

すぐに見つかつたら楽だけど、なんかつまらないし。

そんなもの犯人がすでに分かっている、推理小説を見ているようなものだ。

「そりゃそうだけどさ……」

「さ、行くわよ」

巴さんの一声で俺達は魔女の搜索を始めるべく、巴さんの後をついて行く。

ちなみにさやかのかの片手には武器である金属バットが握られていた。

俺はと言えば、さすがにあれは危険だということでもOKが出るまでバックの中で出番待ちだ。

「光、全然変わらないっすね」

「取り逃がしてから、一晚経っちゃったからね。足跡も薄くなってるわ」

「あの時、すぐ追いかけていたら……」

巴さんの言葉にまどかが申し訳なさそうに声を上げた。

「仕留められたかもしれないけど、あなたたちを放っておいてまで優先することじゃなかったわ」

「ごめんなさい」

「いいのよ」

「そうそう、胸を張って生きるよ」

「いや、それ微妙に意味違うから」

俺にさやかのおツツコミが入った。

「うん、やっぱりママさんは正義の味方だ！それに引き換えあの転校生……ホントにムカつくなあ！」

「……………」

おそらくだが、暁美さんとさやかは確実に相性が合わないのだろう。

「ねえ、ママさん。魔女の居そうな場所、せめて目星ぐらいは付けられないの？」

「魔女の呪いの影響で割と多いのは、交通事故や傷害事件よね。だから大きな道路や喧嘩が起きそうな

歓楽街は、優先的にチェックしないと。あとは、自殺に向いてそうな人気のない場所。それから、病院とかに取り憑かれると最悪よ。ただでさえ弱っている人たちから生命力が吸い上げられるから、目も当てられないことになる」

さやかの疑問に、魔力反応を探しながら巴さんが答えた。
その時、巴さんのソウルジェムの輝きが増した。

「かなり強い魔力の波動だわ。近いかも」

「このあたりで自殺に向いてそうな場所は……」

「そういえば、向こうの方に取り壊しが決定された廃墟ビルがあったよな」

俺はこの間道に迷っていた時に見た廃墟ビルを思い出した。

「そこだ！」

「急ぎましょ！……涉君、案内をお願い」

こうして俺を先頭に、廃墟ビルへと向かった。

「間違いない。ここよ」

廃墟ビルの前にたどり着き、ソウルジェムの輝きを確認した巴さんがそう呟いた瞬間だった

「あ、マミさんあれ！」

さやかが屋上の方に指を指す。

その方向を見ると、飛び降りてくる人影があった。

「うわ！？」

「きゃー！！」

最悪な結果を想像したまどかが悲鳴を上げながら目を閉じた。しかし、巴さんだけは変身しながら落ちてくる場所まで移動していた。

「はッ！」

そして片手を上空に掲げると落ちてくる人 女性 を守るかのよう
に黄色いリボンが女性を受け止めた。
そして俺達は女性の元に駆け寄った。

「魔法の口づけ……やっぱりね」

首筋に複雑な模様が描かれていた。
どうやらこれが魔法の口づけらしい。

「この人は？」

「大丈夫。気を失っているだけ。行くわよ」

まどかの問いかけに答えると、巴さんはビル内へと向かったため、俺達もそれについて行く。

中は特に変わったところもない。

しかし、正面の階段のところには何かがあった。

「今日こそ逃がさないわよ。それと、渉君もそろそろ出してもいい
と思うよ」

「あ、それじゃ」

俺は巴さんのOKが出たのはバックの中から二本の神剣を取り出し

た。

すると、巴さんは片手で二本の神剣とさやか**の**バットに手を添えた。その瞬間さやか**の**バットがカラフルな武器に変わり、俺の神剣は神々しい光を發した。

「うわ、うわー」

「すげー」

そのあまりの変わりようにさやかとまどかが感嘆の声を上げた。

俺と言えば、別に強化しなくても平気なんだがと思っていたりした。

「気休めだけど。これで身を守る程度の役には立つわ。絶対に私の傍を離れないでね」

「はい」

「はい！」

「分かりました」

巴さんの注意に俺達は一斉に頷いた。

そして巴さんとさやかにまどか**は**蝶のような模様のある光の中へと姿を消した。

「ん？」

そんな中、俺はある人物の気配を感じていたが、すぐに光の中へと入った。

結界内で俺達を待っていたのは、蝶のようなものだった。目の前に現れた蝶を巴さんはマスコット銃で撃っていく。一方こっちにいる蝶は。

「うわ！来るな！来るな！！」

さやかかビビり腰でバットをふるう。

「伏せてさやか、まどか！」

俺はさやかたちにそう告げると、神剣の一本正宗を横に一閃した。一瞬の光の後、俺達の周りにいた蝶は姿を消していた。

「す、すい」

「なかなかやるわね」

「素質はあるんだけどね」

三者三様の称賛の声が、微妙に心地よい。だが、こんなもの俺にとってみればお遊戯会レベルだ。

「どう？怖い？三人とも」

「な、何てことねーって！」

走りながらかけられた巴さんの言葉に、さやかは若干ドモリながら答えた。

そして再び俺達を片手で制すとその先には複数の蝶がいた。

それを巴さんは先ほどと同じように、マスコット銃で撃っていく。

しかしその撃ち逃したものが俺達の背後で集まるが、俺の一閃で消滅させた。

「頑張つて。もうすぐ結界の最深部だ」

走っているときゅうべえから声がかげられた。

あと少して大ボスの場所らしい。

そして髭動物を巴さんのマスケツト銃の連発により一気に消し去ると複数のドアをくぐり、広場にたどり着いた。

そこに存在していたのは、言葉では語れない程不気味な生命体だった。

おそらくあれが魔女なのだろう。

「見て。あれが魔女よ」

「う…グロい」

どうやらさやかも俺と同じことを感じていたようだ。

と言うよりこれが可愛いっていう奴はいないだろうが。

「あんなのと…戦うんですか？」

「大丈夫。負けるもんですか」

巴さんはそう言うと、さやかからバッドを取るとそれを思いつきり地面に叩き付けた。

その瞬間俺達の周りに、膜のようなものが形成された。

「下がってて」

そして巴さんは魔女の前に躍り出た。

そして何かを踏んづけると、魔女は巴さんの方を見た。

巴さんがスカート裾を持ち上げると、そこからマスケツト銃が二丁出てきた。

その銃で魔女が投げつけた椅子のようなものを避けて撃った。さらに帽子から大量のマスケット銃を出すと、空中を飛んでいる魔女に向けて撃っては捨て、また別の銃を手にして打つというのを繰り返す。

しかし魔女に集中していたため、地面にある何か黒いロープへと姿を変えて巴さんを逆さづりにする。

その状態で巴さんは魔女に向けてマスケット銃を撃つが、それはすべて外れてしまった。

そしてそのまま壁に叩き付けられる。

「あつ……マミさん！」

それを見たさやかが悲痛な声を上げる。

だが、当の巴さんは

「大丈夫。未来の後輩に、あんまり格好悪いところ見せられないものね」

まだその表情には余裕があった。

その次の瞬間、先ほどの銃の着弾場所から黄色のひものようなものが伸びた。

それはやがて、魔女を縛りつけた。

「惜しかったわね」

一気に有利となった巴さんは胸元のリボンを解くとそれを使ってロープを切った。

さらにそれを使って巨大なマスケット銃を作り出した。

「ティロ・ファイナーレ!!!」

そしてそれを魔女に向けて容赦なく撃った。
そして魔女は消滅した。

巴さんは地面に優雅に着地すると、どこから出したのかティーカップをキャッチした。
そしてそれに口を付ける。

「あ、勝ったの？」

「すごい……」

その瞬間、周りの景色がぐにやりと揺れると元の場所なのか、景色が元に戻った。

すると、巴さんは一人で歩いて、腰をかがめると何かを拾った。

「これがグリーンフシード。魔女の卵よ」

「た、卵」

「運がよければ、時々魔女が持ち歩いてることがあるの」

魔女の卵と聞いてさやかが顔をしかめるが、巴さんは説明を続けた。
グリーンフシードと言うものは真っ黒の物だった。

「大丈夫、その状態では安全だよ。むしろ役に立つ貴重なものだ」

怯えているさやかに気付いたのか、キュウベえがそう説明した。

「私のソウルジェム、ゆうべよりちょっと色が濁ってるでしょう？」

「そう言えば……」

「確かに」

巴さんのソウルジェムは心なしか、先日より輝きが無くなっているようにも見えた。

「でも、グリーンフシードを使えば、ほら」
「あ、キレイになった」

ソウルジェムから黒い靄……おそらく穢れが浮き上がると、それはグリーンフシードに吸い込まれた。

「ね。これで消耗した私の魔力も元通り。前に話した魔女退治の見返りってというのが、これ」

巴さんはそう説明すると、誰もいない場所に向けてグリーンフシードを投げつけた。

すると、誰もいないはずなのにキャッチした音が聞こえた。

「あと一度くらいは使えるはずよ。あなたにあげるわ。暁美ほむらさん」

姿を現したのは 暁美さんだった。

「あいつ……」

先ほど感じた気配は彼女の物だったようだ。

「それとも、人と分け合っくんじゃ不服かしら？」

「貴女の獲物よ。貴女だけの物にすればいい」

巴さんの言葉に、暁美さんはそう答えると、グリーンフシードを投げ返した。

「そう。それがあなたの答えね」

それを受け止めた巴さんはいつになく険しい表情で暁美さんを睨みつける。

そして暁美さんはそのまま姿を消した。

「くうー！やっぱり感じ悪いやつ！」

姿が消えるのと同時にさやかが声を上げる。

「仲良くできればいいのに」

「お互いにそう思えば、ね」

まどかの呟きに、巴さんが苦笑いを浮かべながら答えた。

「思う努力もしてないくせに」

俺はついつい本心を口に出してしまった。

「何かしら？ 渉君」

「あ、言え、こっちの話です」

その後、自殺をさせられた女性が目を覚まし、巴さんは体を震わせている女性を宥めているのを見ていた。

「一件落着、って感じかな」

「うん」

こうして俺達の魔女退治体験ツアー第1回目は幕を閉じたのだった。

第5話 魔女退治体験ツアー（後書き）

ということ、第2話終了です。

次回は日常編になる予定です。

感想や、アドバイス等お待ちしております。

それでは、次回でお会いしましょう

第6話 悲劇の前触れ（前書き）

毎回感想をありがとうございます。

さて、今回はあのシーンの序章ともいって話を話します。

第6話 悲劇の前触れ

あの魔女退治体験ツアー初日から数日後、俺達は今日もまた何度目かもわからないツアーに参加していた。

「ティロ・フィナーレ!!」

そして今夜も、巴さんの必殺技『ティロ・フィナーレ』により魔女は消滅し、元の景色へと戻った。

「いやー、やっぱりママさんってカッコイイねえ!」

「もう、見世物じゃないのよ。危ないこととしてるって意識は、忘れないでいてほしいわ」

さやかにそう言いながら街灯の上から飛び降りた。

「いえーす!」

そしてさやかはさやかで全く分かってないようだし。と、その時キユウベえがこちら側に走ってくる、自然な動作でまどかの肩の上に移動した。

「あ、グリーンフシード、落とさなかったね」

「今のは魔女から分裂した使い魔でしかないからね。グリーンフシードは持ってないよ」

「魔女じゃなかったんだ」

「何か、ここんとこずっとハズレだよ」

確かにさやかの言うとおりだ。

あの初日以来魔女ではなく使い魔が出てきていた。どうやらグリーンフィードは魔女だけが持っているらしく、使い魔は持っていないらしい。

「使い魔だつて放っておけないのよ。成長すれば分裂元と同じ魔女になるから」

「……とりあえず、お疲れ様でした」

俺は巴さんに労いの言葉をかけた。

「ふふ、ありがとね、渉君。さあ、行きましょう」

笑みを浮かべた巴さんの言葉で、俺達はその場を後にした。

「二人とも何か願いごとは見つかった？」

しばらく歩くと、巴さんはまどか達に尋ねた。

「んー……まどかは？」

「うーん……」

「まあ、そういうものよね。いざ考えろって言われたら」

答えられずに悩んでいる二人に、巴さんは苦笑いを浮かべながらフオローした。

「ママさんはどんな願いごとをしたんですか？」

まどかがそう尋ねた瞬間、巴さんは歩くのをやめた。

「いや、あの、どうしても聞きたいってわけじゃなくて」

「私の場合は……考えている余裕さえなかったってだけ」

そして巴さんは、自分の願い事について話し始めた。

巴さんが小さいころ、家族での旅行の時に巻き込まれた事故。

両親は即死、巴さんは重症だった。

そんな時に現れたのがキユウベえで、彼女は助かることを願い契約した。

「後悔しているわけじゃないのよ。今の生き方も、あそこで死んじやうよりはよほどよかったと思ってる。でもね……ちゃんと選択の余地のある子には、キチンと考えたうえで決めてほしいの。私にできなかつたことだからこそ、ね」

「ねえ、マミさん。願い事って自分の為の事柄でなきゃダメなのかな？」

少々暗くなった雰囲気の所に、さやかが疑問を投げかけた。

「え？」

「例えば、例えばの話なんだけどさ、私なんかより余程困っている人が居て、その人の為に願い事をするのは……」

「それって上条君のこと？」

さやかの例えと言う言葉に、まどかが誰の事が分かったのか名前を言った。

「上条って……ああ、さやかのす」「た、例え話だつて言ってるじやんか！」「」

今ので絶対に凶星だと思う俺なのであった。

「別に契約者自身が願いたい事の対象になる必然性はないんだけどね。前例も無い訳じゃないし」

「でもあまり関心できた話じゃないわ。他人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせておかないと。美樹さん、あなたは彼に夢を叶えてほしいの？それとも彼の夢を叶えた恩人になりたいの？」

「マミさん……」

巴さんのきつい言葉に、まどかは少しばかり驚いているようだった。

「同じようでも全然違うことよ。これ」

「その言い方は……ちょっと酷いと思う」

「ごめんね。でも今のうちに言っておかないと。そこを履き違えたまま先に進んだら、あなたきつと後悔するから」

さやかか反論に、巴さんはそう返した。

「別に人のためにすることが悪いとは言わないが、無名の偉人のようにはなるなよ」

ついでに俺も忠告しておいた。

無名の偉人。

それは前に二人に話した、最悪と言ってもいい英雄の事だ。目の前の利益に飛びつき、友すらも蔑ろにした奴のだ。

「……そうだね。私の考えが甘かった。ゴメン」

「さやかか考えが甘い何て、いつもじゃないか」

「何だっ！！」

俺の茶々にさやかは過敏に反応した。

「やっぱり、難しい事柄よね。焦って決めるべきではないわ」

「僕としては、早ければ早い程いいんだけど」

「ダメよ。女の子を急かす男子は嫌われるぞ」

巴さんの一言で、笑いが俺達を包んだ。

と言うより、キュウベえって、オスなのか？

こうして、俺達は帰路へと着くのであった。

さて、今俺が何をしているのかと思えば、巴さんへのストーキングだ。

もちろん理由はある。

彼女に曉美さんと話し合う機会を設けるように、提言するためだ。

話し合いもせずに敵にするというのは、あまりにも愚かで馬鹿げたことだからだ。

しかし、話し掛けようにも彼女は魔女の探測中。

声をかけることもできないまま、公園の広場まで来ていた。

「……………」

すると、巴さんはソウルジェムを指輪の姿にした。

(気づかれたか!?)

そう思った時だった。

「分かってるの？」

その声は、暁美さんの物だった。

(どういうことだ？さっきまで彼女はいなかったはず)

「貴女は無関係な一般人を危険に巻き込んでいる」

「彼女たちはキュウベえに選ばれたのよ。もう無関係じゃないわ」

俺の動揺を無視して二人はさらに話を進める。

「貴女は二人を魔法少女に誘導している」

「それが面白くないわけ？」

「ええ、迷惑よ。特に鹿目まどか」

暁美さんから再びまどかの名前が出てきた。

「ふうん……そう、あなたも気づいてたのね。あの子の素質に」

まどかの名前が出た瞬間、巴さんは目を細めた。

それが俺には、挑発のようにも見えた。

「彼女だけは、契約させるわけにはいかない」

「自分より強い相手は邪魔者ってわけ？いじめられっ子の発想ね」

その瞬間、暁美さんを中心に、とてつもない威圧感が湧き上がった。

「貴女とは戦いたくないのだけれど」

自分の髪を払いながらそう告げた。

「なら二度と会うことのないよう努力して。話し合いで事が済むのは、きつと今夜で最後だろうから」

そう言っつて巴さんは暁美さんに背を向けて歩き出した。

「あはははは！……！！」

「「ッ！……！！」

俺はそれを見て、自分の状況も忘れて思わず笑ってしまった。

「話し合いって……それが話し合いに入ると思ってるのか？」

「……渉君、どうしてここに？」

「巴 マミよ、今のお前、完全に悪役だぞ。暁美 ほむらの言葉に耳を傾けず、彼女を最初から悪者として話している。こんなんじやどこまで行っても平行線だ。まあ、彼女は彼女で何かを隠しているようだけど」

俺は巴さんの疑問を無視して話した。

「……女の子の後を付けるのは、あまり褒められた行為じゃないわね。今日は許すから、次は気を付けてね」

巴さんは俺の言葉に、論点をすり替えて注意をすると、そのまま去って行った。

「……んで、お前にも聞きたいことがある」

「……」

俺の言葉に、暁美さんは何も反応をしない。

「なぜそこまで彼女にこだわる？」

「……………」

俺の問いかけに、暁美さんは何も言わない。

「……………はあ。言う気はないってか」

俺はその様子にため息を付きながら言った。

「彼女……………まどかを守ってあげて」

「……………まあ、できる限りは努力しよう」

突然の暁美さんの頼みに俺はそう答えた。

俺にはこの願いが彼女の目的の本質だと悟ったからだ。

「そう」

そして次の瞬間には、彼女の姿はなかった。

「……………帰るか」

そして、俺も帰路に就くのであった。

翌日、俺とまどかはさやかの上条と言う奴へのお見舞いに付き合うために、病院のロビーにいた。

「はあ……。よう、お待たせ」

しばらくして、ため息をつきながらさやかが戻ってきた。

「あれ？上条君、会えなかったの？」

「何か今日は都合悪いみたいで」

外に出ても文句を言っているさやかだが、突然まどかが立ち止まると、一点を見ていた。

「わざわざ来てやったのに、失礼しちゃうわよね」

「あそこ……。何か……」

まどかの言葉に、俺達はまどかの見ている方を見る。

「グリーンフシードだ！孵化しかかってる！」

「嘘……。何でこんなところに」

キュウベえの言葉に、俺達はさらに近づくと、それは確かに魔女の卵のグリーンフシードだった。

「マズいよ、早く逃げないと！もうすぐ結界が出来上がる！」

「またあの迷路が？……。まどか、マミさんの携帯、聞いてる？」

「え？うつん」

さやかの問いかけにまどかは顔を横に振った。

そういえば俺達はいつも放課後に合流していたし、有事の際はとテレパシーで事足りていたから携帯の番号を聞くのを忘れていたのだ。

「まずったなあ。まどか、渉。先行ってマミさんを呼んで来て。あたしはこいつを見張ってる」

「そんな！」

さやかの提案にまどかが声を上げた。

「無茶だよ！ 中の魔女が出てくるまでにはまだ時間があるけど、結界が閉じたら君は外に出られなくなる。マミの助けが間に合うかどうか……」

「あの迷路が出来上がったら、こいつの居所も分からなくなっちゃうんでしょ？放っておけないよ。こんな場所で」

キユウベえの反対にさやかは頑なに意見を変えなかった。

「まどか、渉。先に行ってくれ。さやかには僕が付いている。マミならここまで来れば、テレパシーで僕の位置が分かる。ここでさやかと一緒にグリーンフシードを見張っていれば、最短距離で結界を抜けられるよう、マミを誘導できるから」

「ありがとう。キユウベえ」

「私、すぐにマミさんを連れてくるから」

「死ぬなよ！」

俺とまどかはそう言って巴さんを探しに走った。

「まどか！そこを右！！」

「え！？なんで?!」

俺の指示にまどかが驚いた様子で聞いてきた。

「勘だ！俺の勘は良く当たる！！」

俺はそう答えて、曲がり角を右に曲がった。

俺達は巴さんを探すために走った。

だが、俺は知らなかった。

これが巴さんにとって最後の戦いになるという事を。

第6話 悲劇の前触れ（後書き）

さて、次回は……

おそらく皆さんには何があるのかが分かっているかと思います。

引き続き感想をお待ちしております。

それでは、次回でお会いしましょう。

第7話 悲劇（前書き）

Magica様、感想ありがとうございます。
これからも更なる努力をしていきます。

さて、今回はあの場面です。

第7話 悲劇

巴さんを探すこと数十分。

比較的早くに見つけることが出来た。

病院に戻った時にはすでに夕方になっていた。

巴さんは昨日の事でまだ起こっているようだったがそのことを口には出さなかった。

まあ視線がかなり痛かったが。

「ううね」

バッグを地面に置いてグリーンフシードがあつた場所を見る。

そして巴さんはそこに手をかざした。

すると、グリーンフシードがあつた壁にあの門のような物が現れた。

【キュウベえ、状況は？】

【まだ大丈夫。すぐに孵化する様子はないよ】

キュウベえから現状を聞いた。

それによれば、まだ予断は許さない状態らしい。

【さやかちゃん、大丈夫？】

【平気平気。退屈で居眠りしちやいそう】

まどかの心配そうな声に、心配させまいとわざとか、それとも素でそんなのは分からないが、元氣そうに答えた。

【むしろ、迂闊に大きな魔力を使って卵を刺激する方がマズい。急がなくていいから、なるべく静かに来てくれるかい？】

【分かったわ】

キュウベエの指示を聞いて、俺達は結界内に入った。

結界内はいつもと同じように異色だった。

瓶の中に入っているはさみやら周りがお菓子だらけと言つ事やらがそれを物語っていた。

「間に合つてよかった」

まどかの手を引きながら、巴さんは前へと進む。

「無茶し過ぎ……って怒りたいところだけど、今回に限っては冴えた手だったわ。これなら魔女を取り逃がす心配も……」

巴さんがこっちを振り向くと、話すのをやめた。

俺とまどかは巴さんにならつて後ろを振り向くと……

「え？あつ」

そこにいたのは暁美さんだった。

「言ったはずよね？二度と会いたくないって」

巴さんは敵意をむき出しに声をかけた。

「今回の獲物は私が狩る。貴女達は手を引いて」

「そうもいかないわ。美樹さんとキュウベえを迎えに行かないと」

暁美さんの提案を巴さんが退けた。

「その二人の安全は保証するわ」

「信用すると思ってる?」

巴さんがそう言って暁美さんに手をかざすと、黄色のロープのようなものが現れて、暁美さんを縛り上げた。

「ば、馬鹿。こんなことやってる場合じゃ」

「もちろん怪我させるつもりはないけど、あんまり暴れたら保障しかなるわ」

「今度の魔女は、これまでの奴らとはわけが違う」

「おとなしくしていれば帰りにちゃんと解放してあげる」

「お、おいちよっと待ってよ!」

俺は巴さんに慌てて話し掛けた。

「今日は彼女を信用してみたらどうだ?それで今後の対応を考えても遅くないと思うけど」

「……………」

俺の言葉を聞いた巴さんは初めて俺に対して敵意をむき出しにして睨みつけた。

「なっ!?!?ぐうッ!」

そして俺に手をかざしたかと思うと、俺は暁美さんのように縛られ

ていた。

「ごめんなさいね。時間がないの。ちょっと邪魔だからそこでおとなしくしていれば彼女と一緒に開放してあげるわ。行きましよう、鹿目さん」

「え……あ、はい」

俺は二人が去っていくのを見ていることしかできなかった。

(何だか頭に来た)

待っているとどんどん怒りがわいてきた。

俺はさつき何をした？

彼女を信用しろと説得した。

それなのに、この仕打ちは俺の怒りを沸かせるのに十分だった。

「……はっ！……！」

俺は気を放って体中にまきつくロープを砕いた。

「なっ！？」

暁美さんが驚く声が聞こえるが、俺は暁美さんに『彼女の事は任せて』と告げるとそのまま二人の歩いて行った方向へと、全速力で走

った。

勘で走つてすぐに魔女がいる場所へと辿り着いた俺が見たのは

「ティロ・フィナーレ!!」

彼女の十八番でもある『ティロ・フィナーレ』を放った巴さんだった。

(よし、戻ったら文句でも言つてやる)

俺はそう心の中で考えている時だった。

巴さんが打ち抜いた魔女から大きな生命体が現れて、それが一気に巴さんの目前に迫った。

「なっ!!!?!」

そしてその生命体は、口を大きく開いて巴さんを飲み込もうとしていた。

俺は慌てて巴さんの方へと掛けて行った。

3人称Side

結界の中にマミとまどかが入って数十分。

結界のあつた場所には人影があつた。

しかし、その中に巴 マミと小野 渉の姿はなかつた。

Side out

第7話 悲劇（後書き）

今回は、賛否両論な展開になってしまいました。

それでは、次回でお会いしましょう

第8話 風穴（前書き）

少々間が開いてしまいすみません。

第8話になります。

ママさんのファンのかた、本当にすみません。

第8話 風穴

翌日、俺達はいつものように通学路を歩いていった。

「でもってー、ユウカったらさー、それだけ言ってもまだ気付かないのよ。『え、何？また私変な事言っただー？』とか半べそになっちゃってー。こっちはもう笑い堪えるのに必死でさー！」

【さやかちゃん、昨日のこと……】

【ゴメン、今はやめよう。また後で】

まどかのテレパシーにさやかはそう返すと仁美の横を歩く。たった一つ変わったのは、巴さんがいない事だろう。

昼休み、俺とまどかは屋上のベンチに腰かけていた。

「……………」

「……………」

二人は無言だった。

「ん？」

「何か……違う国に来ちゃったみたいだね。学校も仁美ちゃんも、昨日までと全然変わってないはずなのに。何だかまるで、知らない人たちの中にいるみたい」

まどかがぼつぽつと話し始めた。

「知らないんだよ、誰も」

「え？」

するとさやかが突然そんな事を言い始めた。

「魔女の事、マミさんの事、あたし達は知ってて、他のみんなは何も知らない。それともう、違う世界で違うものを見て暮らしているようなもんじゃない」

「さやかちゃん……？」

「とつくの昔に変わっちゃってたんだ。もっと早くに気付くべきだったんだよ、私達」

「……う、うん……」

さやかの言葉にまどかは頷いた。

「まどかはさ、今でもまだ魔法少女になりたいって思ってる？」

さやかの問いかけに、まどかは地面を見るだけだったが、それには強い拒否を示していた。

「……そうだよ。うん、仕方ないよ」

「ずるいつてわかつてるのに……今さら虫が良すぎだよ。でも……無理……私、あんな死に方……今思い出ただけで息が出来なくなっちゃうの。怖いよ……嫌だよ」

まどかは涙を流しながら呟いた。

俺は無言でまどかの頭に手を置いた。

「マミさん、本当に優しい人だったんだ。戦う為にどういう覚悟が

いるのか、私達に思い知らせる為に……あの人は……ねえキュウベえ？この町、どうなっちゃうのかな？マミさんの代わりに、これから誰がみんなを魔女から守ってくれるんだろう」

「長らくここはマミのテリトリーだったけど、空席になれば他の魔法少女が黙ってないよ。すぐにも他の子が魔女狩りのためにやってくる」

さやかの間いかけにキュウベえが答えた。

「でもそれってグリーンフィードだけが目当てな奴なんですよ？あの転校生みたいに」

「確かにマミみたいなタイプは珍しかった。普通はちゃんと損得を考えるよ。誰だって報酬は欲しいさ」

暁美さんの事を未だに転校生と言っていることが、さやかが暁美さんを嫌っていることの表れだった。

「じゃ」

「でも、それを非難できるとしたら、それは同じ魔法少女としての運命を背負った子だけじゃないかな」

続きを言おうとしたさやかに、キュウベえの厳しい言葉がかけられた。

「君たちの気持ちは分かった。残念だけど、僕だって無理強いはできない。お別れだね。僕はまた、僕との契約を必要としてる子を探しに行かないと」

「ごめんね、キュウベえ」

キュウベえにまどかが謝った。

「こつちこそ。巻き込んで済まなかった。短い間だったけど、ありがとう。一緒にいて楽しかったよ、まどか」

キュウベえはそう言って姿を消した。

放課後、俺とまどかは巴さんのマンションに来ていた。

ピンポン

まどかはチャイムを鳴らすが、部屋の主がいないので、誰も出てこない。

そのまままどかはドアノブを回して部屋に入った。

台所には洗いかけなのか、水につけてあるティーカップが、そしてリビングのテーブルには雑誌と飲みかけの紅茶があった。

まどかはその雑誌の上に、あの黒歴史と化したノートを置いた。外から聞こえる子供の声が、やけに虚しさを感じさせた。

「ごめんなさい…。私、弱い子で…ごめんなさい」

まどかは涙を流しながら誰にかは分からないが謝り続ける。

「大丈夫。お前は弱い子ではない」

そんなまどかに出来ることは、ただ頭を撫でて声をかけるだけだった。

「でも！でも！」

「まどかは今でも前に進んでいる。それはとてもすごいことだ。普通はあんなことがあつたら前になんか進めない」

「……………」

「弱いのは俺だ」

「そんな事！」

まどかが俺の言葉に反論する。

「あるんだよ。俺の時間は、あの時から、ずっと動いてないんだ」

そう、俺がすべてを失うことになるあの時から、俺の時間はすべてが止まってしまった。

「だから、まどかは自分を責めないことだ。責めたところで、何ができるわけでもないんだから」

「……………うん」

俺の言葉に、か細い声だが、頷いた。

(第一、バマミの為に悲しむなんて無駄だ)

俺はそう考えていた。

彼女の死は確かに悲しいものだ。

だが、それは悪く言ってしまうえば自業自得。

あの時、暁美さんと俺を拘束していなければ、彼女は死ななかつたかもしれない。

もちろん絶対に死なないという保証はない。

だが、可能性を少なくすることはできたはずだ。

人が心配しているのを無視したり、人の言葉を聞かないようなものを俺は馬鹿と言っている。

(とにかく、今後も頑張ろう。俺の目的のために)

俺は再び、そう決心するのだった。

「あっ……………ほむら……………ちゃん……………」

マンションを出ると、そこにいたのは暁美さんだった。

「貴女は自分を責めすぎているわ。鹿目まどか」

「えっ……………?」

暁美さんの突然の言葉に、まどかが声を上げた。

「貴女を非難できる者なんて、誰もいない。いたら、私が許さない」

「え……………?」

「忠告、聞き入れてくれたのね」

「……………うん」

暁美さんの言葉に、まどかは頷いた。

その後俺とまどかは暁美さんと帰ることになった。

「私をもっと早くにほむらちゃんの言うこと聞いていたら」

「それで、バマミの運命が変わったわけじゃないわ。でも、貴女の運命は変えられた。一人が救われただけでも、私は嬉しい」

暁美さんの言葉に、まどかも呆然としていた。

「ほ……ほむらちゃんはさ、何だかママさんとは別の意味でベテランって感じたよね」

「そうかもね。否定はしない」

暁美さんの声色が少しだけ変わった。

言うなれば少しだけとげが生えたような感じだ。

「昨日みたいに……誰かが死ぬとこ何度も見てきたの？」

「そうよ」

「……何人くらい？」

「数えるのを諦める程に」

(だからそんなに絶望に満ちた目をしているのか)

俺はようやく彼女の雰囲気になんか納得がいった。

「あの部屋、ずっとあのままなのかな」

「バマミには、遠い親戚しか身寄りがないわ。失踪届けが出るのは、まだ当分先でしょうね」

「誰も……ママさんが死んだこと、気づかないの？」

「仕方ないわ。向こう側で死ねば、死体だって残らない。こちらの世界では、彼女は永遠に行方不明者のまま。魔法少女の最期なんてそういうものよ」

「ひどいよ……」

暁美さんの言葉に、まどかは立ち止まると涙を流した。

「みんなのためにずっと一人ぼっちで戦ってきた人なのに、誰にも気づいてもらえないなんて、そんなの……寂しすぎるよ」

死んだことを気付いてもらう。

それは人類に与えられた権利だ。

それすらも果たされないことが、俺には悲しかった。

「そういう契約で、私達はこの力を手に入れたの。誰のためでもない。自分自身の祈りのために戦い続けるのよ。誰にも気づかれなくても、忘れ去られても、それは仕方のないことだわ」
「私は覚えてる。マミさんのこと、忘れない。絶対に！」

まどかの一言に、暁美さんが驚いたような表情でまどかを見た。

「そう。そう言ってもらえるだけ、バマミは幸せよ。羨ましい程だわ」

暁美さんはまどかから眼をそらしてそう言った。

「ほむらちゃんだって！ほむらちゃんのことだって、私は忘れないもん！昨日助けてくれたこと、絶対忘れたりしないもん！」

「……ほむらちゃん？」

「貴女は優しすぎる」

「え？」

暁美さんの言葉に、まどかは驚いた風に声を上げた。

「忘れないで、その優しさが、もっと大きな悲しみを呼び寄せる」

ともあるのよ」

最後にそう言うと、暁美さんは俺達の前から去って行った。

広場にやってくると、すでに夜だった。

「ほむらちゃん、ちゃんと話せばお友達になれそうなのに。どうしてマミさんとは喧嘩になっちゃったのかな？」

まどかが俺にそう聞いてきた。

「それは二人が馬鹿だからだよ」

「え？」

俺の答えに、まどかがこつちを見た。

「二人して一步も近寄ろうとしないんだもの。仲良くなれるはずがない。もし二人が半歩でも歩み寄れば、少しはこの未来は変わっていたのかもしれないな」

「……………うん」

俺の言葉に、まどかはただ頷くだけだった。

「あれ？仁美ちゃん……………」

「ん？あ、本当……………」

俺は仁美の姿を見つけた時、何とも言い難い寒気を感じた。
この感じはあの時に似ている。

「仁美ちゃん！今日はお稽古事……あ」

まどかが走りながら仁美に声をかけるので、俺もそれについて行く。
すると、俺達は見てしまった。

その首筋にあるテレビのようなマークを。

「あれ……あの時の人と同じ」

そう、あえて言うのであれば。

「魔女の口づけ」

「仁美ちゃん。ねえ、仁美ちゃんってば！」

まどかが仁美の前に回り込んで、肩を揺らすと、彼女はまどかの方
を見た。

「あら、鹿目さん、涉さん御機嫌よう」

彼女の俺達を見る目から、操られていることがはっきりとわかった。

「ど、どうしちゃったの？ねえ、どこ行こうとしたの？」

「どこ行って、それは……ここよりもずっといい場所、ですわ」

「仁美ちゃん」

「ああ、そつだ。鹿目さんもぜひ一緒に。ええそつですわ、それ
が素晴らしいですわ」

仁美はそう言うと、俺達の横を通って行った。

「どうしよう……これってまさか……」

「まどか、仁美の後を付けてくれるか？」

「え、渉君は？」

俺の提案に、まどかが聞いてくる。

「俺は正宗と吉宗を取ってくる。幸いここから家は近いし、すぐに行ける。あの二本の剣があれば、大抵の事は何とかなる」

「でも、それだと私たちがどこにいるのかわからないじゃ」

まどかはもっともなことを言ってくる。

「だから、まどかにはこれで目印を残してもらいたいんだ」

そう言って俺が渡したのは、水が入った2Lのペットボトル。

「これをこぼしながら歩いて貰えば、それを頼りに行けるから」
「う、うん！分かった」

まどかの答えを聞いて俺は自宅に向かって走った。

（早く行かないとやばい！！）

そう思いながら、俺はひたすらに走るのだった。

第9話 新たなる魔法少女現る（前書き）

今回は渉が活躍します。

ほんの少しですが。

そして最後のほうであの少女も登場します。

第9話 新たなる魔法少女現る

正宗と吉宗を取りに言った俺は、引き返して急いでまどかと別れた場所へと向かった。

「えっと、こっちか!!」

地面を見ると水がこぼれた跡があった。俺はそれを頼りに走って行く。

「ここか」

やがてたどり着いたのは、人気のない工業地区だった。

「水跡がここで途切れてるから、ここで間違いないだろうけど、これじゃ」

その中の一つの工場に水跡が続いていたが、そこはシャッターが閉じられていて、入れる状態ではない。

（とにかく、入れそうな場所を探そう!）

俺はそう思い、工場の周りを走った。

（あ、あそこの窓から入れるかも!）

俺はそう思い、窓のそばまで駆け寄る。

ガチャン！

「へ？」

突然窓ガラスの割れる音がしたかと思うと、何かが降ってきた。

バシャン！

「つ~~~~~~~~!!!!!!」

降ってきた液体をかぶった瞬間、体中がとてつもない痛みに襲われた。

「おりやアアア!!!!!!」

ガチャン!!!!!!

「きゃあ!!」

俺は怒りにまかせて窓をけり破って中に入った。

「誰だツ!!!人に向かってバケツを放り込んだ馬鹿は!!!!!!」

「わ、渉君!!!!!!」

中にいたやつらにいきり立てる俺に、背後からまどかの声がした。

「遅れてすまない。大丈夫だったか？」

「あ、う、うん」

なぜか申し訳なさそうな表情をしているまどか。
そんな時、何か落ちる音がした。

「うわ!?!」

振り返ると、そこには大人の人達がいたが、目が尋常ではない。
俺はとてつもない恐怖感に苛まれた。

まどかは窓を開けようとしているが、開ける方向を間違えているために開かず、少しずつ奥へと追い詰められていった。
すると、運のいいことに背後にドアがあった。

「まどか! そのドアを開ける!」

「う、うんッ!」

俺は前から押し寄せてくる人たちを抑えながら、まどかに指示を出す。ドアが開いたので、俺は抑えていた人たちを押しつけてドアを通った。

そしてドアを閉めようとする、大人たちの手がこっちに入ろうとドアを開けようとするので、俺とまどかで何とかドアを閉めて鍵をかけることに成功した。

「ふう……」

俺は何とか一息ついた。

そこは金網に囲まれていて、外に出られる場所はない。

「……………ど、ど、ど、ど、ど……………」

その時だった。

「まどか、結界が!!」

背筋に寒気が走った瞬間、変なものがこの部屋に広がって行った。

「炎天の輝きよ。全てを守りし、盾となれ！」

俺はとっさの判断で正宗と吉宗を地面に突き刺して結界を形成した。

「や、やだっ……こんな……」

だが、俺達は魔女の結界内に取り込まれた。

そこは不思議な空間だった。

周りに走るのはメリーゴーランドの馬か？

今は何とか結界で大丈夫だがこのままではいつ殺されるかも時間の問題だ。

「い、嫌……」

まどかの呟きに、横を見ると何かを見ておびえているまどかの姿があった。

そして俺もつられてその方向を見ると、そこには白い人形のようなものが持っているテレビに映し出された巴さんの姿があった。

(まさか……)

嫌な予感がした。

「まどか！気をしっかり持て！！」

「……………」

まどかは何も答えない。

(クソッ！結界が)

俺は分かっていた。

結界が少しずつ弱り始めているのを。

このまま結界が破れれば、俺達に待っているのは”死”だ。

(結界の補強をしないと)

俺はそう思い精神を集中する。

しかし……

上空から降りてきたテレビのようなものから出てきた人形たちが、結界に攻撃を仕掛けてきた。

「つくう！？」

もろい状態の結界が今にも破られそうになる。

ピキッピキ！！

ひびの入る音がやけにくつきりと聞こえた。

(ここまでか)

俺はそう思い、死を覚悟した時だった。

ガシユン！ガシユン！！パキン！！

突然の青い閃光により人形とテレビが破壊された。

そのおかげで、結界の状態が回復した。

「……………さやかちゃん！？」

その閃光を放った人物は、白地のマントに身を包み、青髪が特徴の少女だった。

青い閃光を放った少女の姿を見た時、まどかがそう口にした。

俺にも目の前にいる少女がさやかに見えた。
一瞬さやかと思われる少女はこちらを見ると、白い人形を次々に斬り伏せていく。

「これでとどめだあ！！！」

そして本体なのか、テレビに向けて手にした剣を突き刺す。
それによって目の前の景色が揺れ、元の場所に戻った。

「いやーゴメンゴメン。危機一髪ってとこだったね」

さやかの第一声はそれだった。

「さやかちゃん……その格好」

「ん？あー、んーまあ何、心境の変化って言うのかな？」

まどかの心配そうな声色にさやかは笑いながら答えていた。

「ん？あ、大丈夫だって！初めてにしちゃあ、上手くやったでしょ？私」

「でも……」

その時、靴音が響いた。

「！？」

その音を出したのは、暁美さんだった。

「貴女は……」

その眼にあるのは、さやかに対する怒りにも見えた。

「ふん、遅かったじゃない。転校生」

そして暁美さんはそのまま姿を消した。

「さやか、ありがとう。助かった」

「な、何よ……照れるじゃない」

さやかにしては珍しく顔を赤くしていた。

「って、どうしたの?!体中びしょ濡れじゃん」

「あゝ！？そうだった！！窓からポリバケツを投げて変な液体をかけた馬鹿がいるんだ！！」

俺はさやかという言葉で思い出した。

「あ、あの渉君」

「ん？どうしたまどか。まさか投げたやつを知ってんのか？」

「ごめんね。投げたの、私なの……」

俺はまどかの言葉に息をするのも忘れた。

「まどかか？」

「ヒイ！？」

俺が呻るように名前を呼ぶと、怯えた様子でさやかの背中に隠れた。

「まあ、いいや。遅れた僕も悪かったんだし」

「にしても、よく無事だったよね」

「あ、私も気になってたんだ。渉君、さっきのあれ何？」

まどかの言うあれは、俺が展開した結界だ。

「あれは結界」

「へえ……つて！結界！？」

「渉君、魔法が使えたの？！」

俺の答えにまどかが聞いてくる。

「まさか。俺が使ったのは気法だよ」

「気法？」

まどか達が首を傾げる。

まあ、当然だが。

「合気道のようなものだよ。気の力で色々なことが出来る奴」

「なるほど」

「さつきは本当にビビったぞ。あれは外部からのマイナスエネルギーには強いけど、内部からのマイナスエネルギーにはとても弱いから。まどかは絶望してマイナスエネルギーを放っているから強度がどんどん弱くなるし」

俺のボヤキに二人は笑うだけだった。

3人称Side

「あむ」

とある鉄塔に腰かける少女の姿があった。

その手に持っているクレープを食べながら。

「まさか君が来るとはね」

「ママの奴がくたばったって聞いたからさあ、…わざわざ出向いてやったっていつのに。何なのよっ！？ちよっと話が違っんじゃない？」

赤髪の少女の言葉に、キュウベえは顔色を変えずに答える。

「悪いけど、この土地にはもう新しい魔法少女がいるんだ。ついでに
つき契約したばかりだけどね」

「何ソレ？超ムカつく」

赤髪の少女は不快感をあらわにする。

「でもさあ、こんな絶好の縄張り、みすみすルーキーのヒヨコに
くれてやるってのも癪だよねえ」

「どうするつもりだい？ 杏子」

「決まってるじゃん」

杏子と呼ばれた少女はキュウベえの問いかけに答える。

「要するに、ぶっ潰しちゃえばいいんでしょう？……その子」

それは、新たな波乱を告げる物でもあった。

S i d e o u t

第9話 新たなる魔法少女現る（後書き）

皆さんのご感想、アドバイスをお待ちしております。

第10話 人助けと偽善者（前書き）

人によっては賛否両論になりそうな今話です。

第10話 人助けと偽善者

翌日の教室。

「ふあああ……あ、はしたない。ごめんあそばせ」

彼女にしては珍しく欠伸をしている仁美の姿があった。

「どうしたのよ仁美。寝不足？」

「ええ、昨夜は病院やら警察やらで夜遅くまで」

「えー、何かあったの？」

まどかが微妙に息をのむが、さやかは平然を装っていた。

（まあ、本当のことは言えないしな）

「何だか私、夢遊病っていつのか。それも同じような症状の方が大勢いて。気がついたら、みんなで同じ場所に倒れていたんですの」

「はは、何それ？」

本当にさやかはごまかすのがうまいと思う。

「お医者様は集団幻覚だとか何とか……。今日も放課後に精密検査に行かなくてはなりません。はあ、面倒くさいわ……」

「そんな事なら、学校休んじゃえばいいのに」

「ダメですわ。それではまるで本当に病気みたいで、家の者がますます心配してしまいますもの」

さやかの言葉に仁美が反論する。

「さすが優等生！偉いわー」

その後先生が教室に入って来て授業となった。

放課後、俺達は河川敷に来ていた。

「久々に気分良いわー。爽快爽快」

野原に寝そべっているさやかは本当に気持ちよさそうに声を出す。

「さやかちゃんはさ、怖くはないの？」

「ん？そりゃあちよつとは怖いけど…昨日の奴にはあっさり勝てたし。もしかしたらまどかと仁美、友達二人も同時に亡くしてかもしれないって。そっちの方がよっぽど怖いよね。だーから、何っーかな。自信？安心感？ちよつと自分を褒めちゃいたい気分っーかね」

さやかは突然起き上がると俺達にソウルジェムを見せた。

その色は、青だった。

「まー、舞い上がっちゃってますね、私。これからの見滝原市の平和はこの魔法少女さやかちゃんが、ガンガン守りまくっちゃいますからねー！」

さやかは立ち上がってそう宣言するが、俺にはシユールな光景に見

えてしまった。

「後悔とか全然ないの？」

「そうねー。後悔って言えば、迷ってたことが後悔かな。どうせだつたらもうちよつと早く心を決めるべきだったなつて。あのときの魔女、私と二人がかりで戦ってたら、マミさんも死なないで済んだかもしれぬ」

さやかは再び地面に腰かけた。

「私……」

再び泣き出しそうになるまどかの頬にさやかが指でつついた。

「さーてーは、何か変な事考えてるなー？」

「私、私だつて……」

「なつちやつた後だから言えるの、こういう事は。どうせならつて言つのがミソなのよ。私はさ、成るべくして魔法少女になつたわけ」

さやかの言葉には多少だが、重みがあつた。

「さやかちゃん……」

「願い事、見つけたんだもの。命懸けで戦うハメになつたつて構わないつて、そう思えるだけの理由があつたの。そう気付くのが遅すぎたつて言つのがちよつと悔しいだけでさ。だから引け目なんて感じなくていいんだよ。まどかは魔法少女にならずに済んだつて言つ、ただそれだけの事なんだから」

こういう時に、さやかの優しさが分かる。

「うん……」

「さてと、じゃあ私はそろそろ行かないと」

突然さやかはバックを手にして立ち上がった。

「ん？何か用事があるの？」

「ん？まあね」

さやかは返事を濁してそのまま去って行った。

その後、まどかは暁美さん呼び出して前に行ったことのあるファミレスにっていた。

「話って何？」

「あのね、さやかちゃんのこと、なんだけど……あ、あの子はね、思い込みが激しくて、意地っ張りで、結構すぐ人と喧嘩しちゃった。でもね、すっごくいい子なの。優しくて勇気があって、誰かのためと思ったたらがんばり過ぎちゃって」

「魔法少女としては、致命的ね」

まどかの言葉に、暁美さんは切り捨てた。

「そう……なの……」

「度を越した優しさは甘さに繋がるし、蛮勇は油断になる。そして、どんな献身にも見返りなんてない。それをわきまえていなければ、

魔法少女は務まらない。だから巴マミも命を落とした」

「そんな言い方やめてよっ！！」

巴さんのことを言った途端、まどかが大声で叫んだ。

「そう、さやかちゃん、自分では平気だって言ってるけど、でも、もしマミさんの時と同じようなことになったらって思うと、私どうすればいいの？」

「美樹さやかのご心配なのね」

「私じゃもう、さやかちゃんの力にはなってあげられないから。だから、ほむらちゃんにお願いしたいの。さやかちゃんと仲良くしてあげて。マミさんの時みたいに喧嘩しないで。魔女をやっつける時も、みんなで協力して戦えば、ずっと安全なはずだよね」

まどかは暁美さんに必死に懇願した。

「私は嘘をつきたくないし、出来もしない約束もしたくない」

「え？」

「だから、美樹さやかのご事は諦めて」

その言葉は、まどかにとってはとても残酷なものだった。

「どうしてなの……」

「あの子は契約すべきじゃなかった。確かに私のミスよ。貴女だけでなく、彼女もきちんと監視しておくべきだった」

「なら……」

暁美さんの言葉にまどかが反論しようとする。

「でも、責任を認めた上で言わせて貰うわ。今となっては、どうや

っても償いきれないミスなの。死んでしまった人が還って来ないのと同じこと。一度魔法少女になってしまったら、もう救われる望みなんてない。あの契約は、たった一つの希望と引き換えに、すべてを諦めるってことだから」

「だから、ほむらちゃんも諦めちゃってるの？自分のことも、他の子のことも全部」

「ええ。罪滅ぼしなんて言い訳はしないわ。私はどんな罪を背負おうと私の戦いを続けなきゃならない。時間を無駄にさせたわね。ごめんなさい」

暁美さんはそう言い切ると、席を立ってファミレスから出て行った。俺は、その彼女の後をついて行った。

「ちょっと待てよ」

「……何かしら」

俺が声をかけると、少々とげのある言い回しで返された。

「一つだけ勘違いしているようだから、その指摘と謝罪だ」

俺の言葉に、暁美さんは何も反応を示さない。

「まずは謝罪な。申しわけなかった。俺は前まではバマミが馬鹿なのかと思っていたのだが、どうやらお前も相当なバカのようだ」

「どういう意味かしら？」

「そのままの意味だ。同じ過ちを何度も何度も繰り返すのは馬鹿な奴だけだ。いや、もっと言えば愚か者か」

俺の言葉に、暁美さんが睨みつけてくる。

「最後に指摘な。巴マミが殺されたのだとすれば、殺したもしくはその幫助をしたのはお前だ。暁美ほむら」

そして俺は最後に告げた。

「そしてお前はまた同じことをしようとしている。だから言っておく。一人守れないようでは、まどかを守るなんてことは到底無理だ。諦めんだな」
「っ!!!?」

俺の言葉に暁美さんは息をのんだ。

俺はそんな事なぞお構いなしに、彼女に背を向けて歩き出した。

俺は間違ったことを言ったとは思っていない。

人を助けることのできない者が、大事な人を守るなんてことはできない。

それでも守ると言うのであれば、その人物はただの偽善者だ。

俺は偽善者がとても嫌いだ。

だからこそ……。

「もしお前が偽善者なのであれば、この俺が直々に消し去ってくれ
る。暁美ほむら」

俺はそう決意を口にした。

もちろん、もう少し様子を見るつもりだ。

彼女が俺の”敵”なのかを。

ほむらSide

「そしてお前はまた同じことをしようとしている。だから言っておく。人一人守れないようでは、まどかを守るなんてことは無理だ。諦めんだな」
「っ!!!?!」

私は彼の言葉に心がかき乱された。

(あなたに、私の何が分かるのよ)

私が味わった絶望を彼は何も知らない。
それなのにああ言われた事が悔しくて、私は両手を強く握りしめていた。

(私は、私の成すべきことをやるわ)

「邪魔するのなら容赦はしない」

私は最後にそう決心してその場を後にした。

Side out

第10話 人助けと偽善者（後書き）

次回あたりでアニメの第5話は完結します。

それでは、次回でお会いしましょう

第11話 夕暮れ時に現れる者(前)(前書き)

長いので前後に分割しました。

第11話 夕暮れ時に現れる者(前)

暁美さんと別れた足で、俺はまどかに連れて行かれる形であるアパートの入り口に来ていた。

彼女の話だとさやかあの部屋があるらしい。

そしてしばらくして、入り口からさやかが出てきた。

「まどか？それに涉まで」

「よー」

「さやかちゃん、これから、その……」

「そ、悪い魔女を探してパトロール。これも正義の味方の勤めだからね」

まどかの問いかけに、さやかは笑いながら答えた。

「一人で…平気なの？」

「平気平気。ママさんだってそうして来たんだし。後輩として、それぐらいはね」

「あのね、私、何もできないし、足手まといにしかならないってわかってるんだけど。でも、邪魔にならないところまででいいの。行けるところまで一緒に連れてってもらえたらって」

手にしてあるバッグを落としてまで必死にさやかに決意を告げている。

「……………」
「……………」

お互いに無言で緊張感が漂う中、俺はさやかの答えを待った。

「頑張り過ぎじゃない？」

「ごめん……ダメだよ、迷惑だったのはわかってたの」

「ううん。すごく嬉しい」

さやかはそう言つと、まどかの手を握つた。

「ねえ分かる？手が震えちゃってさ。さっきから止まらないの。情けないよね。もう魔法少女だったのに、一人だと心細いなんてさ」

「さやかちゃん……」

さやかの言葉に、まどかが心配そうに名前を言う。

「邪魔なんかじゃない。すごく嬉しい。誰かが一緒にいてくれるだけで、すごく心強いよ。それこそ百人力って感じ」

「私……」

「必ず守るよ。だから安心して私の後についてきて。今まで見たいに、一緒に魔女をやっつけよう」

「うん」

(……とりあえずは、大丈夫……かな)

さやかの決意を聞いてひとまずは安心した。

彼女が巴さんのような馬鹿だったらどうしようかと思ったので、そうではなくてよかった。

「危険は承知の上なんだね？」

「あたしバカだから、一人だと無茶なでたらめやらかしかねないし。まどかもいるんだって肝に銘じてれば、それだけ慎重になれると思う」

キユウベえの言葉にさやかは歩きながら答える。

「そっか。うん、考えがあつての事ならいいんだ」

「キユウベえ？」

まどかはキユウベえの方を見た。

【君にも君の考えがあるんだろう？まどか。さやかを守りたい君の気持ちは分かる。実際、君が隣に居てくれるだけで、最悪の事態に備えた切り札を一つだけ用意できるしね】

「……………」

キユウベえのテレパシーに俺は無言で考えた。

(今のは間接的に契約させようとしてるよな?)

【私は……………】

【今は何も言わなくていい。さやかもきつと反対するだろうし。ただ、もし君が心を決める時が来たら、僕の準備は、いつでも整ってるからね】

【うん……………】

「……………」

しばらく歩き続けると、下に続く階段の所でソウルジェムが眩い位に輝いていた。

すると次の瞬間、結界が展開された。

「この結界は、多分魔女じゃなくて使い魔のものだね」

「楽に越した事ないよ。こちらとらまだ初心者なんだし」

キユウベえの言葉にさやかはそう言いながら階段を下りていく。

「油断は禁物だよ」

「分かっている」

「まあ何かあったら巴さんの時のように、微力ながらサポートさせてもらうよ」

「うん。ありがとう?」

いや、なぜに疑問形だ?

その時だった。

ゾクッ!!

「あっ」

「ブーン、ブーン」

俺達の上空に、電車のようなものに乗った子供のような使い魔が現れた。

「あれが」

使い魔はそのままどこかに行こうとする。

「逃げるよ」

「任せて!」

さやかはそう言うと、変身した。

前の時はよく見れなかったが、その服は、青を基調としたドレスのようなものだった。

そして自分の体をマントで包むと、複数の剣を召喚した。そしてそれを使い魔に向けて放り投げた。

二本の剣が使い魔の行く手を塞ぎ、残った剣が使い魔に突き刺さるうとした時だった。

突然現れた何かの武器によって剣が弾かれた。

止めを刺せなかった使い魔は、そのまま逃げて行った。

そして降り立ったのは赤いドレスのようなものを着て、後ろで束ねられた赤髪の少女だった。

その手には武器である長めの槍が握られていた。

「ちよつとちよつと。何やってんのさ、アンタたち」

「逃がしちゃう」

境界が閉じようとする中、まどかがそう告げてさやかが走り出す。だが……

「見てわかんないの？ありや魔女じゃなくて使い魔だよ。グリーンフシードを持つてるわけないじゃん」

赤い髪の少女はさやかの喉元に槍を突き付け言い放った。

「だって、あれほつといたら誰かが殺されるのよ？」

なぜかたい焼きを食べながらそう言い放つ。

「だからさあ、4〜5人ばかり食って魔女になるまで待ってっの。

そうすりゃちゃんとグリーンフシードも孕むんだからさ。アンタ、卵産む前の鶏シメてどうすんのさ」

赤い髪の少女はそう言いながらさやかに突き付けた槍を元に戻した。

「な……魔女に襲われる人たちを……あなた、見殺しにするって言うの?」

「……………」

俺は嫌な予感を感じたため2、3m下がった。

「アンタさあ、何か大元から勘違いしてんじゃない?食物連鎖って知ってる?学校で習ったよねえ、弱い人間を魔女が食う。その魔女をアタシたちが食う。これが当たり前前のルールでしょ、そういう強さの順番なんだから」

赤い少女はさやかかの上に迫り、さやかは背後へと下がって行く。そこは俺のいる方向だった。

(お願いだから厄介ごとには巻き込まないでくれよ)

その時だった。

「なっ!!!?!」

俺の横に、区切りが展開された。つまり俺は危険区域に閉じ込められたのだ。

「そんな……………」

「おいおい、マジかよ」

俺は自分の運のなさを恨んだ。

「あんたは」

「まさかとは思うけど。やれ人助けだの正義だの、その手のおチャラケた冗談かますために……アイツと契約したわけじゃないよね？
アンタ」

赤い少女のいう事は正しい。

この世界は正義だけでは成り立たない。

正義と言う単語は、俺が二番目に嫌いな言葉でもある。
だからと言って、彼女のやり方は肯定できないが。

「だったら、何だって言うのよ！」

さやかはそう叫び赤い少女を切ろうと剣を振り上げる。
だが、地面に突き刺された槍の棒に阻まれる。

「ちょっとさ、やめてくれない？」

赤い髪の少女は余裕そうな表情でそう呟く。

(剣の力加減がおかしい。あれじゃいくらなんでも押し切れない)

「遊び半分で首突っ込まれるのってさ、ホントム力つくんだわ」

赤い髪の少女はそう言うと、槍を強く押してさやかを後ろに吹き飛ばすと、槍の形を楔状に変えた。

「うわああー!!」

「さやかちゃんー!!」

それは複雑に渦巻くとさやかを跳ね飛ばした。

「のわあ!?!」

それはこっちにもやって来て、危うく当たりそうになる。

「あぶねえだろ!?!」

俺の怒鳴り声にも、まったく反応しない。

「ふん、トーシロが。ちつとは頭冷やせつての」

赤い髪の少女はそう言ってさやかに背を向ける。

だが、さやかはゆっくりとだが立ち上がるうとする。

「おつかしいなあ。全治3ヶ月つてぐらいにはかましてやったはずなんだけど」

「さやかちゃん、平気なの?」

まどかがキュウベえに聞く。

「彼女は癒しの祈りを契約にして魔法少女になったからね。ダメー
ジの回復力は人一倍だ」

俺はその説明に納得がいった。

「誰が……あんななんかに。あんなみたいな奴がいるから、マミさん
んは!?!」

「ウゼエ。超ウゼエ」

さやかの言葉に赤い髪の少女は槍を再び構える。

「つつか何。そもそも口の利き方がなっていないよね。先輩に向かつてさあ」

さやか足元には、青い五線譜が浮き出ている。

「黙れえええ!!!」

さやかが剣を振り上げる。

それが始まりだった。

「チャラチャラ踊ってんじゃねえよウスノロ！」

さやかの剣を槍でうまくいなし、時には攻撃に転じさらには槍を楔状に変える。

「さやかちゃん!!!」

「まどか、近づいたら危険だ」

いや、今その危険な場所に俺はいるんだけど!?

「うわああ!」

そしてさやかは楔状の槍にまきつかれ、壁際に放り投げられた。

「言って聞かせてわからねえ、殴ってもわからねえバカとなりやあ…後は殺しちゃうしかないよねッ!？」

赤い髪の少女はそう言ってさやかの方へと迫る。

「ッ!?!」

その瞬間、さやかの剣の先が赤い髪の少女の槍の先とぶつかり合う。

「負けない。負けるもんかあ！」

さやかは剣を押しやる。

さやかは赤い髪の少女を切りつけようとしますが、彼女は上空へと舞い上がった。

そして、上空からさやかにめがけて、槍を振り下ろす。

その衝撃で、地面が得くれるが、さやかは少しばかり後ろに追いやられただけだった。

さやかは赤い髪の少女に迫る。

「どうして？ねえ、どうして？魔女じゃないのに。どうして味方同士で戦わなきゃならないの？」

「どうしようもない。お互い譲る気なんてまるでないよ」

それを見ていたまどかの言葉に、キュウベえが答えた。

「お願い、キュウベえ、涉君、やめさせて。こんなのってないよ」

「僕にはどうしようもない」

「だったら俺が何とかしようか？」

「え！？」

俺の言葉に、まどかが声を上げた。

「なんとかできるの！？」

「ああ、もちろんだ。逆にあの少女をぶちのめすことだってな」

「それじゃ」

俺はまどかの言葉を区切った。

「ただとは言わせないぜ？」

「え……」

俺の言葉に絶望交じりの声を出す。

「当り前だ。かなり危険な状況だ。そんなところにただで行くやつはあるか」

俺はそう言っつて、報酬を何にしようか考えた。

「イチゴのショートケーキを一個おごる。それでどうだ？」

俺が掲示した条件はそれだった。

「分かった」

俺の条件にまどかが頷いた。

「よし、契約成立!!!」

俺はそう答え、手元のバックから神剣を取り出した。

俺はこの時を待っていたのだ。

「終わりだよ」

さやかたちの状況を見れば、少女の槍によってさやかが地面に倒され飛び上がっていた。

おそらくあの槍でさやかを貫くのだろう。

俺は地面を思いっきり蹴る。

距離にして約70m。

さやかを貫くまでの残り時間は、約4秒。

普通では間に合わない。

「そんなこと、この俺には……」

俺はさやかの前に回り込み二本の神剣を交差させる。

「関係ねえ!!!!!!」

カキン!!

その次の瞬間、交差した神剣から衝撃が伝わった。

「なっ!!!!?」

「え?」

俺が顔を振り上げると、そこには槍を突き刺そうとする驚いた様子の赤い髪の少女の姿があった。

第11話 夕暮れ時に現れる者(後)(前書き)

今回は、渉無双です。

第11話 夕暮れ時に現れる者(後)

「誰だテメエ!!」

「人に名を尋ねるのであれば、まずは自らが名乗れ。……………そんな事を両親からは習わなかったのかな？」

「……………ッ!!」

俺の言葉に少女が俺を睨みつけてくる。

「テメエ、喧嘩売ってんのか!」

「いや別に。あんたの意見は至極正しいさ。俺は正義のために〜とかいう奴の事が嫌いだな、どちらかと言えばお前の意見におおむね賛成だ」

「涉! あんた何を」

「お前は黙ってる!」

俺は反論してきたさやか言葉の言葉を遮る。

「でもな、巻き込まれる者の身にもなれ」

「はあ?」

俺の言葉に、何が何だかわからないような表情をする少女。

「迷惑だ」

俺はそう告げた。

「だからさ、とっとと消えてくれるか?俺とて、少女を傷つけるのは気が進まないから」

「それは、あたしがあなたに負けるとでも言いたいのか？」

俺の言葉に少女が目を細めた。

「そうかもしれないな。と言うより、あなた賢そうだから、撤退し
てくれることを希望する」

「上等だ！！！」

少女はそう叫ぶと俺から距離を取る。
するとこっちに向かって攻めてきた。

「やれやれ、物わがりの悪いものだこと」

俺は呆れながら少女に背を向ける。

「炎天の輝きよ、かの者を守る盾となれ！」

俺は前に使った結界をさやかに展開する。

「よそ見るなんて、ずいぶん余裕そうだね！」

もうかなり背後に迫って来ているのが分かった俺は、その場から離
れる。

「っちー！」

俺は反転して少女の方を見やる。

「ほら、来いよ。遊んでやる」

俺がそう挑発すると、少女は槍を楔状にしてこちらに向けて振り撒く。

「つと！つほ！はあ！」

俺はそれを手に持つ二本の剣で弾く。

「なんあんだよ、そのでたらめな剣は！」

「それをあんに言われたくはない」

槍が楔状になる武器を持つようなものには特に。

(しかし、このままでは不利だ)

俺は頭の中で冷静に考える。

今は何とか戦歴で誤魔化しているが、威力は向こうが上だ。喰らってしまえば跡が無くなる。

ここは、とにかく攻める！！

「はあ！！！」

「かかったね！」

俺は少女の言葉で気付いた。

だが、その時はすでに遅い。

俺の体には楔が巻き付きそして……

「がはッ！！！」

俺は壁に思いっきり叩きつけられていた。

言っておくが、ダメージはちゃんと入っている。

と言っか、背中が痛い。

「ゲホツ！ゴホー！！」

なんとか動けるが、痛みで体の動きが鈍ってしまった。

「ほらほら！さっきまでの余裕はどうしたんだい！？」

「ぐう！！？」

そのため、一気にこっちが不利になる。
いつか必ずやられる。

（”あれ”を使うしかないか）

「なかなかやるな」

「そう言ったられんのも今の内だよ」

向こうも余裕が出てきたのか、ご丁寧に笑みまで浮かべてやがる。

「それをそのまま返す」

俺の言葉に少女の顔から笑みが消えた。

「ちょっと本気を出す」

俺はそう宣言した。

（今ここで使えるのはリミットブレイク・ブーツ2までそれ以上使えばまどか達に正体がばれるー！！）

俺の切り札は、俺の封じられた”力”を開放するものだ。段階的にはブーツ1、2、3そして真名解放の4段階だ。ブーツ3以降になると姿自体が変わってしまうため、ここでは使えない。よって……

「リミットブレイク・ブーツ1!」

俺は1段階力を開放した。

それと同時に、ものすごい力が湧いてきた。

「なっ!?!」

少女が、その力が分かるのか驚きの声を上げる。

「あなた、一体何者だ?」

「さあな。………第2ラウンドと行きましょうか!?!」

俺はそう告げて一気に少女の元に駆ける。

「つく!」

俺の剣を弾くが、その勢いについて行けないのか、数回通っている。

「さっきまでの調子はどうした!?!」

俺は少女にそう声をかける。

「炎天の輝きよ、わが剣に続け!?!」

俺はそう唱え、正宗を少女に向けて一振りする。
俺の剣は槍で防がれるが……

「つぐう!?!」

「なぜだ!? 防いでるはずだ」

信じられないものを見るような目でこっちを見る。

(これだ。この感じだよ。俺の求めていた戦場は!!)

俺はその感触に酔いしれていた。

それが俺の間違いだった。

「最後に言う。とつとと失せる。これ以上はその身の安全を保障し
かねる」

「なめんじゃない!!」

威勢よく少女は俺の最終通告を無視した。
なので俺はあれをやることにした。

「炎天の輝きよ。すべては我が内に。人に理解されない剣よ、我が
前に浮かび上がれ。その剣は敗北を知らぬ勝利へと導く剣」

俺は上空に大量の白い剣を召喚した。

「なっ!!」

「降り注げ! レインソード!!」

俺は少女に向けて片腕を振り下ろした。

それが合図となり上空に浮かび上がる剣が、一気に少女へと降り注

ぐ。

「その必要はないわ」

そんな時、暁美さんの声がしたかと思うと、降り注ぐ剣の動きが止まった。

まるで時間が止まっているみたいに。

（これが、あいつの魔法か！？）

俺は暁美さんの魔法に一瞬ぞつとした。

だが、そのような魔法は、俺には一切効果がなかった。

次の瞬間、ものすごい轟音と共に、誰もいない地面に剣が突き刺さった。

俺はそれを慌てて止めた。

「ほむらちゃん……？」

「なっ！？」

突然のことに、少女は驚きを隠せなかった。

少女は俺よりもかなり離された場所に移動されてたのだ。

「何しやがったテメエ！……なっ！？」

少女は暁美さんの立っていた方へと、槍の先端を向けるが時間を止めて彼女の背後に移動していた。

「そうか、アンタが噂のイレギュラーってやつか。妙な技を使いやがる」

どうやら少女は彼女の事を知っているようだった。

「くっ！邪魔するな！」

いつの間にか俺の結界をうち破っていたさやかが、少女に向けて走り出すが、これまた時間を止めて移動してきた暁美さんの手刀で気絶させられた。

「さやかちゃん!？」

その瞬間、俺とまどかを隔てていた壁が消えて、まどかがさやかの元に駆けよる。

「大丈夫、気絶しているだけだ」

「早く行きなさい。佐倉杏子」

「な……どこかで会ったか？」

佐倉杏子と言う名前に目の前の少女が反応した。どうやら、それが彼女の名前らしい。

「さあ、どうかしら」

「手札がまるで見えないとあっちゃね。今日のところは降りさせてもらっよ」

しばらくにらみ合いが続いたかと思うと佐倉杏子はそう告げた。

「賢明ね」

そして佐倉杏子は壁伝いに飛んで行った。

「終わった……の？」

「一体何度忠告させるの。どこまで貴女は愚かなの。貴女は関わり合いを持つべきじゃないと、もう散々言っただけ聞かせたわよね？」

初めて暁美さんがまどかに向けて怒りをぶつけた。

「私は……」

「愚か者が相手なら、私は手段を選ばない」

暁美さんはそう言っただけで俺達の前から去って行こうとするが、俺は彼女のやや前方に向かって、上空に浮かんでいる残り数本の剣を放った。

「愚か者はお前だ。俺達はただ、友人を助けたにすぎん。それともお前は友を見殺しにでもしろと言うのか？」

「……別にそうでもないわ。ただやるのならあなただけに。彼女を巻き込まないで」

暁美さんはそう答えた。

俺に背を向けているので、その表情をうかがい知ることはできない。

「それ、次言ったら今度こそただでは済まさない。俺とまどかは大事な友達を見捨てる何て真似はできないんでな」

「……………」

暁美さんは何も答えずに、去って行った。

「ふう……」

俺は自宅のリビングにあるソファで一息つく。

「お疲れのようね」

「ああ疲れてる。馬鹿を相手にするのもかなり気がめいるし体力を使う」

テーブルに紅茶を置きながら、話しかけてきた人物に、俺は皮肉を込めてそう返す。

「……それは私への嫌味かしら？」

「もちろんですよ。馬鹿2号」

俺はその人物のジト目を気にせず、頷いて答えた。

「2号って……それじゃ、1号は誰かしら？」

「俺だよ」

馬鹿2号の問いかけにそう答えた。

「……その考え、変える気はない 即答なのね」

苦笑いを浮かべながら言うが、こればかりは仕方がない。
俺こそが真の愚か者にして偽善者だ。
だからこそ……

「絶対に俺のような愚か者や偽善者とかは出しませんよ」
「渉君……」

その人物　　落ち着いた雰囲気醸し出し、金色の髪で両サイドを髪止めで括り、毛先はパーマをかけているかのようになり、くるくると渦巻いている少女　　は悲しげな表情で俺を見た。

「お前が気にするべきではないさ。俺は俺の役割を全うするだけさ」
俺はそこで一区切りつけ、紅茶を一口飲んで目の前にいる人物を見る。

「そうだろ？……」
「バ　マミ」

第12話 悲劇の真実(前書き)

第7話の真相です。

かなりご都合主義ですが、温かい目で見てください。

第12話 悲劇の真実

時間はあの日へと戻る。

巴さんに縛られた俺は、それを解除して魔女のいる場所へと向かった。

そこで俺が見たのは……

「ティロ・ファイナーレ!!」

彼女の十八番でもある『ティロ・ファイナーレ』を放った巴さんだった。

(よし、戻ったら文句でも言っつてやる)

俺はその様子を見てそう考えていた。

だが、巴さんが打ち抜いた魔女から大きな生命体が現れて、それが一気に巴さんの目前に迫った。

「なっ!!?」

そしてその生命体は、口を大きく開いて巴さんを飲み込もうとしていた。

巴さん自身もその事態に対処できていなかった。

俺は慌てて巴さんの方へと掛けて行った。

カキン!!

巴さんの前に移動できた俺は、二本の神剣を交差させながら、簡易式の盾を形成する。

「涉…………君」

「すみません。ちょっと下がっててください」

俺は驚いた感じの声を上げる巴さんに、そう告げた。

「おいデカ物。お前の相手は俺だ」

俺は目の前にいる魔女（？）を人差し指を立てて挑発する。

そのおかげかは分からないが、目の前の魔女の攻撃対象はこっちに変わったようだった。

「炎天の輝きよ、かの者を守る盾となれ」

俺は念のために巴さんの周辺に結界を作る。

ついでに結界内の声がこっちに聞こえないようにする。

集中力を削がれたら大変だからだ。

さて、今何とかしなければいけないのは、俺の前にいる魔女だ。突然俺を食べようとしていた。

だが、俺は素早く移動する。

そのためにも何もないところにかぶり付き、空振りに終わった。

「遅いぞ、デカ物。そんなんでは俺を食べることなんてできねえぜ

！」

俺は再び魔女を挑発する。

魔女はそれにやけになってこちらにかぶり付いてくる。

それを俺は俊足で避ける。

そしてまた魔女がかぶり付こうとする。

その繰り返しをする中、俺はあるものを探していた。

(この魔女は本体じゃない。本体はどこだ)

避けながら『真実照らし出し眼』で周囲を見る。

(あつた!!)

俺はやや離れた椅子のような場所にある人形のようなものを見つけた。

それから、最も高い魔力のようなものを感知した。

俺はその人形の元へと、テーブルのようなものを伝って誘導していく。

そして最後に避けた時、俺は飛び上がりながら椅子のような所に置かれていたぬいぐるみを素手でつかんだ。

人形が俺に向けて口を開ける。

どうやらこれが本体のようだ。

おそらくだが、これごと倒さなければきりがない。

「そんなに食べたいなら」

俺は右手に本体のぬいぐるみと正宗を持った。

「これでも食べえ!!!」

それを口を開けていたデカ物に向けて投げ込んだ。

それを飲み込んで、満足そうな表情をする魔女に俺は若干引いが、俺は止めを刺す。

「爆ぜろ!爆斬剣!」

俺は一言そう叫んだ。

その瞬間、魔女は爆発して消滅した。

サク！

地面に正宗が突き刺さった。

「あっけないものだったな」

俺はその剣を抜きながら呟いた。

それと同時に、巴さんの周囲に張った結界を解除する。

「渉君。あなたは一体」

「ごめんなさい。時間がないので……………我、輪廻を断ち切る者なり」

俺は両手に持つ吉宗と正宗を頭上に掲げる。

「輪廻断ち切りし光の輪！」

俺はそれを思いっきり振り下ろした。

「あぐ！」

巴さんはそのまま糸が切れた人形のように、地面に倒れた。

俺にはもう一仕事があった。

「あ、ああ……………」

「渉、あんた……………」

まどかを魔法少女にしないでほしいと勝手に解釈した俺が、やるべ

きことが。

俺は、信じられないものを見ているようなまなざしの二人に向けて片手を掲げた。

「眠りの中で、負の夢を見よ。挫折導き負の誘い」

俺の力で、まどかとさやか、ついでにこの場にはいない暁美さん達の記憶を封じながら夢を見せた。

巴さんがあのまま魔女に食い殺されるといふ負の夢を。

細かいことは知らないが、これでまどかは魔法少女になることはないだろう。

俺は地面に倒れた巴さんを抱えて、その場を後にした。

「さて、どうしましょうかね？この馬鹿2号」

俺はソファアに横たえた、制服姿の巴さんを見ながらそう呟いた。

利口者に差し出す手はあっても、馬鹿に差し出す手はない。

これは俺の持論だ。

「……………ま、彼女には助けてもらった借りがあるし、助けちゃいますか」

俺はそう決心すると、術式の準備をした。

それはものの数分で完了した。

「さて……………コンタクト」

俺は巴さんの前に手を掲げると、彼女の因果に接続した。

これで、因果と言うのは彼女の運命のようなものだ。

これをいじくれば彼女の死ぬ時期を伸ばしたり縮めたりすることが出来る。

もちろん、そんなことはよっぽどのことがない限りはしないが。

これが俺の持つ最強の能力だ。

「……………接続が悪い」

俺の頭の中に入り込んでくる情報は、なぜかノイズが入り混じっていた。

もちろん普通はこんなことはない。

「……………彼女は死んでいないはずだから、魂はあるはずだ。なのになんでこんなにノイズが」

因果は彼女の魂にあるので、魂事態に接続することによって、俺は因果を見ることが出来るのだが、なぜかできないのだ。

「……………まさか」

俺の視線の先にあるのは、彼女のソウルジェム。

「……………コンタクト」

俺は試しにソウルジェムに手を掲げて因果に接続を試みた。

「……………出来たよ」

今度はノイズなしでクリアな因果情報が頭に流れ込んできた。

(こいつ、もしかして……………)

俺は頭に浮かんだ考えを頭の片隅に追いやった。

今やるべきことは、彼女の因果を調べることだ。

死にかけたということは、彼女の運命はもう終わっているはずだ

(やっぱり止まってるな。……………やっちゃいけないけど、因果情報の

拡大で彼女の死の時期を遅めるか)

因果情報の拡大は寿命を延ばすことになるので、やってはいけない
禁術だ。

やれば、俺も何かしらのペナルティーが科せられることになるが、
それを無視して俺は因果情報の拡大処理をした。

(代償は魔法少女でもやめて貰うことだな)

俺はペナルティーを軽くするために、代償を取る。
ついでに、魔法少女をやめさせるのは簡単だ。

因果情報から削除すればいいのだから。

「因果情報の削除完了。後はクロース」

俺は接続を閉じた。

「……………やっぱりあのソウルジェムは」

俺は目の前に浮かび上がる黄色の球体を見ながら、確証を得た。

「彼女の魂そのもの。そして、あいつがやったのは、魂を抜き取る
ことか」

俺はこの時、魔法少女の正体と絶対的な弱点が少しだけ見えたよう
な気がした。

「まあ、この魂を肉体に括り付けないと」

俺は小さくため息をつきながら巴さんに魂を戻す。

彼女を助ける術式を終えた時、もう深夜の3時だった。

俺は、巴さんに毛布を掛けると、玄関先で寝た。

「う……ん」

次の日の夜。

体中にこびりついた化学薬品の液体によるダメージを回復させてい
る時、眠っていた巴さんが目を覚ました。

「起きましたか？馬鹿2号の巴さん？」

「馬鹿2号ってどういう意味かしら？」

「そのままの意味です。出来る事をする努力もしない人や、同じ過

ちを繰り返す人の事です」

早速険悪な雰囲気になってしまった。

「ところで、ここはどこかしら？」

「俺の家です」

「……………なんで助けてくれたのかしら？」

しれつと言う俺に、呆れたような視線を送った巴さんは、そう聞いてきた。

「最初に会った時に助けてもらった借りがありましたからね。借りを作られたまま死なれると、こっちも居心地が悪いもので」

助けてもらったお礼はちゃんとするのが俺の流儀だ。

「一度しか説明しないので、よく聞いてください。あなたの魂の具現化であるソウルジエムを消滅させて、魂をあなたの体に戻しました。あと因果の方もいじくって死の運命を変えましたので」

俺はいちいち説明するのがめんどくさいので、やったことを一遍に言った。

「そういえば、ソウルジエムが見当たらないわ」

巴さんが辺りを見渡ししながら呟くと、俺の方を睨んできた。

「ソウルジエムが魂の具現化ってどういう事かしら？」

「おそらくですが、キュウベえと契約した際に、魂を抜かれたのでしょう。それが形となったのがソウルジエムです」

「……………嘘を言っている様子ではないようね」

完全に信じてはいないが納得はしたようだ。

「俺はあなたの運命の情報が詰まったもの……………因果に接続して、魔法少女の力を消去し、死の時期を遅らせました」

「……………」

俺の説明に、巴さんは俺を信じられないものを見るような目で見た。

「あなた一体何者なの？」

「そうですね……………いいでしょう、お話ししましょう。俺の正体と目的を」

そして俺は巴さんに、自分の正体と目的を話した。

「なるほどね……………にわかには信じられないけど、目の前で見せられてはね」

俺の話聞き終わった巴さんは、俺の話信じてくれたようだった。

「信じるも信じないもあなた次第です。それよりも、今後に関してです」

俺は話題を変えた。

ここからが問題だ。

「とりあえず、あなたはまどか達の中では死んだことになっていきます。なので、ここから出ることは控えてもらいたいです」

「……………それも、あなたの目的のためかしら？」

「一概にそうだとは言い切れません。あなたがいなくなったことによつて、状況が動くかもしれませぬので。理解していただけましたか？」

巴さんに俺は、そう答えることしかできなかった。

彼女が死んでいるということが、今後にどのような変化をもたらすかがいまだに不明なのだ。

「そうね……涉様のお言葉にに従わらせてもらいます」

「様付けはやめてください。今の俺はあなたの後輩ですので」

もとより、俺は様付けで呼ばれるのに慣れていない。

「それでは、悪いんだけど、私の部屋から着替えとか持ってきて貰えるかしら？タンスの中にしまつてあるはず。あと出来れば中身を見ないで」

「……………了解しました」

俺はそう答えるしかできなかった。

つまりはタンスごと持つてこいと言つ事か？

「後、あなたには特権で魔法少女になつて戦うことが出来ます。ただし1回だけなので、使いどころを考えてください」

俺は彼女にそう言うと、着替えを取りに彼女のマンションに向かった。

ちなみにタンスは俺の力で、移動させました。

戦いのとき以外で力を使用するのは、これが初めてだ。

そして現在。

「それで結局、あれの原因は分かったのかしら」

俺の目的を果たすために、協力してもらっている巴さんが尋ねてきた。

「はい。確証はまだですが一名思い当たる人物が」

俺はそう言っただけで空中に一人の少女の顔写真を表示させる。それを見た巴さんの表情が険しくなる。

「やっぱり彼女なのね」

「はい。世界の原初物質プリマテリアルの不安定化をもたらした、諸悪の根源である可能性が高い最重要候補人物……」

俺もその少女を見る。

絶望をしているようなマイナスオーラを醸し出す少女。

「
 曉美 ほむら」

曉美さんを。

（お前が俺の”敵”なのか？）

俺は心の中でそう問いかける。

その問いかけに、答えは返ってこなかった。

第12話 悲劇の真実（後書き）

少々端折ってしまいました。

次回は、アニメの第6話に戻ります。

第12・5話 それでも、お前は奇跡を望むのか？（前書き）

本篇とは関係ない話です。

渉と恭介のやり取りになります。

第12・5話 それでも、お前は奇跡を望むのか？

それは、シャルロッテの魔女が現れる数日前の事

「ここか……」

俺、小野 渉は病院のある一室の前にいた。

そこにいる人物の名前は『上条 恭介』
簡単に言えば見舞いだ。

(どんな奴だろう?)

俺が見舞いに来た理由は、さやかとの契約の理由にもなる人物を見るためだ。

コンコン

「はい」

ドアをノックすると、中から返事が聞こえたので、俺はドアを開けた。

「失礼します」

「誰だい？君は」

ベッドで上半身を起こしている青年がこっちを見てそう聞いてくる。

「初めまして、上条 恭介。小野 渉だ」

「君が渉君か。初めまして、君の事はさやかからよく聞かされてい

るよ。それと僕の事は恭介で構わないよ」

「だったら、俺も涉でいい」

まずは互いに自己紹介を済ませた。

俺はパイプいすに腰掛けた。

さやかが何を言っているのかが気になったが、それは置いておくことにして、本題に入ることにした。

「ふ〜ん。君が”元”天才バイオリストか」

「……………君は僕をいじめるつもりかい？」

恭介が目を細めて睨みつけてきた。

「別に。いじめている気はないさ。ただ事実確認をしたまでだ」

「……………」
「なあ、恭介。もし生きている中でたった一つの奇跡が起こせるとしたら、君は何を望む？」

「そうだね……………もう一度バイオリンを弾くこと……………かな」

俺はその答えを聞いて、彼の人となりが分かった。

「バイオリンが好きなんだな」

「そうだね」

「そう言った面での才能は、とても素晴らしいと思う。でも、その奇跡を起こしたら一生死ぬまで、死と隣り合わせの戦いをしなければいけないとしたら、その奇跡を望めるか？」

「……………」

俺の問いかけに、恭介は何も答えない。

「奇跡には、代償もあるという事を覚えておいた方がいいな」

「代償？」

「そう。例えば、恭介が遅刻しそうで走っている時に、路地裏から車が来たでしょう。でも、君は幸運にも車にひかれることはなかった……まさに奇跡だよな、これ」

「そうだね」

俺の例えに恭介がそう相槌を打つ。

「でも、この奇跡は”時間”を代償にしている。だから、君は遅刻してしまった」

それが、俺の答えだった。

「どんな奇跡にも、代償は存在する。それは、一歩間違えれば死へと導くものさ」

奇跡の代償、それはとても重くそして切ないものだ。

「それでも、お前は奇跡を望むのか？」

「……………」

俺の問いかけに、恭介は何も答えない。

だが、必死に考えている様子がかがえた。

そんな彼をしり目に、俺はパイプいすから立ち上がった。

「それじゃ、僕はこれで失礼するよ」

「あ、ごめんね、大したおもてなしが出来なくて」

「いや、こっちも変な話をして悪かった」

恭介が謝ってきたので、俺もそう謝り返すと、そのまま出口の方へ歩いていく。

「あ、そうだ」

俺は、出る寸前に言いたいことを思い出したので、振り返った。

「もし、恭介の指が動かせるようになって、コンクールかなんかに出れたら、見に行つてあげる」

「ありがとう」

「それじゃ」

それが俺と恭介が交わした、”約束”であった。

第12・5話 それでも、お前は奇跡を望むのか？（後書き）

今回は、本篇に戻ります。

それでは、次回でお会いしましょう

第13話 正義と悪（前書き）

おそらく今回は、替否両論になりそうな予感がします。

第13話 正義と悪

3人称Side

翌日のあるゲームセンター。

そこにあるダンスゲームをプレイする赤髪の少女……杏子がいた。口にはお菓子を加えていた。

そのゲーム機に『プレイ中の飲食はご遠慮ください』と言う注意書きがあるにもかかわらず……。

そして淡々と軽々プレイしている彼女に、近づく人物がいた

「よう、今度は何さ」

後ろを振り向かず杏子はプレイしながら後ろにいるであろう人物に用件を聞く。

「この街を、貴女に預けたい」

後ろにいた人物……ほむらの一言に、口にくわえていたお菓子がポキッと音を立てて折れた。

「どついつ風の吹き回しよ」

「魔法少女には、貴女みたいな子が相応しいわ。美樹さやかでは務まらない」

杏子の言葉に、ほむらはそう答える

「ふん、元よりそのつもりだけどき。そのさやかって奴、どうする？ほっときゃまた突っかかってくるよ」

「なるべく穏便に済ませたい。貴女は手を出さないで。私に対処する」

曲の方もひと段落つき、杏子はほむらの方へと振り向く。

「まだ肝心なところを聞いてない。あんた何者だ？」

「……………」

杏子の問いかけに、ほむらは何も答えない。

「一体何が狙いなのだ」

再び始まった曲に合わせて、再び驚り始める。

「二週間後、この街にワルプルギスの夜が来る」

ほむらの言葉に、杏子の表情が険しくなる。

「なぜわかる？」

「それは秘密。ともかく、そいつさえ倒せたら、私はこの街を出て行く。あとは貴女の好きにすればいい」

優雅に髪を払いながら、答える。

「ふうん……ワルプルギスの夜ね。確かに一人じゃ手強いが、二人がかりなら勝てるかもなあ。食うかい？」

曲が終わり杏子はほむらの方に振り向くと、どこから取り出したのかお菓子の入った箱をほむらに差し出す。

それは、二人の間で”同盟”が結ばれた瞬間でもあった。

夕方、俺達は先日赤髪の少女と交戦した場所に来ていた。

「ダメだ。時間が経ち過ぎている。昨夜の使い魔ゆっくを追う手がかりは無さそうだ」

あたりを調べていたキュウベえがそう呟いた。

「そう……」

さやかは先ほどからずっと険しい表情をしていた。

「ねえ、さやかちゃん。このまま魔女退治を続けてたら、また昨日の子と会うんじゃないの？」

「まあ、当然そうなるだろうね」

まどかの言葉に、さやかが答える。

「だったらさ、先にあの子ともう一度会って、ちゃんと話をしておくべきじゃないかな。でないと、またいきなり喧嘩の続きになっちゃうよ」

そのまどかの言葉に、さやかの表情が一変する。

「喧嘩ねえ。夕べのあれが、まどかにはただの喧嘩に見えたの？」
「……え？」

さやかという言葉に、まどかが声を上げた。

「あれはねえ、正真正銘、殺し合いだったよ。お互いナメてかかってたのは最初だけ。途中からは、アイツも私も本気で相手を終わらせようとしてた」

「そんなの……尚更ダメだよ」

確かにさやかの言うとおりだった。

途中からあの佐倉杏子と言う少女は、本気でさやかを殺そうとしていた。

「だから話し合えって？バカ言わないで。相手はグリーンフィードの為に人間をえさにしようって奴なんだよ？どうやって折り合いつけろって言うの？」

「さやかちゃんは、魔女をやっつけるために魔法少女になったんでしょ？あの子は魔女じゃない、同じ魔法少女なんだよ。探せばきっと、仲良くする方法だってあると思うの。やり方は違っても、魔女を退治したいと思う気持ちは同じでしょ？昨日の子も。あと、ほむらちゃんも」

「ツクー！ー！」

まどかの”ほむらちゃん”と言う言葉に、さやかが反応した。

「マミさんだって、ほむらちゃんと喧嘩してなかったら」

「そんなわけない！ー！」

まどかの言葉を、さやかが大声で叫んで遮った。

「まどかだつて見てたでしょ？あの時あいつはマミさんがやられるのを待ってから魔女を倒しに来た。あいつはグリーンシード欲しさにマミさんを見殺しにしたんだ！」

「それ……違つよ」

まどかの言うとおりで。

俺と暁美さんは馬鹿2号によって拘束させられていた。

「あの転校生も、昨日の杏子つて奴と同類なんだ。自分の都合しか考えてない！今なら分かるよ。マミさんだけが特別だったんだ。他の魔法少女なんて、あんな奴らばかりなんだよ」

（こいつ……）

俺はさやかがかわいそうな人間に見えた。
なぜかは分からないが。

「タベ逃した使い魔は小物だったけど、それでも人を殺すんだよ？次にあいつが狙うのは、まどかのパパやママかもしれない。たっくんかもしれないんだよ？それでもまどかは平気なの？ほつとこうとする奴を許せるの？」

「さやかちゃん……」

「私はね、ただ魔女と戦うだけじゃなくて、大切な人を守るためにこの力を望んだの。だから、もし魔女より悪い人間がいれば、私は戦うよ。例えそれが、魔法少女でも」

さやかは、まどかにそう言い切ると、去って行った。

それを俺は追いかけた。

「さやか!」

「……何? 涉」

呼び止められたことに、不快感をあらわにしながら答えるさやか。

「これは、お前の友人として言わせてもらう。もし彼女を恨み、倒すのであれば、俺もその対象になるのか?」

「それは……」

俺の言葉に、さやかが言いよどむ。

「何だ? お前の理屈だと、俺も巴さんを見殺しにしたんだぞ? 助けられる力もあるのにな」

さやかは先日の俺の戦いぶりを見ているはずだから、それは重々承知だろう。

「で、やるの? やらないの?」

「………なんで」

さやかが口を開いた。

「なんでマミさんを助けなかったの!?!? なんで見殺しに!?!」

「なぜって? そんなの……俺は100人死にかける者がいれば10

0人全員を救うなんて言う愚かな思想は持っていない。それにこの世界はね、さやか。一人の人間を助けると関係ない人が一人死ぬことになるんだ」

「どうしてよ!?!」

俺の言葉に、さやかが反論してくる。

「それが、世界のおきてだ。生きているものが多くなったら、地球はパンクだ。だから人を救えばその分誰かが不幸になり、やがては変わりに死んでいく。それをしても、さやかは巴さんを救ってほしかったか?」

「理不尽じゃない。なんであいつらだけ……」

さやかのこの言葉に、俺は甘いと思った。

世界は常に理不尽で、弱い奴から消していくものだ。

「どうでもいいことだ。それに、もし助けられることが出来ても俺は馬鹿や愚か者、生きる価値のない奴は、見殺しにする。まあ生きる価値なしの場合はこっちから殺しに行くまでだけだ」

「……………」

俺の言葉に、さやかはものすごい形相で睨みつけると、俺に背を向けた。

「……………さやか、お前は正義の味方になると言ったな?」

俺はさやかにそう問いかけた。

「そつよ。私はあんたとは違う」

「……………やめておけ」

俺は一言そう告げた。

「え？」

「そのくだらない目的を捨てると言ってるんだ」

「なんでよー!!」

「あんな、正義なんてものはこの世にはないんだ。船体ヒーローとか良い例だろ？家屋を壊しても、戦闘中だからと言う理由で周りはヒーロー扱いさ」

俺の嫌な予感はどうやら当たっていたらしい。

この世界には正義なんてものはない。

そもそも何が正義なのか、そういう定義が全くないのだ。

「もしそのまま突き進んだら、お前は無名の偉人のような目にあうぞ」

「……私はあんな奴のような馬鹿なことはしない。打算で友達を殺すなんてそれこそ生きる価値ないよ。もしなるとしても私はちゃんとした形で偉人になる」

「……………」

俺は、殴りかかりそうになる気持ちを落ち着かせた。

「そう。なら、無名の偉人のように、永遠に人々から蔑まれて遺骨を踏みつけられるような風にはならないことだね」

俺はそう言つとさやかに背を向けた。

「言うておくが。そのまま突き進めば、お前……………世界から消されるぞ」

「え！？それはどういう

」

俺はいう事だけ言ってさやかか言葉を無視して歩いた。
強靱な力は、”世界”にとっては害でしかない。
そのような力を持つ者は、やがて世界から排除こぞされるのだ。
無名の偉人のように。

(どっかでの胸のむかむかを晴らすか)

俺はそんな事を考えながら路地を抜けるのだった。

「そう、さやかさん。そんな事を」
「ああ。このままいくと心配だ」

自宅兼対策本部に戻った俺は、巴さんとティータイムを楽しんでいた。
巴さんの服装は私服なのだろうか、青を基調にしたジャケットに白と黒のスカートだった。

「とじろで巴ちゃん

」

「ムム」

俺の言葉を遮って巴さんがそう呟いた。

「私の事はママで構わないわ。それが嫌なら私はあなたの事を涉様
って呼んじゃうわよ？」

「……………俺が様付けで呼ばれるの嫌だと知って言ってるだろ…………マ
ママ」

俺の言葉に、ママさんは万弁の笑みで”合格ね”と返した。

「……………ところでママさん。ひとつ聞きたいことがある」
「何かしら？」

俺は一つだけ気になることを聞いた。

「なんでお前は俺のサポートをしてくれるのだ？確かにここから出
るなど言ったのは俺だが、手伝えとは言っていない」

「……………罪滅ぼし……………かしらね」

ママさんはそう呟いた。

「私はあの二人を危険な目に合わせる世界へと、引きづり込もうと
していたわ。それにまさかソウルジェムがあんな意味を持っている
なんて知らなかった……………だから少しでもこうして罪滅ぼしをしたい
のよ」

「……………」

俺は何も言えなかった。

ママさんは涙を流していた。

そんな彼女に、俺は何て言えばいいんだ？

自業自得だと言っのか？

それは、あまりにもひどすぎだ。

「嘆く時間があるのなら、手を動かせ。調査を進めないところっちにも時間がないんだ」

「……そうね」

俺の言葉に、マミさんはそう答えると、俺の横にあるモニターとにらめっこをしながらキーボードを打っていく。

(くそ！魔女のできる過程がなかなか見つからない)

俺は気になっていたことの一つでもある、魔女の誕生の秘密を調べていた。

なぜかは分からない。

だが、これが分かることが俺の目的を成し遂げられる力ギになるのではないかと言う予感がしたのだ。

そんな時だった。

『まどか、まどか！急いで、さやかが危ない！！ついてきて！』

テレパシーでキュウベエの言葉が聞こえてきた。

「……マミさんはそこで待機。俺がいく」

「分かったわ。気を付けてね」

俺はマミさんの言葉に、片手をあげるとそのまま家を飛び出した。

「まどか！」

「わ、渉君!？」

まどかが俺がどうしてここにいるの?と言いたげな表情をしていた。

「キュウベエのテレパシーが聞こえたんだ。キュウベエ、早く行つた方がいいか？」

「もちろんだよ。一刻を争う事態だよ！」

俺の問いかけに、キュウベエはそう答えた。

「まどか、最初に謝っておく。すまない」

俺はそう言うときまどかのそばで膝をつくとき、片腕をまどかの膝にのせもつ片方の腕をまどかの上半身にさせるようにして抱き上げた。

「え?何が……つて、ええ!？」

「声を出すな!舌をかむぞ!！」

「う、うん／＼／＼／＼」

なぜかまどかの顔が赤い。

だが、今はそれよりも早く駆けつけることだけだ。

「リミットブレイク・ブートー！」

俺は封じられた力を開放した。

「しっかりと掴まれよ！」

「え？……きゃあああ！！！！？」

俺はまどかに声をかけ全速力で走った。

その速さは、そばを走る車と同じぐらいの速さだ。

『まどか、さやかが話を聞きそうにない時の対処法を教える』

『た、たた……対処法？』

何だか、落ち着きがないまどかをよそに、俺は説明を続けた。

『さやかのソウルジエムを、さやかの体からできるだけ離すんだ』

『離すだけでいいの？』

『そう。そうすれば、さやかの動きを止めることが出来る。でも、それはかなり危険な行為だ。一歩間違えればさやかの命まで危うくなる。やるのならちゃんと考えて』

『わ、分かった』

俺の忠告に、まどかは頷いた。

俺は、この時知らなかった。

この助言が、まどかにあんな行動をとらせるなんて。

まどか Side

私は、渉君にお姫様抱っこをされながら、さやかちゃんがいるところに向かっていました。

(あつう、頭が真っ白になりそう)

こんな時に、そんな事を考えている自分が、とても恥ずかしくていやでした。

(でもどうしよう。もしさやかちゃんが話を聞いてくれなかったら)

私は渉君の出した提案について考えていました。

一步でも間違えれば、さやかちゃんを危険な目に合わせてしまう。でも……

『本当に他にどうしようもないほどどん詰まりになったら、いっそ、思い切って間違えちゃうのも手なんだよ』

ママの言葉が頭をよぎりました。

(そうだね。たまには、思い切って間違えよう。さやかちゃんも謝ってくれば許してくれるはず……たぶん)

私は心の中でそう決心しました。

「着いたぞ」

「あ……」

到着したのか、渉君が私を地面に降ろしました。

ちよつと残念だと思う私がここにいました。

そして、私の目の前には、さやかちゃんと昨日の魔法少女が向かい合って立っていました。

そんな二人の所に、私は走って行くのでした。

自分の決意が、どうなるのかも知らないで。

S
i
d
e

o
u
t

第13話 正義と悪（後書き）

ご感想、アドバイスをお待ちしております。

第14話 真実(前書き)

今回、作中での独自解釈や設定が出てきますので、ご了承ください。

第14話 真実

さやかがいる場所に到着すると、そこにはお互い向かい合っているさやかと佐倉 杏子の姿があった。

佐倉の方はその手に武器の槍を構えて臨戦態勢だ。

対するさやかも手にソウルジェムがあった。

一触即発の雰囲気だ。

「待つて、さやかちゃん！」

「まどか。邪魔しないで！そもそもまどかは関係ないんだから！」

顔だけをまどかの方に向けると冷たくそう言い放った。

「ダメだよこんなの、絶対おかしいよ」

「ふん、ウザい奴にはウザい仲間がいるもんだねえ」

こっちを見ながらそう言い放ってくる佐倉。

「じゃあ、貴女の仲間はどくなのかしら？」

「あっ……チッ」

すると佐倉の背後に、暁美さんが現れた。

「話が違いわ。美樹さやかには手を出すなと言ったはずよ」

「あんたのやり方じゃ、手ぬる過ぎるんだよ。どの道向こっちはやる気だぜ」

どうやら二人は手を組んでいるようだ。

それだけは俺にも理解できた。

「なら、私が相手をする。手出ししないで」

「はんッ、じゃあコイツを食い終わるまで待つてやる」

佐倉は暁美さんに口にくわえているお菓子を指さしながら、言った。

「充分よ」

「ナメるんじゃないわよ!」

暁美さんの答えにとうとう我慢の限界が来たのか、ソウルジェムを掲げて変身しようとする。

「さやかちゃん、ゴメン!」

そんな中、まどかは突然走りだしさやかの手からソウルジェムをひったくる。

「えい!!」

そしてソウルジェムを思いっきり、車道に向けて放り投げた。

「なッ!?!」

俺はその行動に、衝撃を受けた。

「まどか! あんたなんて事を!」

さやかが、怒ってまどかに詰め寄る

「だって、ごうしないと

」

まどかがそう言いかけた時だった。

「え……さやかちゃん？」

突然さやかの体が人形のように崩れ落ちた。
それをまどかが受け止めた。

「今はマズかったよ、まどか」

橋の手すりに飛びあがったキュウベえがまどかにそう言った。

「え？」

「よりもよって、友達を放り投げるなんて、どうかしてるよ」

信じられないと言った感じにまどかに言った。

「何？何なの？」

まどかは、何が起きているのかが分からない様子だった。
そんな時佐倉が、俺達の所に駆け寄るとさやかの首根っこを掴んで
持ち上げた。

「やめてっ」

まどかの言葉を無視して、佐倉が目を細めると、信じられないと言
った様子で目を見開いた。

「どういうことだオイ……。コイツ死んでるじゃねえかよ」
「えっ？」

佐倉の言葉に、まどかが固まった。

(やっぱりか)

俺は内心で確証を得た。

やはり俺の推測は当たっていたようだ。

「さやかちゃん？……ね？さやかちゃん？起きて……ねえ、ねえちよつと、どうしたの？ねえ！嫌だよこんなの、さやかちゃん！！」

まどかが、地面に横たわっているさやかの体を必死に揺さぶって声をかけていた。

「何がどうなってやがんだ……おいッ！！」

それを見ていた佐倉がキュウベえに詰め寄る。

「簡単なことだ。精神とのリンクが完全に切れたんだ」

「え？」

「どういう意味だ」

俺の答えに佐倉が目を細める。

「お前たち魔法少女が持っているソウルジェム。それは自分の魂を具現化したものなんだ」

「な……何だと？」

衝撃の事実、佐倉が目を見開いた。

「これは俺の推測だが、キュウベエの役割は魂を抜き取ってソウルジェムに具現化させることなんじゃねえのか？ 願い事をかなえる代わりにな」

佐倉が睨んできて怖いが、俺は考えを言い切った。

「とまあ、勝手に話したのだが、間違っている箇所、抜けている箇所等があったら修正をよろしく」

俺はキュウベエにその声をかけると、二、三步後ろに下がった。

「まあ、大まかには正しいね」

「おい！これはどういう意味だツ！？」

キュウベエが俺に答えていると佐倉がキュウベエに怒鳴り散らす

「君たち魔法少女が身体をコントロールできるのは、せいぜい100m圏内が限度だからね。普段は当然肌身離さず持ち歩いてるんだから、こういう事故は滅多にあることじゃないんだけど……」

「何言ってるのよキュウベエ、涉君！助けてよ、さやかちゃんを死なせないでっ！！」

まどかが俺達に向けて叫ぶが、いくら俺でも魂の原本がなければどうにもできない。

「はあ……まどか、そっちはさやかじゃなくて、ただの抜け殻なんだって。さやかはさつき、君が投げて捨てちゃったじゃないか」

「え？」

ため息をつきながらのキュウベエの言葉に、まどかは涙を浮かべな

がら固まった。

「ただの人間と同じ、壊れやすい身体のまま、魔女と戦ってくれなんて、とてもお願い出来ないよ。君たち魔法少女にとって、元の身体なんていうのは、外付けのハードウェアでしかないんだ」

キユウベえの”元の体は外付けのハードウェア”と言う言葉に、俺は無意識のうちに両手を握りしめていた。そうでもしないと、冷静でいられる自信がなかったからだ。

「君たちの本体としての魂には、魔力をより効率よく運用できるコンパクトで、安全な姿が与えられているんだ。魔法少女との契約を取り結ぶ、僕の役目はね。君たちの魂を抜き取って、ソウルジェムに変える事なのさ」

「デメエは……何てことを……。ふざけんじゃねえ!!それじゃアタシたち、ゾンビにされたようなもんじゃないか!!」

キユウベえの言葉に、佐倉が首根っこを?まえて盛り上げる。

「むしろ便利だろう?心臓が破れても、ありつたけの血を抜かれても、その身体は魔力で修理すれば、すぐまた動くようになる。ソウルジェムさえ砕かれない限り、君たちは無敵だよ。弱点だらけの人体よりも、余程戦いでは有利じゃないか」

「ひどいよ……そんなのあんまりだよ……」

キユウベえの言葉に、まどかはそう言ってさやかかの中にしがみついて泣き出した。

「君たちはいつもそうだね。事実をありのままに伝えると、決まって同じ反応をする。訳が分からないよ。どうして人間はそんなに、

魂の在処にこだわるんだい？」

「……悪い。話せと言っておいてなんだがもう黙れ。お前の言葉を聞いていると不愉快だ」

キユウベえの言葉に、とうとう我慢の限界が近づいたので、俺は冷たい声でキユウベえに言った。
そんな時だった。

「あっ」

杏子の声に俺達は、さやかの方を見るとそこには若干息を切らしている曉美さんの姿があった。

そしてさやかの手にはソウルジェムがあった。

どうやら彼女が取ってきたらしい。

突然起き上がって俺達を見回した後、

「何？何なの？」

さやかは訳が分からないと言った様子で言葉を口にした。

「そう……知ってしまったのね、ソウルジェムの秘密を」

対策本部に戻った俺は、マミさんに事の次第を話した。

マミさんは俯いているのでよく分からないが、その声色はとても悲しげなものだった。

「ああ。あいつや佐倉杏子、まどかもかなりショックを受けているようだった」

俺はあの時の事を思い出しながら呟いた。

「それで、渉君はどういう手に出るのかしら？」

「そうだな……今は様子見と言った所かな」

俺の方針に、マミさんがそう、と頷いたことで、この話は終わりとなった。

そして俺達は、再び作業を始めるのであった。

翌日、教室にさやかはなかった。

そして昼休み、俺とまどかは暁美さんを連れて屋上に来ていた。

俺達はフェンスに寄り掛かっていた。

「ほむらちゃんと渉君は……知ってたの？」

誰も何も言わない中、まどかが口を開けた。

「……………」

俺と曉美さんは何も答えなかった。
だが、それは肯定と受け取ることが出来た。
もちろん俺は知っていたが。

「どうして教えてくれなかったの？」

「前もって話しても、信じてくれた人は今まで一人もいなかったわ」

それもしようがないことだろう。

何せ、まったくもって確証のないことだ。

もしであった頃の俺ならば、信じなかっただろう。

「どうしてあんなことを私に教えたの？」

まどかが俺に問いかけてきた。

「俺は何も嘘はついていない。さやかからあれを離せば、体の動きは止められ理るしそれ相応の危険もあると言った」

俺は、目を閉じて答えた。

「しかし、まどかがソウルジェムを放り投げるなんて想定外だ。95%の確率でまどかの場合は俺の言った通りに体から離すのだと思っていたのだが」

「確率って………ひどいよ」

まどかが俺にそう非難した。

「………すまない。つい癖だな。何でもかんでも確率で決めようとしちまうんだ」

それが俺の中で一番嫌いな事だった。
人を動かすのは数字ではなく、心だ。
それを知ってもなお、時折こうして数字で考えてしまう。
だからこそ俺は

「生きる価値のない愚か者なんだ」
「えっ!?!」

俺のつぶやきが聞こえていたらしく、まどかが驚いた風にかつちを見ている。

「あ、なんでもない」

俺は平静を装ってそう答えた。

「キュウベえはどうしてこんなひどいことをするの?」
「あいつは酷いとさえ思っていない。人間の価値観が通用しない生き物だから。何もかも奇跡の正当な対価だと、そう言い張るだけよ」

まどかの疑問に答える暁美さん。
だが、その言葉に俺はキュウベえが機械生命体ではないかと思った。
なぜなら、言っていることや、やっていることが妙にロボットっぽいものだと感じたからだ。

「全然釣り合っていないよ。あんな体にされちゃうなんて。さやかちゃんはまだ、好きな人の怪我を治したかっただけなのに」

するとまどかは暁美さんの方を向きながら言い放つと、下を向いて

泣き出しそうになっていた。

「奇跡であることに違いはないわ。不可能を可能にしたんだから。美樹さやかが一生を費やして介護しても、あの少年が再び演奏できるようになる日は来なかった。奇跡はね、本当なら人の命でさえ購えるものじゃないのよ。それを売って歩いているのがあいつ」

「さやかちゃんは、元の暮らしには戻れないの？」

「前にも言ったわよね。美樹さやかのことは諦めてって」

まどかの懇願に、暁美さん冷たい言葉が浴びせられる。

「さやかちゃんは私を助けてくれたの。さやかちゃんが魔法少女じゃなかったら、あの時、私も仁美ちゃんも死んでたの」

「感謝と責任を混同しては駄目よ。貴女には彼女を救う手立てなんてない。引け目を感じたくないからって、借りを返そうだなんて、そんな出過ぎた考えは捨てなさい」

いつもなら、暁美さんのこの言葉に、反論していた俺だがなぜか俺にはそれが出来なかった。

この言葉を否定できるほどの何かを、俺は持っていなかった。

「ほむらちゃん、どうしていつも冷たいの？」

「そうね……きつともう人間じゃないから、かもね」

暁美さんの言葉に、俺とまどかは、何もいう事は出来なかった。

放課後、俺はさやかへの反応を頼りに歩いていた。

「ここって……教会だよな？」

しばらく歩くとそこにあつたのは、大きな屋敷のような建物だったが、俺にはそこが教会に見えた。

「ちよつとばかり長い話になる」

すると、中から佐倉の声が聞こえてきた。
どうやらこの中に行くとみて間違いないだろう。

そう思い、俺は誰にも見つからないように不可視の術をかけて中に入った。

中は、建物自体が荒れていて、ステンドグラスが割れていたり、もはやまともに機能していない場所だということがすぐに分かった。

「ここはね、アタシの親父の教会だった。正直過ぎて、優し過ぎる人だった。毎朝新聞を読む度に涙を浮かべて、真剣に悩んでるような人だよ」

そんな中、佐倉の話し声が聞こえてきたので、俺はそれに耳を傾けた。

「新しい時代を救うには、新しい信仰が必要だって、それが親父の言い分だった。だからある時、教義にないことまで信者に説教するようになった。もちろん、信者の足はパツタリ途絶えたよ。本部からも破門された。誰も親父の話を聞こうとしなかった。当然だよ。傍から見れば胡散臭い新興宗教さ。どんなに正しいこと、当たり前前のご話を話そうとしても、世間じゃただの鼻つまみ者さ。アタシたちは一家揃って、食う物にも事欠く有様だった。納得できなかったよ。親父は間違ったことなんて言っていなかった。ただ、人と違うことを話しただけだ」

彼女の昔話に、俺はその場を動けなかった。

人と言うのは、新しいことを始めるのに臆病な存在だ。とくに宗教とかはその予兆が出やすい。

だから、人が離れていくのも当然なのだ。

「5分でいい、ちゃんと耳を傾けてくれれば、正しいこと言ってるって誰にでもわかったはずなんだ。なのに、誰も相手をしてくれなかった。悔しかった、許せなかった。誰もあの人のことわかってくれないのが、アタシには我慢できなかった。だから、キュウベえに頼んだんだよ。みんなが親父の話を、真面目に聞いてくれますように。翌朝には親父の教会は、押しかける人でごった返していた。毎日おっかなくなるほどの勢いで信者は増えていった。アタシはアタシで、晴れて魔法少女の仲間入りさ。いくら親父の説法が正しくたって、それで魔法少女が退治できるわけじゃない。だからそこはアタシの出番だって、バカみたいに意気込んでいたよ。アタシと親父で、表と裏からこの世界を救うんだって……でもね、ある時力ラクリが親父にバレた」

佐倉の声色が少しだけ暗くなった。

「大勢の信者が、ただ信仰のためじゃなく、魔法の力で集まってきたんだと知った時、親父はブチ切れたよ。娘のアタシを、人の心を惑わす魔女だつて罵った。笑っちゃうよね。アタシは毎晩、本物の魔女と戦い続けてたつてのに。それで親父は壊れちまった。最後は惨めだったよ。酒に溺れて、頭がイカれて。とうとう家族を道連れに、無理心中さ。アタシ一人を、置き去りにしてね。アタシの祈りが、家族を壊しちまったんだ。他人の都合を知りもせず、勝手な願いごとをしたせいで、結局誰もが不幸になった。その時心に誓ったんだよ。もう二度と他人のために魔法を使ったりしない。この力は、全て自分のためだけに使い切るつて」

そこまで話すと、佐倉は過去の話をするのをやめた。
「どうやら今のでおしまいみたいだ。」

だが、俺は彼女に何ていえばいいんだ？
ドツチにしても、彼女に声をかけるほど俺は人としてできてはいない。

「奇跡つてのはタダじゃないんだ。希望を祈れば、それと同じ分だけの絶望が撒き散らされる。そうやって差し引きをゼロにして、世の中のバランスは成り立ってるんだよ」

「何でそんな話を私に……？」

佐倉の言葉に、目を細めながらさやかが問いただす。

「アタタも開き直って好き勝手にやればいい。自業自得の人生をさ」
「それって変じゃない？あんたは自分のことだけ考えて生きてるはずなのに、私の心配なんかしてくれるわけ？」

佐倉の答えに、さやかは視線を外して問いただす。

「アンタもアタシと同じ間違いから始まった。これ以上後悔するよ
うな生き方を続けるべきじゃない。アンタはもう対価としては高過
ぎるもんを支払っちまってるんだ。だからさ、これからは釣り銭を
取り戻すことを考えなよ」

「あんたみたいに？」

「そうさ。アタシはそれを弁えてるが、アンタは今も間違い続け
る。見てられないんだよ、そいつが」

佐倉の言葉に、さやかの表情からは感情が読み取れなかった。

「あんたの事、色々と誤解してた。その事はごめん。謝るよ。でも
ね、私は人の為に祈った事を後悔してない。そのキモチを嘘にしな
い為に、後悔だけはしないって決めたの。これからも」

だが、ふと顔を上げるとその眼には何かしらの決意が読み取れた。

「何であんた……」

「私はね、高すぎるものを支払ったなんて思っただけ。この力は、
使い方次第でいくらでもすばらしいモノに出来るはずだから。それ
からさ、あんた。そのリンゴはどうやって手に入れたの？お店で払
ったお金はどうしたの？」

「……………」

さやかの言葉に、佐倉は何も言えなかった。
それはすなわち肯定だ。

(あのリンゴ、袋付だけどうやって持ってきたんだ?)

関係ないところで、微妙に恐ろしく思っていた。

「言えないんだね。なら私、そのリンゴは食べられない。貰っても嬉しくない」

「バカ野郎！あたしたちは魔法少女なんだぞ？他に同類なんていないだぞ！？」

佐倉に背を向けて教会を去ろうとするさやかに、佐倉が大きな声で叫んだ。

「私は私のやり方で戦い続けるよ。それがあなたの邪魔になるなら、前みたいに殺しに来ればいい。私は負けないし、もう、恨んだりもしないよ」

さやかはそう言うと、教会から去って行った。

それを見ながら佐倉はリンゴをやけ食いするように、がむしゃらに噛みついていった。

俺はそれを見ながら不可視の術を解除すると、声をかけることにした。

「人の心を変えるっていうのは、かなり骨が折れる物だ」

「ツ！？あんたいつからそこにいた！！」

背後にいた俺に、驚くように問いただしてきた。

「最初っからだ。気配を消す術をかけていたんだ」

「何なんだよ一体。あいつと言いあんたと言い」

佐倉の言うあいつは曉美さんだということは何となくが分かった。

「それで、何の様だよ」

「……お前の父親が信仰した神の特徴とか役割は分かるか？たとえば、人々の恋を成就させるとかそんな奴だ」

「確か……世界を創ったとか言ってた記憶が」

俺は佐倉の答えを聞いて額に手を当てた。

「それがどうかしたのか？」

「おそらく、ぱったりと人が来なくなっただのは、その神を信仰したからだな」

「どういうことだ？」

「第一種接触・召喚禁止部族と言う単語を知っているか？」

俺の問いかけに、佐倉は首を横に振った。

「どうやら知らないようだ。」

「簡単に言えば、会ったり召喚をしたりすると、世界規模で不安定になるような部族の事だ」

「それと、来なくなっただのにどういう関係が？」

「信仰する神と言うのは人を選ぶんだ。神社とかも、どういった願い事が成就するのかによって変えたりするだろ？それと同じ」

恋愛成就ならば、そういった部類の神様を奉っている神社に行ったりする。

それは人が自然にやっているように見えるが、無意識のうちに神によって来る人を選んでいるのだ。

もちろん、この理論が間違いだと言う事もあるが。

「それで、第一種接触・召喚禁止部族と言うのは、信仰されてはい

けないんだ。当然だよ。何せ信仰されればされるだけ歪が出るんだ。人の思念の強さによってね」

「……つまり、あたしの親父は信仰してはいけない神を信仰したからこうなったと？」

佐倉の言葉に、俺は無言で頷いた。

「これに含まれる神は、世界を創造する神とされる”創造の神”、世界に影響を与える者がいないかを監視し、いる場合は直接対処に向かう”裁きの神”、そして人々の運命、世界の状態を制御する”世界の意志”の三神だ」

「なんでそんなに詳しいんだ？」

佐倉が目を細めて問いかけてきた。

「……ちょっと話すぎたか。」

「俺の祖父が神社の神主でな。俺もそう言うのに興味があったから歴史書を読み解くうちにね」

俺はそう答えることにした。

「それと気を付けることだ。あまり強い力を使っていると、世界から排除されるから」

「それってどういう」

俺は佐倉の問いかけに、答えずに教会を後にした。

今問題なのは、さやかだ。

(まあ、なんとかなるか)

だが、俺はこの時この後に訪れるさらなる悲劇を知る由もなかった。

第14話 真実（後書き）

なんだかどんどんと渉が人間失格になってきているような気が……。

感想やアドバイスをお待ちしております。

第15話 壊れゆく心(前書き)

ここから鬱展開です。

第15話 壊れゆく心

翌日、いつもの通りを歩いていると、前方にさやかの姿があった。

「あ、さやかちゃんだ」

「あら、本当ですわ」

さやかの姿に気付いたまどかと仁美がそう言つと、さやかの元に駆けよつて行つた。

俺も、彼女たちの後をついて行く。

「さやかちゃん、おはよう」

「おはようございます、さやかさん」

「おはよう。さやか」

俺達はさやかに挨拶する。

「あ、ああ。おはよう」

そんな俺達にさやかはぎこちなく挨拶を返す。

「昨日はどうかしたんですの？」

「ああ、ちょっとばかり風邪っぽくてね」

心配そうに昨日休んだ理由を聞く仁美に、さやかはそう答えた。

「さやかちゃん……」

【大丈夫だよ。もう平気。心配いらないから】

まどかの心配そうな言葉に、さやかはテレパシーでまどかに言った。

(立ち直ったみたいだな)

さやかの様子に、俺はほっと一安心した。

「さーて、今日も張り切って」

さやかはそう言いかけると前方を見た瞬間、表情が曇った。そこには、杖のような物を手に歩いている上条の姿だった。

「あら……上条君、退院なさったんですの？」

仁美は、上条の姿を見つけると、驚いた風に言った。

その後、さやかの表情はずっと曇りっぱなしだった。

「よかったね。上条君」

「うん」

教室でも、さやかの表情は曇っていてまどかの言葉に暗い感じで答えた。

俺達の視線の先には、クラスメイトと楽しげに話している上条の姿があった。

「さやかちゃんも行ってきなよ。まだ声かけてないんでしょ？」

「私は……いいよ」

まどかの言葉に、さやかはそう答えた。

その時、俺は仁美がさやかの事を真剣なまなざしで見ているのに気付いた。

3人称 Side

放課後、ファミレスでさやかと仁美は向かい合って座っていた。

「それで……話って何？」

「恋の相談ですわ。私ね、前からさやかさんや渉さん、まどかさんに秘密にしてきたことがあるんです」

「え？あ、うん」

さやかの言葉を聞いて仁美は、言葉を続けた。

「ずっと前から、私……上条恭介君のこと、お慕いしてましたの」

「そ、そうなんだ。あはは、まさか仁美がねえ……あ、なーんだ、恭介の奴、隅に置けないなあ」

さやかは仁美の突然の言葉に、動揺を隠せない様子だった。

「さやかさんは、上条君とは幼馴染でしたわね」

「あーまあ、その。腐れ縁って言うか何て言うか」

仁美の言葉に、さやかは視線をそらす。

「本当にそれだけ？私、決めたんですよ。もう自分に嘘はつかないつて。あなたはどうですか？さやかさん。あなた自身の本当の気持ちと向き合えますか？」

「な、何の話をしてるのさ」

仁美の言葉に、さやかはそれしか答えることが出来なかった。

「あなたは私の大切なお友達ですわ。だから、抜け駆けも横取りするようないこともしたくないんですの。上条君のことを見つめていた時間は、私よりさやかさんの方が上ですわ。だから、あなたには私の先を越す権利があるべきです」

「仁美……」

「私、明日の放課後に上条君に告白します。丸一日だけお待ちしますわ。さやかさんは後悔なさらないよう決めてください。上条君に気持ちを伝えるべきかどうか」

「あ、あたしは」

さやかの答えを聞かず、仁美は一礼すると、さやかの前から去って行った。

それは、言うなれば、さやかの心の崩壊を始めさせるきっかけであった。

Side out

夜、俺とまどかはさやかのマンションの出入り口の前にいた。

「まどか、渉……」

すると、キュウベえを引き連れて出てきたさやかが僕たちの姿を見

つけた。

その表情は、とても暗かった。

「付いてっついていいかな？さやかちゃんに一人ぼっちになってほしくないの。だから」

「あんだ、何で？何でそんなに優しいかな？あたしにはそんな価値なんてないのに」

まどかの言葉に、さやかは俯いて肩を震わせながら呟いた。

「そんな」

「あたしね、今日後悔しそうになっちゃった。あの時、仁美を助けなければって。ほんの一瞬だけ思っちゃった。正義の味方失格だよ…。マミさんに顔向け出来ない。仁美に恭介を取られちゃうよ…。でも私、何も出来ない。だって私、もう死んでるもん。ゾンビだもん。こんな身体で抱き締めてなんて言えない。キスしてなんて言えないよ」

涙を流しながら悲痛に叫ぶさやかを、まどかは優しく抱きしめた。

（人間か人間じゃないかは自分で決める物だろ）

俺はそう言おうとしたが、それを口に出すことはできなかった。

それを言う権利は、俺にはなかったからだ。

「俺って、最低だ」

俺のつぶやきが、むなしく感じた。

しばらくたつと、落ち着いたのかさやかは泣きやんでいた。

「ありがとう。ごめんね」

「さやかちゃん……」

「もう大丈夫。スッキリしたから。さあ、行こう。今夜も魔女をやっつけないよ」

「うん」

さよかの言葉に、まどかは頷いた。

「俺も、微力ながらまどかの守護に徹する」

この時、俺はまだ気づけなかった。

さよかの心が少しずつ、壊れかけているということに。

いつものように結界に入った俺達が見たのは、一面が白くて何かの模様があるところで一番奥の方に赤い何かが立っているものだった。俺達は、なぜか真っ黒になっていた。

しかし、問題は……

「はあ……はあ」

苦しげに息を切らしているさやかだ。

「ふん！！」

俺も助けに行きたいところだが、こっちにくる黒い何かを切つてまどかの方に来ないようにするので精一杯だ。

さやかの方に迫ってきた黒い何かを切ると、さやかは一気に駆け出す。

そしてさやかの周りを取り囲むように現れた黒い何かを、さやかは上空に飛んで回避し、空中で一回転すると一気に魔女へと迫る。

「はああ！！！！」

思いつきり切りつけようとしたさやかだが、それは、魔女から出てきた黒い何かによって遮られると、一気にその黒いものに飲み込まれた。

「さやかちゃんっ」

その光景に、まどかが思わずさやかの名前を呼んで、黒い物体に近づこうとした時だった。

何かによって、黒い物体が切り飛ばされた。

「まったく。見てらんねえつつうの。いいからもつすっこんでなよ。手本を見せてやるからさ」

それは、佐倉 杏子の物だった。

佐倉杏子はさやかを地面に降ろすと、武器である槍を魔女に向ける。だが、ふわりとさやかが立ち上がると地面に剣を置いた。

「おいッ」

「邪魔しないで。一人でやれるわ」

さやかは冷たい声でそう言うと、一気に魔女へと迫る。

そして思いつき魔女を切りつけると、黒いひものようなものによってさやかが地面に叩き付けられた。

「さやかちゃん!？」

「ふふ……ふふふふ」

だが、さやかの口から出てきたのは、不気味でぞっとするような笑い声だった。

「アンタ、まさか……」

佐倉杏子の声を遮るように、一気に黒いひも状のものが吐き出され、それはさやかの体をとらえて持ち上げる。

だが、さやかはそれを剣で乱暴に切り払っていくと魔女の上に馬乗りになる。

「あははは、ホントだ。その気になれば痛みなんて……あはは。完全に消しちやえるんだ」

気が狂ったかのように笑いながら、魔女を何度も何度も剣で殴りつける。

「やめて……もう、やめて」

まどかの声が、とても悲しげに感じられた。

第16話 絶縁と真の敵(前) (前書き)

一部ファンから怒られそうな内容です。
本当にすみません。

ここからじわじわと物語は佳境に入ります。

第16話 絶縁と真の敵(前)

さやかが乱暴に魔女を剣で殴り続けていた。

すると突然結界内の周りにひびが入りガラスのように砕け散って行く。

どうやら魔女を倒したようだ。

結界が壊れゆく中、さやかがふらりと立ち上がる。

「やり方さえ分かっちゃえば簡単なもんだね。これなら負ける気がしないよ」

そう呟くさやかに、俺は背筋を凍らせた。

さやかの体中に傷があるが、魔法陣のようなものが浮かび上がると、傷が治って行く。

周りの景色がぐにやりと揺れながら、元の風景に戻って行った。

そしておもむろにかがみこんでグリーンフシードを手にすると、振り向きながらさやかは佐倉杏子にグリーンフシードを投げ渡した。

「あげるよ。そいつが目当てなんでしょ？」

「オイ……」

「あなたに借りは作らないから。これでチャラ。いいわね」

さやかはこっちに歩いてきながら、佐倉杏子に言い切った。

「さ、帰ろう。まどか」

「さやかちゃん……」

さやかは変身を解くと、よろめいて、倒れそうになる。

「あ、ゴメン。ちょっと疲れちゃった」
「無理しないで。つかまって」

ふらついているさやかを支えながら、まどか達は去って行った。その後が続いて俺もそこを後にした。

「あのバカ」

後ろの方から、そんな佐倉杏子の言葉が聞こえてきたような気がした。

帰る途中で、雨が振り出し俺達は近くの待合室のような場所で雨宿りをすることにしたのだが……。

「……………」
「……………」

さやかとまどかはベンチに座ったつきり何も喋らない。

そのため待合室に、いやな沈黙が漂っていた。

ちなみに俺の右側にまどか、その隣にさやかと言う順だ。

(こづついの苦手なんだよな)

どうも、静かだと落ち着きがなくなる。

しかも聞こえるのが雨の音だけと言うのも、微妙に気分が沈んでいく。

「雨、止まないな」

「……………」

「……………」

俺の言葉に、二人は答えない。

（はあ〜）

俺は内心でため息をついた。

「さやかちゃん……………あんな戦い方、ないよ」

突然まどかが話し始めた。

その声には悲しみが混じっていた。

そんなまどかの言葉にさやかは何も答ええない。

「痛くないなんて嘘だよ。見るだけで痛かったもん。感じないから傷ついてもいいなんて、そんなのダメだよ」

「……………ああでもしなきゃ勝てないんだよ。あたし才能ないからさ」

しばらくしてさやかが口を開いた。

「あんなやり方で戦ってたら、勝てたとしても、さやかちゃんのためにならないよ」

「あたしの為にとって何よ」

まどかの言葉に、さやかの声色がさらに冷たく、冷酷なものに変わる。

「えっ？」

突然立ち上がったさやかは、俺達にソウルジエムを突き付けてくる。

「こんな姿にされた後で、何が私の為になるって言うの？」

「さやかちゃん……」

さやかはソウルジエムをもとに戻すと、俺達に背を向けてさらに話を続けた。

「今の私はね、魔女を殺す、ただそれだけしか意味がない石ころなのよ。死んだ身体を動かして生きてるフリをしてるだけ。そんな私の為に、誰が何をしてくれるって言うの？考えるだけ無意味じゃん」

(……………)

さよかの言葉は、昔の俺の姿を思い出させた。

『俺は悪を殺していく、それだけしか意味のない人形……いや機械だ。そんな俺にためえの幼稚な妄想や理想を押し付けんじゃねえよ』
『お、おい！！待てよ　　！！』

あのころの俺は、まさしく生きる価値のない愚か者だった。

あれから数日後、俺は取り返しのつかない過ちを犯した。

そして今、さやかは俺と同じ過ちを犯そうとしている。

それだけは防がなければならぬ。

”友人”として、絶対に！

「でも私は……どうすればさやかちゃんが幸せになれるかって」

「だったらあんたが戦ってよ」

冷たい言葉と眼差しがまどかに向けられる

「え……」

「キウウベえから聞いたわよ。あんた誰よりも才能あるんでしょ？ 私みたいな苦勞をしなくても簡単に魔女をやっつけられるんでしょ？」

「私は……そんな……」

さやかという言葉に、まどかはしどろもどろで答えられない。

「私の為に何かしようって言うんなら、まず私と同じ立場になってみなさいよ。無理でしょ。当然だよな。ただの同情で人間やめらるわけないもんね」

「同情なんて……そんな……」

さやかの言葉にまどかが反論する。

「何でも出来るくせに何もしないあんたの代わりに、あたしがこんな目に遭ってるの。それを棚に上げて、知ったような事言わないで」

「さやかちゃん……」

今までにない、恐ろしい形相で睨んでそう言つとさやかは外に出た。それをまどかも追う様に立ち上がる。

(何を冷静に解説してんだ？俺は)

本当はこんなに冷静ではないのに。

「ちょっと待って、さやか」

「…何よ？わた」

俺の呼びかけに渋々と言った感じで振り返るさやか。
なぜか俺の顔を見て固まっていた。

今、俺は最高の笑顔だろう。

そして一つだけ釈明をさせてもらいたい。

俺は元々冷静だが、許せないことをしているのを見ると、自分をコントロールできなくなるのだ。

だから、だからなのかもしれない。

ドス…！

「ッ…！」

気づいた時には、俺はさやかの事を殴り飛ばしていた。

「さつきから黙って聞いていれば何だ。お前？」

自然に俺の口から言葉が出てくる。

「あんたが死んでいる死んでないはともかくとして、それはてめえ自身の気の持ちようだ。それを自分で決めつけて勝手に悲劇のヒロインを演じてんじゃねえよ…！」

「あたしは、悲劇のヒロインなんて演じて」

さやかが立ち上がって俺に反論する。

「してないと言いきれる？ならそれでいいさ。だが、てめえは何様のつもりだ。お前に何の権利があって、まどかに魔法少女になれと

「言える？」

「それ……は」

俺の言葉に、さやかが視線をそらして言いよどむ。
だが、俺はもう止まらない。

「言い方を変えてやろう。お前のやろうとしていたことは、殺人……人殺しだ」
「ッ！……!?」

俺の一言にさやかが息をのむ。

「お前は無名の偉人と同じように友を殺そうとした」

もし、さやかの言う魔法少女になる＝死の定義が成り立つのであれば、俺の言っていることはあながち間違いでもない。

「……わかった。もうお前とは絶交だ。どこへでも好きにいけ。二度と俺達の前に姿を現すな」

とうとう、言ってしまった。

「ッ……！」

「さやかちゃん……！」

俺の言葉に、さやかは走って行った。

「渉君。何もあそこまで」

「……優しいんだな。まどかは」

「え？」

俺はまどかにそう言つと、雨の中待合室を出た。

(俺って何をやってんだろ?)

願わくば、この雨が俺の胸の中のもやもやを取ってくれることを願うだけだ。

そして、俺は自宅へと戻るのであった。

「そう……そんなことが」

「ああ」

自宅に戻って、雨にぐっしよりと濡れていたことを咎められた後、今日起こったことをマミさんには成した。

「それで、いつまで落ち込んでいるのかしら？」

「なに？」

マミさんは、あなたらしくもないと言いたげな表情で問いかけてきた。

「あなたなら、この後どうするべきかくらいわかっているはずでしょ」

「よ」

「……………」

「明日でもいいから、美樹さんに謝ってきなさい」

「一言は許さないとばかりに告げられた言葉に、俺は驚きながらも」

たえた。

「謝りはしないが。一応話し合ってくる。俺達の仲間にならないかと」

「ふふ。あなたらしいわね。それ」

俺の宣言に、ママさんは吹き出しながら呟いた。

第16話 絶縁と真の敵(前) (後書き)

長かったので、分割しました。

第16話 絶縁と真の敵(後) (前書き)

後篇です。

第16話 絶縁と真の敵（後）

それから数日間、俺はさやかを見つけることが出来ずにいた。

だが、ある日の夜ようやく塔の様な建物の中に、さやかの気配を感じることに成功したため俺はその建物の中に入った。

そしてようやく見つけた。

さやかは疲労しているのか、フラフラと歩いていた。

「よ、久しぶりだな」

「……何よ」

俺の言葉に帰ってきたのは、冷たい声だった。

「いや、この間は殴り飛ばして悪かったな」と思ってな。それに対してのお詫びをしに来たんだよ」

「……いらないわよ。そんなもの」

俺の明るい声に、さやかは暗い声色で答える。

「まあまあ、聞くだけ聞いてっつて。早速だが、俺と手を組まないか？」

そして俺はさやかに切り出した。

「……どういう意味よ？」

「いやなに、俺もある目的があつてここに来たんだ。その目的の情報を探しをしているのだがあいにくと難航している状態だな。そこでさやかにも探すのを手伝って貰いたい。本来であれば、お前のような馬鹿者にはこのような提案はしないのだが、この前の一件のお

詫びをかねて誘っているんだ」

俺はどのような目的かをぼかして、さやかに話した。

「もし、俺と手を組むのであればさやか自身の問題を解決してあげよう。どうだ？悪い話ではないはずだ。さあ、俺の手を取るがいい。そうすれば新しい明日が始まる！！」

俺はそう言ってさやかの前に片手を差し出した。

そして、さやかは手を上げると

パチン！

俺の手を払った。

「いらないよ、そんなもの。あんたの力なんていらない」

「……まだわからないのか？お前には死相が見えるんだ！死相は死神を呼ぶ餌だ。このままだとあんた、死神に取りつかれて死ぬぞ！」

「あたしが死ぬときは魔女を倒せなくなったとき……それって用済みってことだよ」

俺の叫びにも、さやかはそう切り捨てると俺の横を通り過ぎる。

「そうか。そうかよ……お前は今後愚か者と呼ぶ！！もしお前が死んだとき、てめえの亡骸の前で大笑いしてやる！！！」

俺はそう叫んで、その場を後にした。

俺には、見えていた。

黒い鎌を持ってさやかの後を付ける者の姿を。

今俺は塔の建物の屋上にいた。

手には愛用しているスナイパーライフル（バレットM82A1）を構えている。

そして俺はスコープで遠く離れた噴水のある場所を見ていた。そこにいたのは、まどかとキュウベえだ。

「私は……自分なんて何の取り柄もない人間だと思ってた。ずっとこのまま、誰のためになることも、何の役に立つこともできずに、最後までただ何となく生きていくだけなのかなって。それは悔しいし、寂しいことだけど、でも仕方ないよねって、思ってたの」

まどかの声が聞こえてくる。

これも俺の力の一つだ。

どんなに遠くにいても、対象者の声を常に聴くことができる。

「現実はず分と違ったね、まどか。君は、望むなら、万能の神にだってなれるかもしれないよ」

「私なら……。キュウベえにできないことでも、私ならできるのかな？」

まどかはキュウベえに静かに問いかけた。

「というけど？」

「私があなたと契約したら、さやかちゃんの体を元に戻せる？」

俺は、いつでも撃てるように照準を合わせる。

俺の敵、キュウベえに。

「その程度、きっと造作もないだろうね。その願いは君にとって、魂を差し出すに足る物かい？」

「さやかちゃんのためなら……いいよ。私、魔法少女に……」

その言葉を聞いて、俺は慌てて引き金を引こうとした時だった。

(ッ 時間が!!)

突然時間が止まったかと思うと、キュウベえの体が撃ちぬかれた。突如現れた、暁美ほむらによって。やがて、時間が動き出した。

「わっ!？」

見事に撃ちぬかれたキュウベえの亡骸を見て驚くまどかだが、その後ろにいる暁美さんはM92Fを地面に落とした。

「ひっ」

銃の落ちた音にまどかは慌てて後ろに振り向く。

「ひ……ひどいよ、何も殺さなくても」

「貴女は、なんで貴女は、いつだって、そうやって自分を犠牲にして」

暁美さんはまどかの方に迫りながらまどかに向かってまくし立てた。だが暁美さんの声はいつもの冷たいものではなく、悲しみが伺えた。

「え？」

「役に立たないとか、意味がないとか、勝手に自分を祖末にしないで！貴女を大切に思う人のことも考えて！いい加減にしてよ！貴女を失えば、それを悲しむ人がいるって、どうしてそれに気づかないの！貴女を守るうとしてた人はどうなるの！」

暁美さんは一気に叫ぶと地面に膝をついた。

(……………まさか)

この時、俺は直感で今回の事の真実が見えたような気がしたが、まだ確証がない。

「ほむらちゃん」

暁美さんに駆け寄り寄ろうとしたまどかは、混乱したような表情をした。

「私たちはどこかで……………どこかで会ったことあるの？私と」

「そ、それは……………」

まどかの言葉……………何より暁美さんの答えで確証が得た。

どうやら俺の仮定は、正しいようだった。

「ごめん。私、さやかちゃんを探さないと」

「待って、美樹さやかは、もう」

カバンを手にしてその場を去ろうとするまどかを引き留めようとする暁美さんだが、まどかは後ずさって行く。

「ごめんね」

そしてまどかは走って去って行った。

「待つて！まどか！！」

その後ろ姿を見て暁美さんは嗚咽を上げた。

「無駄な事だつて知ってるくせに。懲りないんだなあ、君も。代わりはいくらでもあるけど、無意味に潰されるのは困るんだよね。勿体ないじゃないか」

突然聞こえたのは撃ちぬかれたはずのキュウベえの物だった。

そしてキュウベえが現れると、ベンチの上にある亡骸の元に向かった。

そして亡骸を食べていた。

食べ終わる頃には暁美さんは、いつもの様子で立ち上がっていた。

「君に殺されたのは、これで二度目だけれど、おかげで攻撃の特性も見えてきた。時間操作の魔術だろう？ さっきのは」

キュウベえの指摘に暁美さんの表情が陰しくなる。

「やっぱりね。何となく察しはついてたけれど、君はこの時間軸の人間じゃないね」

「お前の正体も企みも、私は全て知ってるわ」

「なるほどね。だからこんなにしつこく僕の邪魔をするわけだ。そうまでして、鹿目まどかの運命を変えたいのかい？」

暁美さんの言葉に、キュウベえは何を考えているかが分からないような表情をして、答えた。

「ええ、絶対にお前の思い通りにはさせない。キュウベえ……いいえ、インキュベーター」

インキュベーター……孵卵器の事か。
確かにぴったりだ。

(さて、両名から話を聞き出しますか)

俺はそう考えると、すぐに決行した。

このバレットM82A1は射程距離が2キロだ。

それを俺の能力で強化し、十倍の距離まで伸ばしたのだ。

距離はパツと見た感じ、約十数キロ。

完全に射程範囲内だ。

まずはキュウベえの真横に照準を合わせて引き金を引いた。

パァン!!

ものすごい音と共に反動が来るが、まったくもって問題ない。

すぐに照準を横にずらして暁美さんの足元(とはいっても数メートルは離してある)に合わせるともう一発撃ち込んだ。

その後、銃をしまつと、屋上から飛び上がり彼女達のいる場所に着地した。

「なっ!?!」

「君か、小野渉」

俺の登場に驚きの声を上げる暁美さん。

「いいことを聞かせてもらったぜ」

「あなた、一体どこから」

彼女の”どこから”は狙っていた場所の事だと言っているのはすぐに分かった。

「ここから数十キロ先の屋上からな。まあ、射撃に関しては自信があるのではな」

昔射撃をしていたことが、ここで役に立つとは思わなかった。

「なるほど……お前、時間操作の魔法を使うのか。だとすればこの世界が不自然に数回に渡り繰り返している現象を引き起こしたのは、あんたと言っ事か？」

「……………」

俺の問いかけに、暁美さんは何も答えない。

「だんまりか」

俺は暁美さんから視線を外す。

「小野涉。君はただの人じゃないね。一体何者なんだい？君は」

「何者って、小野涉……運命を占う、占い師さ。占い師とは言うても占うのは”世界”の運命だが」

俺は遠からずも間違いではないようにぼかして答えた。

「君には感謝しなければいけない。」

「何を言って

」

俺の言葉に、曉美さんが叫んでくるが、それを遮って俺は話を続けた。

「お前のおかげで俺が打たねばならぬ敵が誰なのかをはっきりさせることが出来た。感謝する」

「……………」

相変わらずキュウベエの表情からは、何を思っているのかが伺えない。

「お前と僕は同じ存在だな」

「君もインキュベータなのかい？」

キュウベエの問いかけに、俺は首を横に振った。

「お前のように人の感情をすべて斬り捨てて、人間を数として見る所とか、自分の感情がないこととかな。まあ、俺の場合は捨てたわけだが」

それこそ、キュウベエが俺から生まれたのではないかと思うほどに。

「だからこそな」

俺は右手に銃を展開する。

「これ、本当はこんな風に人に向けたりしちゃダメなんだよね。ま、いつか」

そして銃口をキュウベエの頭に突き付ける。

「とつととくたばれ！この屑野郎！！！！」

パァン！パァン！パァン！

俺は怒りの赴くままにキュウベエの頭に向けて、三発も連射した。気づけば、キュウベエの残骸はおろかベンチに穴が開いていた。

(やりすぎたか)

「全く二人揃って無駄な事をするね」

後ろからキュウベエの声があったので慌てて振り返ると、そこにはいつもの姿であるキュウベエの姿があった。

「っち！化け物め」

キュウベエは逃げるように去って行った。

「ところだ」

「ッ！！」

俺は右手にある銃を今度は暁美さんの頭に突き付ける。

「もう一度聞く。世界を巻き戻したのは、お前か？もしくはお前の知っているものの仕業か？」

「そ、それは……」

俺の問いかけになかなか答えない暁美さんに、俺は一言言うことにした。

「だんまりだったら……この続きは言わなくても分かるよな？」
「……………」

暁美さんは俺の問いかけに無言を貫いた。

「そうか。そんなに死にたいか。なら……………」

俺は引き金に指を掛ける。

「死ね！！！」

「ッ！！！！！」

そして引き金を引いた。

カチン

「へ！？」

「あはははは！！！！残念でした。キュウベえに撃つたので最後だったんだよ」

俺の言葉に、暁美さんはへろへろと力を失ったように地面に座り込んだ。

「あ〜ごめんな。ちょっと演技が過ぎたようだ」

俺は一応謝っておいた。

「まじめな話、本当に言う気はないのか？」
「……………」

暁美さんは何も答えない。

「まあいい。お前の目的ぐらい見当はついているしな。そっちが終わってからお前の処置については考えよう」

俺はため息をつきながらそう告げた。

ドクン!!

そんな時、体中に鳥肌が立つほどの変化を感じた。

「これって、まさか……」

「魔法の……誕生」

見れば、少し離れた場所から膨大なエネルギーが発せられていた。

「まさか……!!」

暁美さんのつぶやきが聞こえたと思った瞬間には、彼女の姿はなかった。

「……調べてみるか。まどかの運命を」

そんな中、俺は彼女の因果を調べることにしたのであった。

第16話 絶縁と真の敵（後）（後書き）

ということで、次回は第2の悲劇ということになります。

その時渉はどうするのか!?

楽しみにして頂ければ幸いです。

第17話 第2の悲劇／葛藤（前書き）

今回も涉の非人道的な言動があります。

そして、少しずつですが涉の正体が明らかになっていきます。

第17話 第2の悲劇／葛藤

三人称Side

とある駅のホーム。

その椅子に座っているさやかの姿があった。

不気味なほどの静けさに包まれた駅のホーム内に、突然足音が響き渡った。

それは杏子の物だった。

「やっと見つけた……」

杏子はそう呟くと、さやかの横に座り、どこから取り出したお菓子を食べ始めた。

「あんたさ、いつまで強情張ってるわけ？」

「悪いね、手間かけさせちゃって」

杏子の言葉に帰ってきたのは、いつにもなく弱々しい声だった。

「何だよ、らしくないじゃんかよ」

「うん。別にもう、どうでも良くなっちゃったからね。結局私は、一体何が大切で何を守るうとしてたのか、もう何もかも、わけ分かんなくなっちゃった」

「おい」

杏子の言葉をしり目に、さやかは自らのソウルジェムを取り出した。

「あっ!?!?」

さやか of ソウルジェムを見た瞬間、杏子の表情は驚きで染まった。さやか of ソウルジェムは、にこり始めていたのだ。

「希望と絶望のバランスは差し引きゼロだって、いつだったかあんな言っただよね。今ならそれ、よく分かるよ。確かに私は何人が救いもしたけどさ、だけどその分、心には恨みや妬みが溜まって。一番大切な友達さえ傷付けて……」

「さやか、あんたまさか!？」

さやかの言葉に、杏子の中で嫌な予感が満ちて行った。

それはまるで、もう二度と取り返しがつかない事態になるのではないかと云うものであった。

「誰かの幸せを祈った分、他の誰かを呪わずにはいられない。私達魔法少女って、そう言う仕組みだったんだね」

さやかの目からは涙が流れていた。

「あたしって、ほんとバカ」

そしてさやかの涙がソウルジェムに当たった瞬間、突風が吹き荒れた。

さやかのソウルジェムは砕け散り、それは魔女の卵でもある”グリフシード”へと姿を変えた。

それと同時にさやかの体は人形のように崩れ落ちると、突風に吹き飛ばされた。

姿を変えたグリフシードは、一気に孵化した。

「さやかあつー!」

杏子の悲痛な叫び声が、突風の中で響き渡っていた。

Side out

午前2時。

俺はまどかと共に、線路を歩いていった。

「まどか、さすがに線路は危ないと思うぞ」

「……………」

さやかを探しているのだが、さすがに線路は危険だ。

しかし、先ほどから俺の言葉に反応を示さない。

そんな時、前方から誰かの歩く足音が聞こえた。

顔を上げると、そこには……

「あっ」

暗い顔をした佐倉杏子と、暁美さんそして、佐倉杏子に抱きかかえられているさやかの姿があった。

「さやかちゃん！？ さやかちゃん、どうしたの？」

まどかがさやかの元に駆けよる。

さやかの体は、まるで死人のようになぐったりとしていた。

「ね、ソウルジェムは？ さやかちゃんはどうしたの！？」

「彼女のソウルジェムは、グリーンシードに変化した後、魔女を生んで消滅したわ」

「え……」

暁美さんの衝撃的な言葉に、まどかが地面に力なく座った。

「嘘……だよな？」

「事実よ。それがソウルジェムの、最後の秘密。この宝石が濁りきって黒く染まる時、私達はグリーンシードになり、魔女として生まれ変わる。それが、魔法少女になった者の、逃れられない運命」

今起きている状況を信じたくないまどかに暁美さんの冷たい言葉が降り注ぐ。

「嘘よ……嘘よね？ねえ」

まどかは信じて飲み込めずに立ち上がり、佐倉の杏子の前まで歩いていく。

その時、ちょうど電車が通過して行った。

それがまた、空しさを醸しだてていた。

「そんな……どうして……？さやかちゃん、魔女から人を守りたいって、正義の味方になりたいって、そう思って魔法少女になったんだよ？なのに……」

まどかは地面に膝をついて俯いた。

「その祈りに見合うだけの呪いを、背負い込んだまでのこと。あの子は誰かを救った分だけ、これからは誰かを祟りながら生きていく」

暁美さんは冷たくそう答えた。
そして俺は……。

「ふんっ。正義の味方が聞いて呆れる！」

さやかは亡骸を冷たい目で睨みつけてそう言い放つだけだ。
すると、唐突に佐倉杏子がさやかの亡骸をまどかの前に横たえたと、
暁美さんの胸ぐらをつかんだ。

「てめえは……何様のつもりだ。事情通ですって自慢したいのか？
何でそう得意げに喋ってられるんだ。こいつはさやかの……さや
かの親友なんだぞ……！」

佐倉杏子は一瞬まどかに泣きつかれているさやかを見て、暁美さん
を睨みつけると俺の方を睨みつけてきた。

「てめえもなんで、そんなことが言えるんだ。お前もさやかの親友
なんだから……！」

「生憎と俺は屑のために泣く涙や優しさなど、微塵も持ち合わせて
などいない……まあ、そんな高等な物が俺にあればの話だがな」

俺は佐倉杏子にそう言い放った。

その瞬間、彼女から殺気が飛んできた。

「だったら聞くが、俺はちゃんとあいつに救いの手を差し伸べたり、
数度に渡って忠告もしたりもした。それを無下にしたり聞かなかつ
たのはあいつ自身だ。それでもお前は俺が悪いと言えるか？」

「そ、それは……」

俺の問いかけに、佐倉杏子は答えられなかった。

「今度こそ理解できたわね。貴女が憧れていたものの正体が、どういうものか……わざわざ死体を持って来た以上、扱いには気をつけて。迂闊な場所に置き去りにすると、後々厄介な事になるわよ」

暁美さんは泣いているまどかに冷酷にもそう言い放つ。

「てめえそれでも人間かつ!？」

「もちろん違うわ。貴女もね」

佐倉杏子の言葉に、暁美さんが冷たく言い返すと、そのまま姿を消した。

俺は、暁美さんの後を追った。

「おい、暁美さん」

「……何かしら?あなたに話すことは

「

俺は暁美さんの言葉を遮って話した。

「鹿目まどかは100%魔法少女になる」
「ッ！！！」

俺の宣言に、暁美さんが息をのんだ。

「どんなふうにも計算しても、彼女が魔法少女にならないければ、この世界は破滅する。そこで相談」

俺が協力をお願いしようとした時だった。

パン！！

「ッぐ！！？」

どこから取り出したのか、銃を俺にめがけて撃ってきた。
銃弾は見事に俺の心臓に命中し、俺は衝撃のあまり跳ね飛ばされた。

「勝手な事を言わないで！！絶対にまどかだけは魔法少女にはさせない！！！！！」

いきなり銃を撃ってきたと思ったら、暁美さんはそう叫んで走って行った。

「……やれやれ。いくら俺が人間じゃないからって、痛いものは痛いんだぞ」

俺は文句を言いながら撃たれた部分に手を当てて修復させた。

「……………帰ろう」

俺は帰路に着こうとしていたが、気づいた時にはファミレスにいた。そこは、待ち合わせ場所などで使っていた場所だった。

『いやいやいや!?!あんなの方がよっぽど物騒だよ!?!と云うより真剣!?!?』

適当な席に座っていると、魔女退治の体験ツアーの時の事を思い出す。

あのころは、とても楽しかった。

俺もこれほど捻くれてはいなかった。

『それ以上いちごケーキを食べると体に毒だよ?』

「ッ!?!?!?」

俺は次々と思い出すさやかとのやり取りの記憶を振り払うように、ファミレスを後にした。

その後、俺は日が昇るまで走って走って走り続けた。

それでも、この心の中のもやもや感は消えなかった。

俺とまどかはいつものように通学路でもある川辺を歩いていた。

「まどかさん、渉さん。今朝は顔色が優れませんか。大丈夫ですの？」

「うん……ちょっと寝不足でね」

まどかの表情は暗かった。

「はっ！！もしかしてついに渉さんと一線を！？ いけませんわ

！！ 不純異性交遊ですわよ！！！！」

「ええ！？」

「話が飛び過ぎだ！！！！」

相変わらず大げさに解釈してしまう仁美を何とか落ち着かせた。

「それにしても、今日もさやかさんはお休みかしら？ 後でお見舞

いに行くべきでしょうか……でも私が行っていいのか。今ちょっと、

さやかさんとはお話しづらいんですが」

困ったように仁美は言った。

その原因を知っているだけに、俺は何も言えなかった。

「仁美ちゃん。あのね」

まどかが仁美に何かを話そうとした瞬間、

『昨日の今日で、のんきに学校なんて行ってる場合かよ』

「あっ?!」

突然佐倉杏子のテレパシーが聞こえてきた。

まどかはあたりを見回すと、あるビルの屋上を見た。

「まどかさん？」

まどかの見ている所には、人影があった。

『ちよつと話があるんだ。顔貸してくれる？』

佐倉杏子のテレパシーに、何かを決意した表情を見ると、仁美の方を見た。

「仁美ちゃん、ごめん。今日は私も……学校お休みするね」

「え?! そんな、まどかさん、ちよつと」

まどかは仁美にそう言うのと走って行った。

「だあもう!! まどかが心配だから、俺も欠席する。何か良い言い訳をよろしく!!!!」

俺は無責任な事を仁美に言うと、まどかの後をついて行った。

「え!?! 待つてください!! 涉さん!!」

後ろから聞こえる声を無視して。

第18話 美樹さやか救出作戦（前書き）

アニメでは、9話。

こっちでは倍の18話です。

今回は、少々読みづらい所がありますが、次回への布石ですので、ご了承ください。

第18話 美樹さやか救出作戦

突然走り出したまどかを追いかけた俺は、西洋風の建物が建つ場所に来ていた。

俺達の前に立っていたのは、佐倉杏子だった。

「あの……話って？」

「美樹さやか。助けたいと思わない？」

佐倉杏子の言葉に、まどかの表情が明るくなった。

「あつ……助けられる……の？」

「助けられないとしたら、放つとくか？」

「う……」

杏子の言葉に、まどかの表情が一気に暗くなる。

そんなまどかの様子に佐倉杏子は表情を柔らかくした。

「妙な訊き方しちゃったね。ばかと思うかもしれないけど、あたしはね。本当に助けられないのかどうか、それを確かめるまで、諦めたくない」

佐倉杏子の目には絶対に諦めないと言った意志を感じ取れた。

「あいつは魔女になっちまったけど、友達の声ぐらいは覚えてるかもしれない。呼びかけたら、人間だった頃の記憶を取り戻すかもしれない。それができるとしたら、たぶんあんだだ」

「うまくいくかな？」

佐倉杏子の提案に、まどかが不安げに聞いた。

「わかんねえよそんなの」

佐倉杏子の答えに、まどかの表情が再び曇るが、それを見て彼女は静かに笑った。

「わかんないからやるんだよ。もしかして、あの魔女を真つ二つにしてやったらさ、中からグリーンフィードの代わりに、さやかのリジェムがポロツと落ちてくるとかさ。そういうもんじゃん？最後に愛と勇気が勝つストーリー、ってのは」

彼女の言葉に、俺達は何も答えられない。

もとより、そのような事を考えたこともなかった。

「アタシだって、考えてみたらそういうのに憧れて魔法少女になっただよ。すっかり忘れてたけど、さやかはそれを思い出させてくれた」

横を見れば、まどかの表情は真剣そのものだった。

「付き合いきれねえってんなら、無理強いはいしない。結構、危ない橋を渡るわけだしね。あたしも、絶対何があっても守ってやる、なんて約束はできねえし」

佐倉杏子の忠告にまどかは首を横に振ると、一歩前に出た。

「ううん、手伝う。手伝わせてほしい」

そしてまどかは佐倉杏子に片手を差し出した。

「私、鹿目まどか」

「ったくもう、調子狂うよな、ほんと」

「え？」

まどかの行動に柔らかく微笑む。

「佐倉杏子だ。よろしくね」

そう言ってまどかの手にお菓子『うんまい棒』を渡した

「うん……うん」

それを受け取ったまどかはそれを呆然と見ていた。

「で、あんたは来るのか？」

表情を少しきつくして俺の事を睨みながら聞いてきた。

「当たり前だ。よくよく考えればまだ殴り足りなかったからな。生き返らせて土下座して謝らせたなら、その後はイチゴのケーキを大量に買ってもらうんだ!!」

「……………」

いや、自分でもわかっているからそんな憐れむような目で、俺を見ないでくれ。

「本当調子狂うよな」

そう言つと佐倉杏子はもう一本『うんまい棒』を俺に差し出してき

た。

「食つかい？」

「……………頂きます」

僕はそれを有難くいただくことにした。

……………これ、どうやって食べるんだ？

「それじゃ、行くぞ」

「了解」

「うん！」

そして、俺達は美樹さやかを生き返らせるべく、歩き出すのだった。

あたりがオレンジ色のカーテンに包まれている中、俺達は陸橋の下を歩いていった。

「ほむらちゃんも、手伝ってくれないかな？」

「あいつはそついうタマじゃないよ」

ソウルジェムを片手で持ちながら歩く、佐倉杏子はそつ答えた。

なぜかその手にはお団子があった。
しかも2つも。

「友達じゃないの？」

「違うね。まあ利害の一致っていうか。お互い一人じゃ倒せない奴と戦うためにつるんでるだけさ」

団子を食べながら佐倉杏子は、答えた。

「あと何日かしたら、この街にワルプルギスの夜が来る」

「ワルプルギス？」

彼女の告げた単語に、まどかが聞いた。

「超弩級の大物魔女だ。あたしもあいつも、たぶん一人じゃ倒せない。だから共同戦線っていうか、まあ要するにそういう仲なのさ」

彼女の説明が正しければ、ワルプルギスの夜と言う魔女は、かなりの強敵らしい。

そして魔女は元が魔法少女だった人物だとすれば……

(これは、調べた方がいいな)

俺は再びできた課題に内心でため息をついた。

やがてしばらく歩くと、建築現場にたどり着いた。

「ここだな」

佐倉杏子は建築現場前でつぶやくと、扉を強引に開けて中に入っていく。

「ホントにさやかちゃんかな？他の魔女だったりしないかな？」

「魔力のパターンが昨日と一緒だ。間違いなくあいつだよ」

まどかの不安げな問いかけに、佐倉杏子が答えた。

「今更違う魔女だって言われたら、そっちの方が驚きだよ」

俺は思わずそうツッコんだ。

そして少し進んで、行き止まりの場所で立ち止まると、佐倉杏子は魔法少女に変身した。

それと同時に手に持っていた二本の団子の棒を地面に投げつけた。

よく見れば、そこにはハートマークで『Love me do』と書かれていた。

直訳すれば『私を愛して』だろうか。

確かにさやかの物だ。

「さて、改めて訊くけど、本当に覚悟はいいんだね？」

「何かもう、慣れっこだし。私、いつも後ろから付いてくばっかりで。役に立ったこと一度もないけど。でもお願い、連れて行って」

佐倉杏子の最終通告のようなものに、まどかは自分の事を卑下しながら答えた。

「俺もだ。乗りかかった船、こんなところで引き返す何て男じゃないし」

「ほんと変な奴だな、あんた達」

ふと柔らかく微笑み、彼女は手に持つ槍で空間を一閃した。

そして結界は開かれた。

結界内は、まるでどこかの路地裏の様な煉瓦の壁の通路だった。壁にはチラシが張ってあり、それはまるでコンサートのお知らせのチラシのようなものであった。

「ねえ、杏子ちゃん」

「うん？」

緊張の面持ちで歩いていると、まどかが口を開いた。

「誰かにばっかり戦わせて、自分で何もしない私って、やっぱり、卑怯なのかな」

「まどか……」

まどかの言葉は、おそらくさやかあの一言によるものだろう。彼女に掛ける言葉が思いつかない自分を、俺は呪った。

「何であんたが魔法少女になるわけさ？」

「何でって……」

佐倉杏子に聞き返された言葉に、答えられないまどかに彼女は歩く

のをやめると後ろに振り向いた。

「なめんなよ。この仕事はね、誰にだって務まるもんじゃない」
「でも」

佐倉杏子の言葉にまどかは言い返そうとするが、それを遮って彼女は言葉をつづけた。

「毎日美味いもん食って、幸せ家族に囲まれて、そんな何不自由ない暮らしをしてる奴がさ、ただの気まぐれで魔法少女になるうとするんなら、そんなのあたしが許さない。いの一番組にぶっ潰してやるさ。命を危険に晒すってのはな、そうするしか他に仕方ない奴だけがやることさ。そうじゃない奴が首を突っ込むのはただのお遊びだおふざけだ」

彼女の言葉には、かなりの重みがあった。

「そうなのかな」
「あんただっていつかは、否が応でも命懸けで戦わなきゃならない時が来るかもしれない。その時になって考えればいいんだよ」

まだ納得していないまどかに、佐倉杏子はそう言い聞かせるように言った。

「なあ、まどか。俺はな、強者には守る責務があって、弱者には守られる権利があると思うんだ」
「守られる……権利？」

俺は自分でも信じられないほどやさしい声でまどかに語りかけた。

「強い力を得てしまえば、それは己を命を失う危険な場所へと導くカギとなってしまう。だから死ぬ覚悟を持っていないのであれば、弱者のままでもいい」

「……渉君は、その……」

俺の言葉にまどかは言いすらそうにしていた。

「俺の場合は生まれた時から前者だった。だから、お前が羨ましいぐらいだ」

「渉君……」

そして再び俺達は歩き出した。

目の前には大きな扉。

それを開けた。

すると、くぐもった音楽が聞こえてきた。

「うわぁ……気持ち悪」

地面は赤いカーペット、壁には今までの映像が映し出されていた。さやかが剣を振るい使い魔を倒す場面、俺と佐倉杏子とが退治して戦う場面。

それが異様に俺への不快感を高めていた。

「杏子ちゃんはどうして……あっ」

まどかが佐倉杏子に何かを聞こうとした瞬間、突然扉が閉じられ、周りに映し出されていた映像も消えた。

「気づかれた、来るぞ!」

彼女がそう叫んだ瞬間、俺達はどんどん進んでいきそして光に包まれた。

光の先にはバイオリンの演奏者と、指揮者の姿と、まるでコンサート会場であった。

そして中央には人魚姫を模した魔女がいた。こっちの方を見て左右に振れていた。

「いいな、打ち合わせ通りに」

驚きのあまりに地面に座り込んでいたまどかに声をかけた。

「う……うん」

佐倉杏子の言葉に、まどかは頷くと立ち上がった。

「さやかちゃん。私だよ。まどかだよ。ね、聞こえる？私の声がかかる？」

まどかの言葉に帰ってきたのは魔女が出した、大きな車輪だった。

「怯むな。呼び続ける」

佐倉杏子がまどかの前に出ると、まどかを守るように赤い網状の壁を形成し、槍を手にした。

そして俺も神剣を取り出して構える。

「さやかちゃん。やめて。お願い、思い出して。こんなこと、さやかちゃんだって嫌だったはずだよ。さやかちゃん、正義の味方になるんでしょ？ねえお願い、元のさやかちゃんに戻って！」

車輪が俺達に放たれる。

佐倉杏子は槍を使って跳ね飛ばしたりして、俺は剣を横に一閃して車輪を粉碎する。

しかしそれに、対応できなくなるのも時間の問題だ。力を封じている状態では、今ので精いっぱいだ。

(リミット・ブレイク……………使うか)

俺は頭の中で判断を迷っていた。

あまりこれを使うと、後々面倒なことになるからだ。

「聞き分けがねえにも、程があるぜ、さやか!」

そんな時、佐倉杏子の声が聞こえてきた。

その次の瞬間、大量の車輪が現れ、それが一気に俺達の方に放たれた。

「ッ!!!」

俺は剣を交差させて防御の体勢を取った。

「杏子ちゃん!? 涉君!?!」

「心配、ご無用!?!」

「大丈夫、この程度、屁でもねえ。あんたは呼び続ける、さやかを」

俺と佐倉杏子はそう力強くまどかに言った。

彼女はともかく、俺の方はちよつとやばい。

さっきので片足をやられた。

これで機動力は大幅に下がってしまった。

「やめて！もうやめて！さやかちゃん！私たちに気づいて！」

再び現れた車輪を躲したり切り裂いたりするが、さっきのダメージが尾を引いているため、何回も喰らっている。

そしてさらに機動力が下がりまた攻撃を食らうという悪循環だ。

さっきから聞こえるのは佐倉杏子の苦痛の悲鳴と、まどかの泣き声だけだった。

「ッぐー！！」

そして、とうとう痛みで動けなくなった俺はものすごい速さで放たれた車輪をもろに食らい、どこかの壁に叩きつかれた。意識こそ奪われなくても、体が思うように動かない。

どうやら今ので背骨もやられたらしい。

「さやかちゃん……おねがいだから……」

なんとか歩けるくらいにまではダメージが回復した時、まどかの苦しげな声が聞こえたので、前を見ると魔女の大きな手で握りつぶされようとしているまどかの姿があった。

「さやかっ！！」

すぐに助けに行こうとすると、佐倉杏子が槍を振りかざして腕を切り落としていた。

「あんだ、信じてるって言ってたじゃないか！この力で、人を幸せにできるって」

彼女の大きな声が聞こえた。

その次の瞬間、魔女が手にしていた剣を地面に一閃した。それによって地面が崩れ、俺達は落ちて行つた。

「頼むよ神様、こんな人生だったんだ。せめて一度ぐらい、幸せな夢を見させて」

そんな時、佐倉杏子の声が聞こえた。

地面に降り立つと、気絶しているまどかを抱きかかえている暁美さんの姿があつた。

そんな時、槍が落ちる音が回りに響いた。

「……よう」

「杏子。貴女……」

佐倉杏子の言葉に、暁美さんが弱々しく答えた。

彼女はどうかやら先ほどの攻撃を食らってしまったらしい。

「その子を頼む。アタシのバカに付き合わせちまった」

「あ……」

佐倉杏子の言葉に、暁美さんが立ち上がろうとした瞬間彼女の前に先ほどの壁が現れた。

「足手まといを連れたまま戦わない主義だろ？ いいんだよ、それが正解さ」

佐倉杏子の言葉に、暁美さんの表情が一瞬揺らいだ。

「ただ一つだけ、守りたいものを最後まで守り通せばいい。ハハハ、何だかなあ。あたしだって今までずっとそうしてきたはずだったの

に」

悲しく笑って彼女は髪を結んでいるリボンを解いた。そして出てきた何かをつかむと、それを両手で包み込んだ。

「行きな。こいつはあたしが引き受ける」

そう告げた瞬間、けたたましい魔力が溢れらすのが分かった。そして大きな槍が地面から大量に生えてくる。

それを見た暁美さんはまどかを引き連れてその場を走り去る。

さて、今俺がどこにいるのかをいよう。

佐倉杏子から少し離れた横にいるのだ。

彼女は全く気付いたくない。

だが、今ほど都合なことはない。

そして俺は、宙に浮かぶ槍に乗っている佐倉杏子に話し掛けた。

「さっきの願い事は、本心か？」

「なっ！？あんだ、なんでここに！！」

佐倉杏子は、俺がいることに驚いた表情をしながら、聞いてくる。それを無視して俺は、もう一度彼女に問いかけた。

「もう一度聞く。さっきの願いはお前の本心なのか？」

「……………当たり前だ。こんな結末はあたしも嫌なんだよ」

彼女の答えに、俺はほくそ笑んでいるかもしれない。それほど嬉しいのだ。

「なら、その願い、この俺が叶えてあげる」

「えっ？」

佐倉杏子が目を見開いて俺を見た。

「覚えておくといいいぜ。神様っちゅうのはな、常に利口者の味方なんだぜ?」

俺はそう言うと、神剣を佐倉杏子に向けて掲げた

「輝け!力を断ち切りし炎天の光!!」

俺の言葉と同時に、神剣から彼女に向けて白銀の光が放たれる。

「なッ!?!」

俺の放った光に触れた瞬間、彼女のすべての魔法が停止し、地面へと落下したが俺の能力によって彼女の落下速度は落としておいた。

「さて、とつとと片付けよう。早く傷を治さないといけないしな」

俺は軽く準備運動をしながら、目の前にいる魔女を睨みつける。

「行くぞ……………リミットブレイク・ブート3!!!!」

そして、俺は封印を解除した。

第18話 美樹さやか救出作戦（後書き）

以上が第18話です。

果たして涉たちの運命はどうなるのか！？

次回も楽しみにして頂ければ幸いです。

皆様のご感想、アドバイス等もお待ちしております。

第19話 解き放たれた力の断片（前書き）

オリジナル展開です。

とりあえずは、ご都合主義設定なので、注意してください。

第19話 解き放たれた力の断片

杏子Side

そいつを最初見た時は、ちょっとだけ恐ろしいやつに見えた。

二度目に会ったときは………事実を隠していたことに怒りを覚えた。

三回目に会ったときは、そいつに恐怖を抱いた。

あたしのような存在がまるで小さな米粒のような……狩られる立場であるような錯覚を感じた。

そして今あたしの目の前にいるあいつは………今までのあいつとは違った。

姿遺体が変わっていたのだ。

それは制服のような服装から白い袴のような姿に変わり、手には真剣とやらが握られていた。

髪の色も黒から銀色に変わり、そいつから醸し出されるオーラは、まるで………天使のようなものだった。

Side out

俺は第3段階の封印を解除した。

そのため、今の俺の姿はかなり変わっている。
おそらくだが、今の姿は俺の本当の姿の一步手前状態だろう。

（さて、どういうプランで行くか）

俺は必死に考えた。

今日の前にいる人魚のような魔女からさやか之魂を取り戻さなければいけない。

だとすれば、出来る事は一つだ。

（あの魔女から魂を抜き取る………しかないか）

言葉でいうのは簡単だが、実際にやると、かなりきつい。

何せやり方が問題なのだ。

相手の魂がある場所を突き止め、そこを的確に腕でつかんで分離する。

魂の場所を突き止めるのはそれほど難しくはないが、相手の攻撃をかわしながら探すのは骨が折れる。

（まあ、やるっきゃないか）

「来い！このくそ野郎！！」

俺は吉宗と正宗を構えて、魔女を挑発する。

「……！！」

すると、それに反応したのか、魔女は再び車輪のようなものを出してきた。

「盾よ、我らを守れ」

俺はそう呟き神剣を、目の前で交差させるようにして構える。そして、一斉に放たれた車輪は俺へと放たれ命中するが、俺と佐倉杏子へのダメージはなかった。

（力の封印を解いただけでもまったく違う。これなら負ける気がしない）

俺はようやく取り戻した本来の力に感動していた。

まだまだ75%だが、それでもたいていの魔女は俺の敵ではない。

「さあ、さっきの仕返し、だ!!」

俺は二本の剣を魔女に向けて投げつける。

「!!」

二本の剣は魔女の横に突き刺さり、魔女はその動きを止めた。

これは簡単に言えば影止めにあたる。

相手の動きを少しの間だけ止めることが可能だ。

「行くぞ」

俺は魔女の背後へと回り込み、魔女に向けて手を掲げる。

今からやるのは、魂のある場所を探し出す工程だ。

これは数十秒あれば事足りる。

意識を集中する中、俺は小さな青い光を感じた。

（見つけた!!）

それが魔女の……さやか之魂であることはすぐに分かった。

「貰い、て!!！」

俺は魔女の魂がある部分に手を突っ込んだ。

今魂は露出状態にあるため、俺のような存在であれば、誰でも魂に触れることが出来る。

「掴まえた!!！」

そして俺はそれを一気に抜き取ると、手の中にはさやかの魂があった。

それを俺はビンの中に入れるとふたをして、茫然としている佐倉杏子に投げつけた。

「うわつと!?!」

「それを持っていてくれ!何かとがさばるから」

「わ、分かった」

俺の言葉に、彼女はそう答えると、大切そうにビンを持った。

「さて……」

「……!!!!」

影止めの効果が消えたのか、目の前の魔女の抜け殻が叫ぶ。

「もう魂は抜いたから、攻撃は出来ないがいて貰っても困るしな」

俺はそう言いながら、神剣を自分の元へと呼び戻す。

「だから、とつとと消えろ」

俺は後ろを見る。

「おい、僕のそばに來い。じゃないと死ぬぞ」

「わ、分かった」

俺の言葉に、佐倉杏子は慌てながら頷くと走って俺のそばまで來た。俺はそれを確認して、初めての大技を使うことにした。

「大地侵しし愚か者へ捧げる裁きの言葉……………」

俺の言葉に呼応して、神劍に光がともる。

それは純粹な力、エネルギーだ。

「愚か者に捧げる救いの手は無し…………… 未来永劫の地獄へと落ちろ」

そして俺は神劍を地面に振り下ろした。

「最終審判、レクリエム!!!」

その瞬間、膨大なエネルギーは一気に牙を向け魔女諸共、結界内で大爆発した。

その数秒後、魔女がいなくなったためか、はたまた結界を破壊したからかは分からないが、結界は消滅し、俺達はもといた建設現場に立っていた。

第19話 解き放たれた力の断片（後書き）

今回は、いよいよ渉の正体が……

それでは、これにて失礼します。

第20話 正体（前書き）

ついに渉の正体がわかります。
それでは、どうぞ

第20話 正体

俺は今マミさんと言いつ争っていた。

「本当にやる気なのね？」

「くどい。やると言ったらやる」

僕は今日の前にいる赤い髪の少女……佐倉杏子と、さやかが横たわっていた。

俺がやるのは、マミさんにやったのと同じ因果律操作だ。

「でも、因果律操作何て二人同時にやったら渉君の体に負担が

」

「平気だ。この程度で潰れるほど、俺は軟には出来てはいない」

「……それならいいのだけど」

マミさんの心配はもつともだ。

因果律の操作にはかなりの集中力と負担が生じる。

それを二人分もやるとなれば、かなりの負担が生じるだろう。

だが、俺はそっち方面に特化した存在だ。

そう簡単に潰れるのであれば、俺は消えた方がいい。

「では始めるか……コネクト」

そして俺は因果律操作を開始した。

因果律操作を終わらせた俺は、二人の目が覚めるのを待っていた。

「……ん」

「目覚めたか？ 佐倉杏子」

ようやく目を開けた彼女に、俺は声をかけた。

「あなたの魔法少女のシステムは僕の手で消して置いた。まあ、魔法は使えるが魔力が無くなったら普通の少女に戻る」

「あなた、一体……」

佐倉杏子の表情が驚きに満ちていた。

それもそのはずだ。

このようなことは普通は出来ない。

「あなたの疑問はそこにいる愚か者が目覚めてからにしよう」

「は？ って、さやか!？」

訳が分からないと言った表情をした佐倉杏子は、俺の視線を辿って思わず声を上げた。

「お、おい！ さやかは」

「ああ、大丈夫だ。少しすれば目が覚めると思うぞ、佐倉杏子よ」

俺は安心させるように微笑みながら答えた。
実をいえば彼女への処置がかなり難しかった。
体とのリンクの切れた魂を、もう一度体とリンクさせて、それを戻して因果を消去したりとかなり手間がかかった。

「いや、あたしのことは杏子でいい」

「なら、俺の事も涉と呼ぶといい」

とまあ、そんな感じで話していた時だった。

「う……」

「さやか!」

突然うめき声をあげたさやかの元に駆けよる杏子。

「ここは何処? 私は何で……」

「ここは俺の家。お前はこの俺が生き返らせた」

何が何だかわからない様子のさやかに、俺は淡々と答えた。

「わ、涉……」

「お前の魔法少女のシステムは消去しておいた。今は魔法少女の力が残ってはいるが、それも魔力が無くなれば普通の少女に戻る」

俺は、さやかの方を見ずに淡々と説明した。

「だから、お前は出ていくなり何なり好きにしろ」

「わ、涉、何もそこまで」

俺は止めようとする杏子を無視して言葉をつづけた。

「人の話もろくに聞かず、手を差し伸べたにもかかわらずにそれを払いのけ、終いには友人を傷つけて殺そうとした奴を俺が許すとも思ってたか？」

「そ、それは……」

俺の言葉に押し黙る杏子。

「本当にごめん。謝って許されることじゃないのは分かってる。でも、私にも涉の手伝いをさせて欲しい」

「罪滅ぼしか？」

「そうかもしれない。でも、何もしいっていうのも何だか嫌なんだ」

俺はさやかの方を見た。

さやかの目には決意がうかがえた。

「許しはしないが、勝手にしろ。言葉ではなく行動でそれを証明するんだな」

俺はそう言うと、二人をリビングへと案内した。

「さあ、適当に座って」

「わ、分かった」

「にしても、何も無いよね」

周りを見渡しながらさやかが呟く。

「置く必要がないだけだ。おい、紅茶二人分よろしく」
「分かったわ」

俺の声に、マミさんが呆れながら答えた。

「あれ？ 今の声って……」

声を聴いたことのあるさやかが、驚いた様子で俺を見た。

「おそらくさやかの考えている奴で、正しいと思うぞ」

そう説明した時、三人分の紅茶をトレイに乗せたマミさんが来た。

「お待たせ」

「ま、マミさん！！？」

さやかが驚きのあまりに席を思いつきり立ちあがった。

「久しぶりね、美樹さん」

「な、何でマミさんがここに？」

さやかが疑問に思うのも当然だろう。

何せ、マミさんは公では死んだことになっているのだから。

「それは渉君によって助けてもらったからよ」

「わ、渉が！？」

こつちを驚いた風に見るさやか。

「だったらあんた達を助けたのは、どこの誰なんだよ」

俺は呆れながら答えた。

「でも、涉って一体……」

「そうだな。まずはそこから話そう。何せお前たちはこの俺の仲間でもあるのだしな」

俺はそう告げると、席を立った。

「俺は、この世界を統括する三神の一人、主に世界の因果律を調節し世界を安定にさせる役割を持つ、世界の意志だ！」

「……………」

俺の名乗りを聞いた二人は口を開けて固まっていた。

「「ええ〜！！！！！？」」

そして思いっきり叫んだ。

「わ、涉がその、神様！？」

「し、信じらねない」

二人とも驚きのあまりに、混乱しているようだ。

「ほらほら、二人とも落ち着きなさい」

「わ、悪い」

「すみません」

そんな二人を落ち着かせるあたり、本当にマミさんはカリスマ性がある。

「マミさんを助けたのも、この俺の意志としての力を使ったまでだ」

「でも、マミさんは魔女に食べられたはずじゃ」

「それは俺が見せた幻術……つまりは幻だ」

さやかという言葉に、俺はそう答えた。

「なんで、そんな事を」

「俺の目的の遂行に、正体がばれる訳にもいかなかったからな。」

「あんたの目的ってなんだ？」

杏子が俺に疑問を投げかける。

「そこを含めて全員に話していくんだ」

俺はそう言つと、ホワイトボードを引つ張りりだした。

「ところで、渉が使つてた気法つて本当にそう呼ぶの？」

「それは否。正しくは神が使う魔法のようなものだから、神術だ」

俺の答えを聞いた二人が呆然としていたが、俺は咳払いをして事情説明を始めた。

「俺がここに来た理由。それはこの世界で不可思議な時間経過を確認したことによる」

「不可思議な時間経過？」

「簡単に言えば、ある一定の期間で時間軸が戻されてまた進みだしているんだ」

さやかの疑問に、俺は分かりやすく説明しながら答えた。

「そして、この時間経過異常を起こしているとみられるのが……」

俺はボードに暁美さんの写真を張った。

「彼女だ」

「転校生!？」

「そう言えば、こいつは時間操作をする魔法少女だって言ってたな」

杏子が思い出したようにつぶやく。

「彼女は、何らかの条件がそろった場合に自ら、もしくは自動的に時間回帰……以後はリセットと呼称する。それを起こしているとみられる」

「その条件って何なのかってわかってるの？」

「ああ。鹿目まどかだ」

俺はさやかかの問いかけに答えた。

「まどかが!？」

「彼女は、まどかが魔法少女になるとリセットされるようになってる。それがこの不可思議な時間経過の原因だったんだ」

「そして涉が、その原因の究明にやってきたっていうわけか」

杏子がまとめるように言った。

「そう。そして色々と見ていくうちに、このリセットの裏に隠されたことが分かってきた」

「それが魔法少女と言う存在の秘密の事よ。私達は、それを解決することがこのリセット現象を止める方法だと考えて動いていたのよ」

「と言うことは、まどかが魔法少女にならなければいってわけだね」

「いや、そうとも言い切れない」

さやかという言葉を、俺は否定した。

「な、何で？」

「それは、杏子の言うワルプルギスの夜と言う魔女の存在だ。これはざっと調べてみた限りだが、普通の魔女より因果を大量に保有している。このレベルまで行けば普通の魔法少女……暁美さんでも叶う相手ではない」

「と言うことは、必然的にまどかが魔法少女になって倒さなければいけないるってわけ？」

さやかの言葉に、俺は無言で頷いた。

「なんとかなんねえのか？」

「どうにもならないな。因果律を見る限りではまどかが魔法少女にならなければ、この世界は滅びると言う結果も出ている」

「そんな……」

「しかし、どうしてそんなことが」

杏子が俺に疑問を投げかけてきたので、俺は一枚の紙を二人の前に差し出した。

「これは？」

「それはこの世界の因果情報だ」

「何が書いてあるかさっぱり分かんないんだが」

杏子がそれを見て呻っていた。

「まあ、普通はそつだ。俺はそこからこの世界の成り立ちや現状な

どを読み取るといっわけなのだが、このAとBを見てほしい」

「?? 別におかしなところはないようにも見えるけど」

「AとBのこの部分が同じだろ」

俺はそう言いながら赤ペンでその部分を囲った。

二人はなるほど頷きながらそれを見ていた。

「その部分は、世界全般での因果律形成の経過を出されている所だ。上がこの世界自体の、下が鹿目まどかの因果律情報だ」

「嘘でしょ!？」

「全くそっくりだな」

俺の言葉を聞いた二人が驚いた様子で文字を読み直す。

そう、文字の配置から何からがすべて同じなのだ。

「これをまとめると、彼女はこの”世界”そのものになっているんだ」

「でも、それってかなりまずいだろ」

「もちろんだ。このままいけば魔法少女になったとたんに、世界から排除される」

杏子の言葉に、俺はそう答えた。

「なんとかなんないのか?」

「悪いが、こればかりはどうしようもない」

俺は首を振った。

世界自体になった彼女に、俺が手を出すことは難しいのだ。もし手を出せば、世界が狂う可能性もあるからだ。

「ねえ、こうなった原因がもしあの転校生だったら、涉がまどかと契約して魔法少女にしたらどうかかな？」

「ナイスアイデアだ！！ それならいけるな。では、こうしよう」

俺は頭の中に浮かんだ計画を全員に話した。

「それって、あの転校生が完全に駒になるけど……」

「まあちょうどいいだろ。守るためとはいえ世界のバランスを崩したんだから、少しくらいは利用しないと気が済まない」

俺の一言に、二人が苦笑いを浮かべた。

「さあ、ワルプルギスの夜が来るまで休むように。それと二人はそれまで外出は禁止」

「ちよつと！ なんでさ？！」

「二人は行方不明扱いだ。それが外にふわっと出られて見つかったら大問題になるからだ。悪いがそれだけは理解してくれ」

俺の言葉に、二人はあまり納得していなさそうであったが、奥の方に入って行った。

それを見た俺は、外に玄関へと向かった。

「どこに行くのかしら？」

「暁美さんの所だ。協力する意思があるのかを確認しに行く」

「気を付けてね」

俺はマミさんの言葉に片手をあげて答えると、そのまま外に出た。そして俺は、暁美ほむらの家へと向かった。

第21話 憎みし者（前書き）

いきなりのクライマックス。

話についていけなくなる予感がしますが、どうぞ

第21話 憎みし者

俺は暁美さんの家の中にいた。
もちろん無断だ。

「で、どうする気だ？」

「ッ！？ あなた、一体どこから。それに前に銃で」

驚いた様子でこっちを見てくる暁美さん。

「全く、いくら俺が不死身だからと言っても獣は勘弁してもらいた
いものだ。あれ痛いんだぞ？」

「あなた、一体何者なの？」

暁美さんが俺に問いかけてくる。

「俺はこの世界の運命を定める役割を持っている、世界を統括せし
三神の一人、世界の意志さ」

「……………どういうこと？」

俺の言葉に、暁美さんが首を傾げた。

「簡単に言ってしまうえばこの世界で生きている人たちの運命のよう
に世界自体の運命を操作すると言う意味だ」

「つまり、あなたがこの世界の行方を操作していると考えて間違
ないのね？」

暁美さんの言葉に、俺は頷いた。

その瞬間だった。

突然銃声が響き渡った。

「危ないな。さっきも言ったが、それかなり痛いんだぞ?」

俺は暁美さんの背後に高速で移動していた。

すると、再び銃声が鳴り響いた。

また俺に向かって打ったのだ。

「さっきから鬱陶しい!! 滅!」

「きゃ!?!」

今度ばかりは頭に來たので、銃を破壊した。

「つたく、なんで世界の意志だと告げて撃たれなくちゃならないんだよ」

「あなたが、諸悪の根源だからよ」

「ほう? 言ってくれるな。この事態を引き起こしたのは、俺ではなくインキュベーターだ。まあ、あれも世界から作られたものだから、まわりまわって俺が悪くなるんだがな」

俺の言葉に暁美さんが俺の胸に掴みかかってきた。

「あなたの性で! あなたの性でまどかは何回も死んでるのよ!」

「ふん!」

俺は胸を掴みかかる暁美さんを思いつきり払いのけた。

「甘ったれるな小娘! すべてを俺のせいにするな。確かにこの世界で起きた事項は俺に責任がある。だがな! この世界を安定化させるにはそう言うかわいそうな奴がいけないといけないんだ。この世

界はな、全員が全員平等じゃねえんだよ」

俺は、そこまで叫ぶと彼女に背を向けた。

「ここまで悪化させて、まだ何とかなると思ってるその甘さ加減が笑える。お前が何度も何度も時間を戻したことによって、まどかはこの世界自体となり俺には手に負えなくなってしまった。それを引き起こしたのがどこの誰か、そしてそれを考えても俺を殺せるのであれば、好きにするといい」

俺は、そこでいったん言葉を区切った。

「まあ、せいぜいもがくと良い。だがな、運命は変えることはできない。それだけは覚えておけ」

俺はそう告げると、暁美さんの家を後にした。
気分は最悪なままだが。

(ワルプルギスの夜まであと数日。俺も準備をしなければな)

俺はそう思いながら、拠点地へと戻るのであった。

ほむらside

私は、とても混乱していました。

小野渉、彼が世界の意志だということに。

そして、彼自身がまどかを死の運命に導いた張本人。

絶対に許せない。

でも、私は心のどこかで感じていました。

彼自身には何の責任はないと言うことに。

彼はただ単に世界を安定化させようとしていただけだったのだから。でも、それでも私は彼の事が許せない。

（絶対にまどかだけでも助けてみせる！！ たとえ私が朽ち果てたとしても、必ず）

私はそう決心しました。

それから数日後、ワルプルギスの夜が来て、私は一人で戦いましたが、倒すことが出来ず時間を戻せば、まどかがさらに因縁が強くなってしまう事を思い出した私は、どうしようもできないことに絶望して泣いていました。

そんな私の手をそつと誰かが包み込んでくれました。
それは、まどかでした。

「……!？」

「もういい。もういいんだよ、ほむらちゃん」

「まどか……?」

私は嫌な予感がしてまどかの名前を呼びました。
まどかはそつと立ち上がってワルプルギスの夜を見えています。
その横にはキユウベえと、彼の姿がありました。

「まどか……まさか!？」

私はそれが、何を意味しているのかがすぐに分かりました。

「ほむらちゃん、ごめんね。私、魔法少女になる」

そして、まどかは私にそう言いました。

それは、私が一番恐れていたことでした。

S i d e o u t

第21話 憎みし者（後書き）

残すところあと4話。

どのような結末になるのかを、楽しみにして頂けると幸いです。

第22話 覚悟（前書き）

いよいよ渉が本格的に動き始めます。

第22話 覚悟

俺は大きなホールの階段のある場所で、外を見ていた。

「あれがワルプルギスの夜か。何ともまあ凄まじいものだ」

俺は一人でつぶやいていた。

他のみんなは外にいて貰っている。

それは、ある目的のためだ。

「……………」

俺は左手を見る。

その手はかすかにはあるが、”薄く”なっていた。

「もう時間がない。せめて、この世界を……まどか達を救うことが出来るまでは、持ってほしいものだ」

俺は静かに呟いた。

俺自身が、この世界に留まれるほどの力が無くなり始めている証拠でもあった。

そんな時、足音がしたので、俺はそつと物陰に隠れた。

やってきたのは、まどかとキュウベえだった。

「ほむらちゃんが一人でも勝てるっていうのは、ホント？」

「それを否定したとして、君は僕の言葉を信じるかい？ 今更言葉にして説くまでもない。その目で見届けてあげるといい。ワルプルギスを前にして、暁美ほむらがどこまでやれるか」

まどかの言葉に、キュウベえが答えた。

「どうしてそうまでして戦うの？」

「彼女がまだ、希望を求めているからさ。いざとなれば、この時間軸もまた無為にして、ほむらは戦い続けるだろう。何度でも性懲りもなく、この無意味な連鎖を繰り返すんだろうね。最早今の彼女にとって、立ち止まることと、諦めることは同義だ」

キュウベえの言葉を聞いたまどかは悲しげな表情を浮かべていた。

「何もかもが無駄だった、と………決してまどかの運命を変えられないと確信したその瞬間に、暁美ほむらは絶望に負けて、グリーンフィールドへと変わるだろう。彼女自身も分かっているんだ、だから選択肢なんてない。勝ち目のあるなしにかかわらず、ほむらは戦うしかないんだよ」

「希望を持つ限り、救われないって言うの？」

キュウベえにまどかは問いたです。

(どうあがいても報われない。それが運命だと言ってしまえば簡単に終わるだろうけど)

俺としては、それはかなり残酷でひどい言葉だと思った。

「そうさ。過去の全ての魔法少女たちと同じだよ。まどか、君だって一緒に視^みただろう？」

「うう………」

何を見たのかは分からない。

だが、まどかはそれを思い出したのか口元を押さえた。

「……でも、でも。でも！」

まどかは涙をぬぐいながらそう言うと、階段を降りようとする。しかし、それを止める者がいた。

「どこ行こうってんだ？オイ」

「ママ……私、友達を助けに行かないと」

それはまどかの母親だった。

目元が細まっていて、どことなく怖い雰囲気でした。

「消防署に任せろ。素人が動くな」

「私でなきゃダメなの！」

まどかがそう叫んだ瞬間、乾いた音が響いた。

まどかの母親がまどかを引っ叩いたのだ。

「テメエ一人のための命じゃねえんだ！ あのなあ、そういう勝手にやらかして、周りがどれだけ」

「わかってる。私にもよくわかる。私だってママのことパパのこと、大好きだから。どんなに大切にしてもらってるか知ってるから。自分を粗末にしちゃいけないの、わかる。だから違うの。みんな大事で、絶対に守らなきゃいけないから。そのためには、私今すぐ行かなきゃいけないところがあるの！」

母親の言葉を遮ってまどかはそう言い放つ。

その眼には、確実な決意がうかがえた。

「理由は説明できねえってか。なら、アタシも連れていけ」

「ダメ。ママはパパやタツヤの傍にいて、二人を安心させてあげて」
まどかは首を振って拒否した。

「ママはさ、私がいい子に育ったって、言ってくれたよね。嘘もつかない、悪いこともしないって。今でもそう信じてくれる？私を正しいと思うってくれる？」

まどかの言葉に、思わず差し出した手を引っ込めた。

「絶対に下手打ったりしないな？ 誰かの嘘に踊らされてねえな？」
「うん」

まどかの答えを聞いた母親は、まどかの背中を強めに押した。

「ありがとう、ママ」

そう言ってまどかは階段を下りて行った。

「……………これでよかったんだよね？」
「ええ、完璧ですよ」

母親の言葉に、俺は姿を見せた。

「一体何が目的だ？」
「言ったじゃないですか。彼女の覚悟を見たい、と。それ以上は申し訳ないですが」
「いえないってことが」

僕は少し前に、この母親にまどかのやろつとしていることを話していたのだ。

その上で、彼女に協力をして貰ったのだ。それが、さっきのやり取りだ。

「あれは私の本心だ。それよりも」

「ええ、分かっています。約束はしっかりと守らせてもらいます」

僕は協力をしてもらう代わりに、まどかの安全を守るようにと云う約束をしていたのだ。

「しかし、あなたは何者なんだ？普通の中学生には到底見えない。それにこのことはおめえのご両親は知っているのか？」

「ふふ……俺はしがない占い師ですよ」

俺は笑顔で母親に答えた。

「俺には両親と言う概念は存在しませんしね。昔っからやれ戦だ、やれ暗殺だの毎日でしたからね」

「……………」

俺はそう言つと、階段を下り始めた。

「俺は、行きますよ……ご安心ください。あなたの娘さんは必ず無事に帰れるようにしますから」

俺は心配そうな表情を浮かべる母親にそう告げた。

あれが、母親と言つものなのだろうか？

(やっぱり分からないな)

俺はそんな自分に苦笑いを浮かべた。

「もう、あなたとは二度と会うことはないでしょう。なので、失礼ながら一つだけ忠告を」

俺はそこで区切ると、母親と向き合った。

「子どもと言うのはたとえ思春期を超えても子供のまま。20歳までは最低でも娘さんの道しるべでいることだ。でなければ、俺のような殺人鬼になってしまう」

俺はそう告げて、今度こそはと階段を下る。

「では、よいペアレन्ツライフを」

俺はそう言って階段から飛び降り、走って外に向かった。

『まどかを見つけたよ。今、ワルプルギスの方向に走ってる。キュウベえと一緒に』

『了解。そのまま姿を消した状態で尾行を続行だ』

外で待機していたさやかから連絡が入った。

そう、全員にはまどかの尾行と言う役割があったのだ。

そして俺はまどかの元へと向かった。

「まどか!?!」

「渉君!?!」

俺が射ることに驚いたまどかは目を見開きながら俺を見る。
だが、その足はいまだに止まることを知らない。

『どうやら、覚悟はできたようだな』

『うん』

俺のテレパシーにまどかは頷いて答えた。

『だったらその命、少しの間、俺に預けてはくれないか?』

『え?!』

俺の言葉に、まどかは驚いた様子で俺を見た。

『何も魔法少女になるのがキュウベえと契約をしなければいけないのではない。俺ならば、魂を分断することも、まどかが消えることもない。まあ、願い事はかなわないけど』

『渉君って一体……』

『どうするの? このままキュウベえと契約して消えるのと、俺と契約して願い事はかなわないだろうが消えはしない方を選ぶのとどちらを選ぶ』

俺はまどかに有無を言わせずに、選択肢を突き付けた。

まどかはしばらく考え込みそして、決意が出たのか俺の方を見た。

『涉君、信じていいんだよね？』

『当たり前だ。俺は人の命に関わる様な嘘は利口者には付かないさ』

まどかの問いかけに、俺は笑いながら答えた。

まあ、これが馬鹿だったら保証はしかねるが。

『それじゃ、涉君お願い』

『了解。その選択はのちに、正しいと思うはずだ』

そうこうしているうちに、暁美さんの元へとたどり着いた。

彼女は足ががれきに挟まれ、頭からは血が流れていた。

「……………!?!」

まどかがしゃがみこんで、暁美さんの手を握ると暁美さんは突然目を開けてまどかを見た。

「もういい。もういいんだよ、ほむらちゃん」

「まどか……………?」

暁美さんは俺とキュウベエの顔を見て目を見開いた。

「まどか……………まさか!?!」

「ほむらちゃん、ごめんね。私、魔法少女になる」

そしてまどかは、暁美さんにそう告げたのであった。

第22話 覚悟（後書き）

残すところエピソードを入れてあと4、5話。

この絶望だけしかない物語も、いよいよ希望で満ちようとしていきます。

それでは、次回もお楽しみに。

第23話 契約（前書き）

さてさて急展開です。
短めですが、どうぞ

第23話 契約

「まどか……そんな」

まどかの言葉に暁美さんが絶望の淵にとされたような表情をする。

「私、やっと分かったの。叶えたい願いごと見つけたの。だからそのために、この命を使うね」

「やめて！ それじゃ……それじゃ私は、何のために」

暁美さんはとうとう泣き出してしまった。

(何だか俺が泣かせたような気分がする)

「ごめん。ホントにごめん。これまでずっと、ずっとずっと、ほむらちゃんに守られて、望まれてきたから、今の私があるんだと思う。ホントにごめん」

まどかは優しく暁美さんを抱きしめた。

「そんな私が、やっと見つけ出した答えなの。信じて」

「まどか……」

「絶対に、今日までのほむらちゃんを無駄にしたりしないから」

まどかはそう言って立ち上がった。

(さて、そろそろかな)

「キュウベえ、契約の前に少し時間をもらってもいいか？」

「……………なるべく早く終わらせてもらいたいな」

キユウベえは、ようやくこぎつけた契約を、速く遂行しようとしている感じが伝わってきた。

(お前の思い通りには絶対にさせない。)

「契約の前に、まどかに会わせたい奴がいるんだ」
「え!?!」

俺の言葉に、まどかは驚いた様子でこっちを見た。

「これが、俺が起こした奇跡の結果だ。さあみんな！ 出番だ!！」

俺は大きな声でそう叫んだ。

その次の瞬間だった。

「やっとこのこそそとした生活も終わりね」

「全くだぜ。やっぱりあたしはこうというのが似合ってる」

「でも、こういう登場って、ヒーローものみたいでかっこいいじゃん」

俺達の前に姿を現したのは、魔法少女の姿であるマミさん、杏子そしてさやかか三人だった。

「マミさん、杏子ちゃん。それにさやかちゃん？」

その光景をまどかは……………いや暁美さんも信じられない様子で見ていた。

「ごめんねまどかさん。あなたを危険なことに巻き込もうとして」「待たせたな。と言うよりまた会えてうれしいよ」「この間はごめんねまどか」

三者三様にまどかに声をかけていく。

「良かった……よかった」

そんな中、まどかは涙を流して喜んでいた。

「君は一体……一体何者なんだい？ 魔女化したものを元に戻したり、死んだはずの人間を蘇らせるなんてこと、普通は出来ない」

「はぁ……本当はお前のような下郎に教えてやる義理はないのだが、特別に教えてやろう」

キュウベえの問いかけに、俺はそう答えて一回深呼吸をした。

「俺はこの世界を統括する三神の一人。世界の運命や人々の因果を操作・閲覧する、世界の意志だ！」

「涉君って……神様だったの？」

「ああ、そつだ」

いつの間にかそばにいたまどかの問いかけに、俺は頷いて答えた。

「ええええ！！？」

その事実にも、まどかは大きな声を出して驚いていた。

「別にそこまで驚かなくてもいいよ」

「だって」

「だからと言ってその三人の俺に対する対応も問題だな」

まどかの言葉を遮って、俺はそう言つと三人を睨んだ。

「マミさんは着替えが欲しいから服を持ってきてと言つし、拳句の果てには中身を見られたくないとのこととでクローゼットごと持つてこいと言つ始末だし、杏子は杏子でお菓子を買って来いだと着替えを買つて来いだの言つし、さやかに至つては何度も何度も脱走しようとするんだから」

俺の苦勞はそこだった。

「渉君が外に出るなつて言つからじゃない」

マミさんがそう言つてくるが、本当にこの数日間俺は、彼女たちに振り回されていたのだ。

「そりや確かに、軟禁状態にしたのは俺だが、物には限度と言つものがあるだろ？」

「あ、あはは……」

俺の言葉に、まどかは苦笑いを浮かべるだけだった。

「さて、みんな。あとは手筈通りに」

「」「了解！」「」

俺の言葉に、三人は答えるとマミさんと杏子の二人はワルプルギスの夜へ、さやかは暁美さんの方へ行き、治癒魔法をかけた。

「今、あれは二人が抑えている。とつとと契約の儀を始めよう」

「……………うん！」

俺はまどかが頷いたのを確認して、契約の儀を始めた。

「願いを叶えし神よ、かの者の願いを叶えたまえその願いを憑代に彼女に力を与えたまえ。その代償は彼女の因果……………さあ、汝、鹿目まどか。貴殿は何を願う」

「私……………はあ……………ふう」

俺の問いかけに、まどかは一旦深呼吸をする。

「全ての魔女を、生まれる前に消し去りたい。全ての宇宙、過去と未来の全ての魔女を、この手で」

「っ!？」

果たして息をのんだのは俺とキュウベエのどちらなのか。
おそらくは両方だろう。

「その祈りは　そんな祈りが叶うとすれば、それは時間干渉なんてレベルじゃない！　因果律そのものに対する反逆だ！　まさか君は、本当に神になるつもりかい？」

キュウベエが慌てた口調でまどかに話し掛ける。

「神様でも何でもいい。今日まで魔女と戦ってきたみんなを、希望を信じた魔法少女を、私は泣かせたくない。最後まで笑顔でいてほしい。それを邪魔するルールなんて、壊してみせる、変えてみせる。これが私の祈り、私の願い」

まどかはそこでいったん区切ると、俺の方を力強く見てきた。

「さあ！ 叶えてよ、渉君！！」

「ホントに最高だ………世界の意志小野 渉、汝の願いを聞き入れ
力を授ける。ディジュレ！」

その瞬間俺達は、ピンク色の光に飲み込まれた。

第24話 ワルプルギスの夜（前書き）

今回はVSワルプルギスの夜です。
本作の一番のクライマックスです。

第24話 ワルプルギスの夜

契約作業中、周りが白一色に覆われる所で、俺とまどかは話をして
いた。

「にしても、本当にすごいことを願うものだ」

「だ、ダメだったかな？」

まどかが上目づかいに聞いてくる。

「ダメではないさ、逆に愉快なだけだよ。普通は金銀財宝不老不死
なんて言う不埒な願いをする奴が多いからな」

もちろんそう言った願いをする奴は、代償をかなり多めに取ってお
くが。

何も努力せずに楽をしようとするのは、あまり許せるものではない。

「あ、あははは」

まどかは俺の言葉に苦笑いを浮かべた。

「まじめな話だけど、一つだけ忠告」

俺は真剣な面持ちでまどかに話し掛けた。

「強大な力は自らを滅ぼすものとなる。特に、まどかの願いは世界
の書き換えに値し、それは創造の神の役割に抵触する。やりすぎる
と、世界から排除されることになるだろう」

俺はまどかの力の膨大さを危険視していた。
なぜなら、まどかの力はやろうと思えば世界自体をなかつたことに
出来るほどだ。

それほどの強大な力ならば世界の防衛能力が発動してまどかを排除
しようとする。

それから守るのが俺の役割だ。

「だから、使うのであれば気を付けて使うんだぞ」
「う、うん」

俺の言葉に、真剣な面持ちで頷くまどか。

「どうして涉君は、ここまで私に優しくしてくれるの？」

「そっだな……」

まどかの問いかけに俺は、しばらく考え込んだ。

やっぱり答えと言えばあれしかない。

「神様と言つのは、利口な奴の願い事ならば聞いてくれるものさ」
「……?」

俺の言葉に納得できないのか、まどかは首を傾げていた。

「さあ、始まりだ。少々頭痛がすると思うが、それは因果をまどか
に収束させるためのものだから、つらいだろうが辛抱してくれ。で
は、健闘を祈る」

そして、俺は空間から脱出をした。

「よつと」

「まどかは!？」

空間を出ると、さやかがものすごい勢いで訪ねてきた。

「契約は成功だ。あと数分で完了する」

俺はさやかにそう答えた。

俺とさやかは光の柱を見る。

今、因果は少しずつ収束を始めている。

数分もすれば因果が収束され、その力を振るうだろう。

「私は、あなたを許さないわ」

「ん？」

冷たい声に、俺は振り返ると、暁美さんがものすごい形相で睨みつけていた。

「まどかを魔法少女にすればどうなるかを知っていたのに、まどかを魔法少女にするなんて……あなたこそ、殺人者よ!!」

「殺人者か……それを否定する気ではないが、俺は世界のためにまどかの命を犠牲にさせるようなことはしないさ」

暁美さんの言葉に、俺はそう答えた。

「俺はただ、彼女の命を借りているだけ。事が済み次第、彼女に返す」

「一体何をする気？」

「そうだな……まどかに集まっている変な因果を消去して、世界の状態を元に戻して世界を安定化させる……それが俺の最終目標だ」

俺の言葉に、暁美さんは目を見開いてこっちを見据える。

「さあ、見るがいい。世界と化した少女が繰り出す一撃を！」

俺の言葉が言い終えた瞬間、光の柱は一気ににはじけると、そこには白いドレスのような恰好をしたまどかの姿があった。

その手には上側に花のようなものがついた、弓があった。

そして目は金色となっていた。

「さて、まどか。気分はどうだ？」

「ちよっと頭が痛いけど、大丈夫！」

様子を見ても顔色はよさそうなので一応は大丈夫と言った所か。

「すまないな本当であれば、戦い方を手取り足取り教えようと思ったのだが、時間の関係上一発勝負になる」

「大丈夫。なんとかかなりそうな予感がするの」

俺はまどかの言葉を聞いて思わず笑いそうになったが、必死に抑えた。

「まどか、最後に確認だ。お前の力は強大過ぎる、そのため魔法は1回のみだ。これ以上はまどかの生存にかかわるため、俺の方で使えないようにしてある」

「つまり、実質一回のチャンスだね」

俺は無言で頷いた。

「まずは、俺があいつを弱らす。そしたらその後にもどかの”想い”を乗せて魔法を使うんだ。分かったな？」

「うん！」

俺はまどかが頷いたのを確認して、全員に聞こえるくらいの声を上げた。

「みんな、そこまでだ！ 安全地帯まで撤退！！」

俺の声が聞こえたのか、全員が曉美さんの近くまで下がった。

「まどか、そこでじっとしていて」

「う、うん！」

俺はまどかに告げると一歩前に出て片手を前に掲げた。

「リミットブレイク・真名解放！」

俺の言葉と同時に、俺の体中に力が満ち溢れる。

「わ、涉……君？」

「これはまた……」

「まるで天使みたいだ」

俺の真の姿を見た全員がそう感想を述べる。
だが、どうにも恥ずかしい。

「さて、この毒を排除するのに反対する人は？」
「いません」

さやかが全員の言葉を代弁して、答えた。
俺は毒でもある、キュウベえを上空に浮かべた。

「な、何を」
「貴様をこの世界の毒とみなし、排除する。因果情報、削除」

俺はこの世界から、キュウベえの因果情報を文字通り消した。
この世界の因果情報には、人々が存在を保つための情報がある。
それが因果情報だ。
これをいじれば、この世界に存在する物を関連するのを含めてすべて消し去ってしまうのだ。
そして消えたものは、絶対に元には戻らない。

「さて、キュウベえの消去が終わったところで、こいつをどうにかするか」

俺はワルブルギスの夜を見る。
未だに、不気味に浮かび上がっていた。

「神剣の吉宗、正宗に次ぐ新たなる姿」

俺は二本の神剣を頭上で重ねた。

その次の瞬間、俺の手には白い弓があった。
それを俺は構えてワルプルギスの夜に向ける。

「布石を打たせて貰おう。その因果、喰らい尽くす！ 秘奥、因縁
食い！」

霊力で生成した矢はまっすぐ魔女まで飛んでいくと命中した。

「因果律90%まで減少……まどか、やれ！」

そして俺は、まどかに指示を出した。

「うん！」

まどかは大きく頷くと、弓を上空に向けて構えた。

それと同時に、まどかの頭上に円型の陣が形成される。

それには見向きもせず、まどかは魔力で生成された矢を放った。

その矢は灰色の空を一気に青空に変えると、分割したのか無数の矢
が色々な場所に向かって行った。

「因果律減少……70 / 50 / 30！」

俺は情報を伝えながら、そのあまりの力に驚きを隠せなかった。

(この力、世界の意志の俺に匹敵するほどだ)

そして、しばらくするとワルプルギスの夜は、断末魔を上げながら
消滅した。

その際、数人の魔法少女の姿が見えたような気がした。

それはともかく、こうして最大の脅威でもある”ワルプルギスの夜

”は幕を閉じたと思っていた。

この後、さらなる脅威が俺達を襲うことになるとも知らずに。

第24話 ワルプルギスの夜（後書き）

意味深なことを言い残しましたが、次回は完全オリジナルです。
どうなるかは、次回のお楽しみと言っことで。

第25話 終焉の魔女（前書き）

いよいよオリジナル展開です。
それでは、どうぞ

第25話 終焉の魔女

ワルプルギスの夜を倒した俺は、空を見上げていた。

「……………」

「怖い顔してどうしたの？ 渉君」

「そうだよせっかくワルプルギスの夜を倒せたのにさ」

そんな俺に気付いたのか、まどかとさやかが声をかけてきた。

「……………何でもない。それよりも、そこにいる大馬鹿者の処置をする」

「……………」

俺の言葉に、大馬鹿者と呼ばれた暁美さんは視線を逸らした。

「つたく、神殺しは大罪だぞ……………コンタクト」

俺は暁美さんに文句を言いながら因果律操作を開始した。それはものの数分で完了する。

「はい、これで終わり。お前たちの運命はこの先も続くだろう」

「小野 渉」

「なんだ？」

突然フルネームで暁美さんに呼ばれ、俺は振り返りながら問いかけた。

「その……………あり」

暁美さんが何かを言おうとした瞬間だった。
突然俺は体中が硬直するような感覚が襲った。

「渉、見てあれ!!」

さやか指さす方向、そこには………巨大な魔女がいた。
その魔女は巨大な魔人のような姿をしていた。

「なんなの……これ」

全員がその魔女に混乱していた。

「やはりな……出るとは思ってはいたが本当に出たか」

「ちよっと、渉君どういふ事なのか説明してちょうだい!」

俺の呟きに、マミさんがいつもとは似つかわしくないほど激しい口調で俺を問いただす。

「あれは、この世界そのものの魔女だ」

「どういふ意味だよ?」

俺の説明に、杏子は理解できないのか首を傾げていた。

「俺は、この世界で色々な死すべき者を無代償で助け出してしまった。そのことにより、世界は不安定となってしまったのだろう」

「つまり、こうなったのは私たちのせい?」

悲しげなまどかの言葉に、俺は無言で首を横に振って答えた。

「俺のせいだ。お前たちを助けると判断したのはこの俺なんだから。それにあいつは、この世界を安定させようとしている防衛プログラムのような存在だ」

「っていう事は、あれは放っておいても大丈夫ってこと？」

「いや、大丈夫でもない」

さやかという言葉に俺は否定した。

「どうしてかしら？」

「あれは世界を安定させようとしている。つまり、お前たちを殺そうとしているんだ」

『ッ！！？』

俺の言葉に、全員が息をのんだ。

世界の不安定が彼女たちによるものであるのならば、彼女たちを消去するはずだ。

これが世界を安定させる力なのだ。

「ど、どうすればいいのよ?!」

「せっかくここまでこれたのに……そんな結末なんていやよッ」

さやかには俺に問いただし、曉美さんは涙を流す。

(覚悟を決めるか)

俺は、そう自分に言い聞かせた。

そして口を開こうとした瞬間だった。

「な、何!？」

「じ、地震!？」

突然の揺れが俺達を襲った。

「これは……プリマテリアライズオーバードライブ原初物質化暴走か!? まずいな」
「な、何なの? その原初何とかって」

俺の呟きが聞こえたのかさやか達が聞いてくる。

「プリマテリアライズ・オーバードライブ。この世界を形成する根源が暴走を起こして崩壊させようとする現象の事だ」

「それって、起きたらどうなるんだ?」
「……………この世界が滅びる」

俺は杏子の問いかけに、言うか言わないかを悩んだ末いう事にした。

「そ、そんなッ!」

まどかが声を上げた。

「大丈夫だ。まだ本格的には始動していない。まだ時間はある」
「よ、よかったあ」

俺の言葉に、全員が安堵の表情を浮かべる。

「だが、あと2、30分で発動してこの世界は崩壊する」
「だったら、それまでにあたし達が倒しちゃえばいいんだよね?」
「ああもちろんだ。まあ、お前たちが戦えればの話だがな」

さやかの言葉に、俺は賛同しながらそう告げた。

「戦えるよ。だってあたしたちは魔法少女……あれ？」

さやかは魔法少女の姿になろうとしたが、なることはできなかった。他のみんなも試しているが、全員がさやかと同じ結果だった。

「これは、どういう事なんだよ!!」

「前に言わなかったか？ お前たちに与えた魔法少女の力は、魔力が無くなれば終わりだと言う事を」

俺は杏子達にそう答えた。

「まさか……」

「そう、そのまさかだ。お前たちは魔力をすべて使い果たしたんだ。その手にある武器を飛ばすことも使う事も出来ない。まどかは一回限り、暁美さんに限っては力を与えてもいない」

つまりは全員が戦う事は出来なくなったのだ。

「そんな……」

「これまで……なの？」

「おいおい、忘れてないか？ お前たち」

絶望に浸る全員に、俺はそう言い放った。

「まだ、戦えることのできる奴が一人いるだろ？」

「あ!？」

俺の言葉に、全員が声を上げて俺を見た。と言つより、本当に忘れてたのかよ……

「渉君なら、戦える」

「しかも、世界の何とかと言う神様だから、強いはず」

全員の顔に希望が蘇った。

その変わり身の早さに苦笑いを浮かべながら、俺は言葉を紡ぐ。

「そう、この俺ならばなんとか戦うことができる。そのために、みんなに協力してほしいことがある」

「何かな？」

「あたしたちに出来る事なら、何でも協力するよ」

俺にそう言ってくれるみんなの優しさに感謝しつつ、俺は続けた。

「お前たちの持つ、武器を渡してほしい」

「武器…を？」

全員が意味が分からないと言った表情をしていた。

「お前たちの武器と、この神剣を合わせて能力値を上げて戦うんだ」
「そ、そんなことが出来るの？」

まどかの問いかけに、俺は頷いて答えた。

それぞれの手には武器が握られていた。

「だったら、私は渉君を信じる」

「あたしも！」

「私もよ！」

「あたしもだ」

全員がそう言いながら俺に武器を手渡してくれた。

そして、最後に残ったのが、暁美さんになった。

「あなたなら、絶対に勝てるのね？」

「絶対とは言わないが誓おう。この神剣にかけて」

俺の答えに、暁美さんは盾のようなものを俺の手に置いた。

それは、エールのようなものであると俺には感じた。

「それじゃ……………」

俺は深呼吸を一回した。

「全てを司りし武器よ、我が神剣と合わさりその力を示したまえ！」

俺の言葉に、従うように全員の武器が神剣と合わさって行き、そして光を放った。

その光に俺は思わず目を閉じた。

やがて、光が晴れるとそこにあったのは、大きな紅い剣だった。

「す、すい……………」

「きれい」

後ろからそんな声が聞こえるが、俺はそれを無視し剣を握ると目の前にいる終焉の魔女を見る。

不気味なことに、そいつは一步も動くそぶりもしない。

だが、そんなことは関係はない。

原初物質化暴走まで残り時間は15分。

なんとしてでも倒さなければいけない。

例え刺し違いになっても。

「行くぞ!」

そして、俺は目の前の魔女に飛び込んでいった。

第25話 終焉の魔女（後書き）

と言うことで、次回は終焉の魔女戦になりそうです。
この作品も残すところあと3話。
なんだか早いものです。

第26話 最後の戦い（前書き）

いよいよ訪れた最終戦。

果たして、その結末やいかに！？

と言うことで、第26話です。

第26話 最後の戦い

俺は終焉の魔女に向けて大剣で切り付ける。

「はぁ!!」

しかし、魔女には傷一つもない。

「なら!! 全てを滅す……断罪!!」

俺は剣に霊力を乗せて、力の限り魔女を切りつける。
そのあまりに高い威力に、煙が立ち込めた。

(これでどうだ!!)

「……………」

しかし、煙が晴れそこにあつたのは傷一つない魔女の姿だった。
その魔女はさつきから攻撃をしない。
それがさらに不気味さを増していた。
何か目的があつて隠しているのか、それとも攻撃できる手段がないのか。

おそらくは後者だろう。

だが、あまり悠長にはしていられない。
世界が崩壊するまで時間がないのだ。

残り時間は10分。

それまでに片を付けなければいけない。
しかも、このままでは俺の方が自滅をすることにもなりかねない。

(もつと高威力の大技……決めてみるか)

俺はそう考えると、大技を使うために詠唱を試みた。

「我は槍。すべてを貫く強固なる力。その力の前にすべては無力に等しくある」

俺の詠唱に合わせて剣の形が姿を変え、弓の形になった。そして霊力で生成された矢を引く。

「全てを滅せ！ 暴食の竜よ！」

そして俺は、矢を射た。

俺から放たれた矢はまっすぐ終焉の魔女へと向かって行く。

やがて、けたたましい音と光が俺達を襲った。

そのあまりにもすごい音に、俺は目を閉じる。

(やつにはちゃんと当たった。あの技を食らったものは二度とその姿を維持することが出来ないと言う、神界で恐れられている大技だ。これで終わったな)

俺の勝利の決意はさることながら、光が晴れたのを感じた俺はゆっくりと目を開ける。

しかしそこにあったのは、少々傷がついた魔女の姿だった。

「そんな……馬鹿な」

それを見た瞬間、俺の目の前の景色は一気に暗くなった。

(これだけ頑張ったんだ。もう、諦めても良いよな?)

俺が心の中でそう思いかけていた時だった。

『おはようございます』

『まどかおそーい』

俺の頭の中に、いつの日かのさやか達との会話が聞こえてきた。

『ほう？ だったら涉にでも書いて貰ったら？』

『え、ええ！？』

(あの時は、まさかこんなことになるなんて、思いもよらなかったよな)

俺は心の中で、そう呟く。

そんな時、俺の頭に新たな声が響き渡る。

『頑張つて涉君！』

『負けんじゃないよ！』

『頑張れ〜』

まどかや杏子達の応援が聞こえる。

それは前に聞いたものではない。

今、^{リアル}実際に言われている言葉なのだ。

(全く、俺も変わった奴と仲間になったもんだ)

俺は心の中で笑いながら呟くと、目の前が明るくなった。

気づけば、俺は地面に倒れていた。

「立って！ 涉ぐ！！」

「立ちなさい！ 出ないと許さないわよ！」

そして聞こえてきたのは、全員の言葉。

（そうだよ、俺はまだ……）

「負けてない！！」

俺の言葉に、反動するように剣が光り輝いた。

「我は歌おう。この世にあるものをすべて滅する歌を」

自然と口から出てくる言葉。

だが、その言葉に呼応して霊力が剣に集中する。

「さあ、奏でよう。全てを滅するレクリエムを！！」

そして、俺は魔女に肉厚すると、思いつき切りつけた。その瞬間、爆音を響かせながら、魔女は消滅していった。それは実にあっけない終りであった。

「やった！！ 勝ったよ！」

「さ、さすがね」

「ホントに無敵なんだな、神って」

まどかの喜ぶ声に、若干声が引きつっているマミさんに半分呆れている杏子の声が聞こえた。

「……………そうだ。みんな一緒にホールに行かない？ さやかちゃんもお母さんが心配してたから」

「そ、そうだね」

さやかが頷くと、それぞれが魔女のいた場所を去ろうとする。

「……………」

「どうしたの涉君？」

いつまでも動こうとしない俺を不審に思っただけ、まどかが俺に声をかけてきた。

だが、俺には彼女の言葉に答えることはできなかった。
なぜなら……………。

「え？」

誰の物かもわからない声が聞こえた。

「あ、あなた……………体が」

「す、透けてるぞ！？」

俺は、もう終わったのだから。

第26話 最後の戦い（後書き）

最後の最後で急展開。

今回は色々な意味で問題になりそうです。

それでは、次回でお会いしましょう。

第27話 サヨウナラ（前書き）

いよいよここまで来ました。
短めですが、ご了承ください。

第27話 サヨウナラ

「……………意外に早かったな」

「お、おい！ 一体どうなってんだよ！！」

杏子が俺に問いただしてくる。

俺は彼女たちに背を向けたまま、口を開いた。

「悪いことをしたから、強制的に帰還させられるのさ」

「そんな！ 涉は何も悪いことなんてしてないじゃない！！」

俺の言葉にさやかが反論した。

俺に若干内心で嬉しく思いながら答える。

「したさ。本来死すべき運命の者を何の対価もなしに、生き返らせてしまったのだからな」

「それは」

俺はマミさんの言葉を遮った。

「奇跡を起こすのはそれ相応の対価が必要になる。それをしなければ世界のバランスが崩れるからだ。そして俺は世界のバランスを崩してしまった。それはどう言い繕うと変わらない事だ」

「あなたは一体、この後どうなるの？」

暁美さんが静かに問いかけてくる。

それに俺は答えた。

「そうだな……………一度元の世界に戻ってそこで処罰が決まるだろう。」

まあ、決して生易しい処罰ではないことぐらい予想は出来るが」

そうでなければ、強制帰還はされないはずだ。

そうこうしているうちに、俺の体の感覚が消えかかっている。これが体が消えるという感覚らしい。

「まあ、このことに懲りたら無用な奇跡は望まないことだ。奇跡と言うのは何かしらかの代償があるのだからな」

俺は今後の事を考え、そう忠告することにした。

「良かったな暁美さんよ。まどかを救うことが出来て」
「……………ありがとう」

俺の言葉に、暁美さんの感謝の言葉が返ってきた。

(こりゃ、明日は雨かな?)

「お礼などいいさ。俺がやりたいからやったまでだ」

内心ではそう言いながら、そう言い返す。

その後、誰も何も言いださなかった。

気まずい雰囲気漂う。

「さて、いつまでも死者を見てないで、明日の方向を見る」

「渉君は死んでなんかないよ!!」

「死んでるんだよ。世界の意志になった時点で俺は一度死んで、再び蘇った」

まどかの叫びに俺は反論する。

「行こう、まどか」

「ッ!!! さやかちゃん?!」

俺の気持ちをくんでくれたのか、さやかはそう言ってまどかの手を掴んだ。

「この世界で、俺は色々な事を学んだ。非常に有意義な時間だった」

全員が去っていく背中に向けて俺は静かに呟く。

俺の脳裏によみがえるのは、今までの生活だった。

それは、普通の人間と同じような物であった。

そんな暮らしが出来たことのおかげで、俺の未練はもうない。

「だから、心置きなく帰れるよ」

体の感覚がほとんど消えているさなか、俺は最後に口を開く。

「この人間界では、別れの言葉はさようなら、らしいな。だったら、ありがとう……そしてさようなら」

その瞬間、俺の体の感覚は完全に消えた。

「渉君!!!」

誰かが俺を呼ぶ声を聞きながら。

第27話 サヨウナラ（後書き）

と言うことで、残すはあと1話。

この後どのような最終話を迎えるのか。
楽しみにして頂けると幸いです。

それでは、これにて失礼します。

エピソード その後……（前書き）

いよいよやってきました、最終回。

アニメとは違うエピソードをどうぞ

エピソード その後……

ワルプルギスの夜と終焉の魔女を倒してからもう二か月が経とうと
していました。

結局あの日の事はすべてスーパー何とかと言う、異常気象と言う事
で伝えられました。

かなりの被害が出ていたみたいですが、一月もすればほとんどの建
物が元に戻っていたので奇跡と言われていました。

そして今日もまた、私たちの一日が始まるうとしていました。

「おっはようー!」

「おはようさやかちゃん」

「おはようございます。美樹さん」

「おはよう」

待ち合わせの場所に遅れてきたさやかちゃんが、駆け足でこっちに
走ってきます。

それに返事をするのは私と仁美ちゃん、そしてほむらちゃんです。

「ごっめーん。遅れちゃった」

「あなた、また暑いからって言うんじゃないわよね?」

両手を合わせて謝るさやかちゃんにほむらちゃんが冷たく、呆れた
様子で言いました。

「だって、熱いものは熱いんだもん。私は熱いのが苦手なの」

「それは私達も同じよ。この暑い中で待たされる身にもなって」

「なにをー!」

喧嘩に発展しそうだったので、私たちは急いで二人の言い争いを止めました。

「二人ともストップ！」

「喧嘩はいけませんわ！」

私達が遮ると、二人は若干睨み合って離れました。

この二人、本当に相性が悪いです。

この間も些細なことで言い争いになって、喧嘩へと発展したことがあります。

「それにしても、明日から夏休みかあ」

「遊ぶのは構わないけど、夏休みの宿題が終わらないからって私たちに助けを求めるようなことだけはしないでよね」

あ、また二人の間に火花が。

「わ、分かってるわよ！」

「ならいいのだけど」

こう見えても二人は、仲はいいのです。

よく喧嘩はしたりしますけど……

「そうだ、夏休みになったらみんなであそこに行かない？」

「……そうだね。かれこれ一月も行ってないからね」

「あまり放っておくと罰が当たるかもね。主に美樹さんに」

ほむらちゃん言葉に、さやかちゃんが「なんであたし!？」と叫びます。

仁美ちゃんは意味が分かっている様子でした。

「あら、まどかさんに美樹さん。それと暁美さん。おはようございます」

「おはようございますマミさん」

「……………おはようございます。巴さん」

学園前でマミさん達と会いました。

「おはようございます、巴先輩」

仁美ちゃんは私たちつながりで、マミさんと知り合いになりました。

「うん。おはよう仁美さん」

マミさんの後ろにもう一人の人影がありました。

「ほら、あなたも挨拶をしなさい」

「わ、分かってるよ」

マミさんの言葉に、悪態をついて一歩前に出てきたのは、杏子ちゃんでした。

「おはよう、まどかにさやか、暁美さんに仁美」

「うん、おはよう杏子ちゃん」

「「おはよう杏子」」

「おはようございます。佐倉さん」

杏子ちゃんのあいさつに、私たちも返しました。

「そうだ、今日の放課後皆さんでどこかに行きませんか？」

「はい！」

「私も今日は用事がなかったので、行きまーす」

「まどかが行くなら私も」

「あたしも行く」

全員が賛成の意見を出す中、仁美ちゃんが申し訳なさそうに手を上げました。

「ごめんなさい。私、今日はお稽古が」

「あ、良いのよ。気にしないで」

こうして今日は仁美ちゃん以外の全員で、寄り道をする事になりました。

終業式が終わって、私たちは一面が雑草で生い茂る空き地に来ていました。

「ここに来るのも、何か月ぶりかしらね」

「約一月ほどだったと思いますよ」

マミさんの言葉に、さやかちゃんが答えます。

実はここ、渉君が住んでいた家があった場所なのです。

「結局、今どうしてるのかしらね？ 彼」

「もしかしたら、また人助けでもしてんじゃない？」

「私もそう思います」

マミさんの呟きに、杏子ちゃんが答え、それに私も賛同します。

「彼のおかげで、私達は生きることが出来た」

「渉君のおかげで、この街は元に戻ることが出来た」

「英雄……ね」

私の言葉は、風に乗って消えていきます。

あの後、さやかちゃんが戻ると、さやかちゃんの両親は、涙を流して喜んでいました。

そしてマミさんが復興した後に学校に行くと、全員が驚いていたそうです。

二人とも考えていた言い訳を言って、納得させたようでした。

そして、杏子ちゃんにもいいことが起きたのです。

復興した後、彼女の親戚の人が来て、杏子ちゃんを娘として引き取りたいと言われたらしいのです。

なので、今杏子ちゃんは親戚の人の家で暮らしています。でも、いちばん変わってしまったのは渉君です。学校に行つて、出席確認の時に、渉君の名前が呼ばれませんでした。その後もまるで彼がいなかったように進んで行ったのです。仁美ちゃんにそれとなく渉君の事を聞くと、

「小野 渉さん……ですか？ ごめんなさい、その人の事はよく知りませんわ」

と帰ってきた。

覚えているのは、魔法少女だった私達だけのようです。まるで存在自体がもたらなかったことになってしまったのです。そして、渉君自身の事も少しですが分かりました。

ある日の図書館で、私は無名の偉人について調べていました。幸い、調べるキーワードはいくつかありました。古代ヨーロッパ時代。

それが渉君自身で口にした言葉でした。なので、歴史書を手分けして読んでいました。

「みんな、これって渉君だよね？」

そんな時、私はようやくその項目を見つけました。

「どれどれ……ってほんとだ、あいつにそっくり」

「おいおい、ウソだろ」

みんなが、挿絵を見て驚いています。

その挿絵には銃のようなものを構えている青年が写っていましたが、どこことなく渉君にそっくりでした。

その本には、こう記されていました。

『数多の悪を挫いてきた無名の英雄。XX年に暗殺で死す』

たったそれだけでした。

渉君の事が乗っていたのは、わずか二行だけでした。

「こ、これって見滝原市の地図じゃないか!？」

『死後、異国の日本のちに埋没』と言う文面と共に掲載されていた地形図は、確かに見滝原市の地形と似ていました。

「行ってみる?」

誰かが呟いた言葉に、全員が無言で頷きました。

その後地形図をコピーしてそれを頼りに歩き回ることに時間。

ようやくたどり着いたのは……草が生い茂る空き地だったので。

「ここって……」

「渉の家があった場所だよ」

その言葉に、私たちは驚きを隠せませんでした。

渉君の遺骨はここどこかに埋められているのでしょうか。

「あれ、何かしら？」

そんな時、マミさんが何かを見つけたのか雑草の中に入って行きま
した。

「な、何かあるのかよそこに」

杏子ちゃんの手を聞いて、マミさんは雑草を押し分けるとそ
こにあったのは石碑でした。

「これって……」

「うん、そうよ。渉君の石碑よ」

その石碑はぼろぼろになっていて見ていてとても悲しくなりました。
私達はその石碑の前で手を合わせました。

「さて、そろそろ帰りましょう」

「………そうだね」

「もう夕方だしな」

マミさんの言葉に、全員が頷いた。

『涉（君）、ありがとう！』

私達は一緒に石碑の前でお辞儀をしながらお礼を言いました。

『お礼を言うのもいいが、早く帰れよ』

その瞬間、風に乗って涉君の声が聞こえたような気がしました。

「……………ふふ」

「あはは」

私達は顔を見合わせて笑うと、また来ると心に誓って言われた通りに早く帰ることにしました。

歴史上に名前を残さなかった偉人。

例え歴史にも、人々の記憶にも残らなかったとしても、私たちがずっと覚えていると思います。

私達を導いて、助けてくれて町を守ってくれた英雄……小野 渉
と言っ少年の事を。

私達は絶対に忘れません。

F i n .

エピソード その後……（後書き）

と云うことで、完結いたしました。

ここまでこれたのは、一概に本作品を読んでくださった読者の皆様のおかげです。

本当にありがとうございました。

後書き 今後のことについて

改めて、初めての方は、初めまして。

それ以外の方はご無沙汰しております。

駄文の執筆者、TRです。

この度は、本作『魔法少女まどか マギカ〜革命を促す者〜』を読んで頂きありがとうございます。

これにて本作は完結となります。

とは言ったものの、いまだに不完全燃焼と言う心残りがあります。ですので、この場を借りてもう少しだけ続かせて頂こうと思います。

これより先は外伝や、幕間などの本篇では書くことのできなかった話を書いていこうと思います。

サブタイトルに『外伝』と言う明記がされていた場合は、一種のネタであり、本篇とは全く関係のない話です。

続いて『XX・5話』などと言った話数が記されている場合は、諸事情により本篇で書くことの出来なかった話となります。

本篇は完結しましたが、まだまだ幕間のほうは続いていく予定です。また、最後まで見てくださるといいことがあるかも？

おそらく外伝や幕間の数は10にも行かない可能性があります。完結までのしばらくの間読んで頂けると幸いです。

それでは改めまして、本作を読んで頂き本当にありがとうございます！

外伝 悲劇の報酬 (前) (前書き)

これはあくまでもEFです。

99%がネタであり、本篇とは何の関係もありません。

外伝 悲劇の報酬 (前)

それは、俺が体験した正直話したくもない思い出だ。しかし、これを話さなければ俺は前には進めない。なので、今あの悲劇の事件を話そうと思う。

それはとっても暑い夏のある日。

俺とまどかにさやか、そして杏子にマミさんになぜかキュウベえは
暁美さんの家を訪ねていた。

「で、これはどういう事かしら？」

しかし当の本人は顔をしかめてこつちを睨んでいるが。

「ごめんね、ほむらちゃん」

「まあまあ、そう怒らない怒らない」

「心が狭いと思われるぞ」

そんな暁美さんに、まどか達が必死に宥める。

「……………まあいいわ。大したおもてなしは出来ないけれど」
「大丈夫だって、おもてなし用の物はこっちで用意してるし」

そう言っつてさやかが持ち上げたのは、本日の目玉商品だ。

「……………何よそれ？」

「何っつて、ケーキに決まっつてんじゃん。あんたそんな事も知らねえのか？」

呆然とした表情を浮かべる暁美さんに、杏子が呆れた様子で問いかけた。

「そんなことは知ってるわ。どうしてケーキだけなのかと聞いているのよ」

「それは、渉君へのお礼っつていう事で……………」

そう、実はこのケーキは前にまどかと取引をした際の報酬なのだ。

「それで、みんなも一緒にと言うことになって、ケーキが1ホールになったの」

いや、マミさん。

貴方最初これを2ホール買おうとしてませんでしたか？

「だって、渉君は神様だから1ほーるだと不満足ではと思って」
「心を読むな！！」

そんな俺達のやり取りを見ていた暁美さんがため息を一つ。

「外で騒がないで。中に入って頂戴」

「お邪魔します」

「お邪魔するよ」

「「お邪魔します」「」

こうして俺達は暁美さんの家へとお邪魔した。

「全員お茶でいいわね？」

「大丈夫！！」

暁美さんの問いかけに全員が答えた。

約一人が「紅茶の方が良かったのだけど」とつぶやいていた気がしたのだが、それは聞かなかったことにした。

「あゝ暁美さん。お茶、一人分追加」

「どういうこと？」

俺の突然の追加要求に暁美さんが怪訝した様子で問いかけてきた。

「……………」
「どういう事だ」

「なるほどね」

俺の視線の先を辿った暁美さんが納得したようにつぶやいた。
俺の視線の先にあつたのは……………

「あれって……………」

「魔女!？」

そう、魔女だった。

しかも可愛らしい人形のような姿をした。
ちなみに名前はシャルロットだ。

何でもマミさんを救った時の魔女らしい。

「なんでここに魔女がいるんだよ!!!」

「あゝ、それはだな簡単に言つと、俺の使い魔のようなものになつたからだと思つ」

俺は頬を掻きながら説明した。

いや、そもそも使い魔と言う表記は正しいのか?

俺は神だぞ?

そりゃ確かに俺は墮天使だと自負はしているが。

「ほ、本当に何でもアリだな。お前は」

「あ、あははは」

そんな事を話していると、暁美さんが赤い顔をして戻ってきた。

「涉、神剣を貸してくれるかしら?」

「は? 別に構わないんだが、何に使う気だ?」

突然の神剣の要求に俺は問いかけながら神剣を具現化する。

「その……ケーキを切り分けるために」

「はあ！？ あんた包丁とかはないのかよ?!」

俺の驚いたような言葉に、暁美さんがこくと頷く。

まさかの事態だ。

いや、普通はあるはずなんだが。

「暁美さん、つかぬ事を聞くが、あなたいつも何を食べてる？」

「え？ 主に健康食品やサプリメント」

「それはいかん！ 色々ダメだ!!」

暁美さんの答えに、俺は思わず叫んでいた。

「食事！ それは神が与えた極上の時間!!! そんな最高の一時間が健康食品なんてダメだ!! 暁美さんにはこの至福の時間を俺がみっちり教える!!」

「わ、渉君。別人みたい」

俺の言葉を聞いている間、まどか達はそんな事を言っていたそう。

「それじゃ、俺と暁美さんとでケーキを切り分けるから、他のみんなは食器の用意と化をお願い」

『分かった（よ）（わ）』

そして俺は全員に指示を出して、それぞれの役割を果たすためにリビングを離れた。

それからしばらくして、テーブルの上に目玉商品のケーキを置いて、俺と暁美さんとで外の方に箱を捨てに

その時、ケーキの前に、一つの”影”があったそう。

そして、俺達がリビングに戻った時、目の前に広がっていた光景は

……

「えええええ!!?」

「な、な、なッ!!?」

「ケーキが」

「ない!？」

何も無い”お皿”だった。

外伝 悲劇の報酬 (前) (後書き)

突如消えたケーキ。

一体誰の仕業なのか!?

そして始まる争い。

後篇に続く。

外伝 悲劇の報酬 (後) (前書き)

続きです。

ケーキを食べた者はいつたい……

外伝 悲劇の報酬 (後)

「えええええ!!?」

「な、な、なッ!!?」

「ケーキが」

「ない!？」

俺達は、取り分けてお皿の上に置いたはずのケーキが無くなったお皿を見て驚いていた。

「一体誰が……」

「さやか、あんたじゃないのか？」

「何を言ってるのよ!! 私は今までカップを探していたよ!!
証人はまどかよ」

杏子の言葉に、さやかが反論する。

そしていきなり名前を言われたまどかは慌てながらも、頷いていた。

「だ、だったら杏子はどうなのよ! 杏子は前からお菓子とかを食
べまくってたじゃない」

「あ、あたしはそこら辺を歩いただけだ。途中で涉たちに会っ
た」

さやかの言葉に杏子が反論する。

「ああ、確かに途中で見かけたな」

俺は少し前の事を思い返しながら頷いた。

外にごみを捨てに行こうとした時の事なので、よく覚えていた。

「だったらママの野郎はどうなんだよ！！ いつもは良い子ちゃんぶっているけど、本性がどうなのかは誰も知らねえだろ?!」
「そ、そんな……ひどい」

今日この言葉に、ママさんは明らかにショックを受けた様子でうずくまってしまった。

「おいおい、さすがに言い過ぎだよ」

「そう言う事はどうなんだよ！ ケーキ好きの涉だったらやりかねない」

慌てて仲裁に入った俺に疑惑の目が向けられた。

「おいおい。さすがに俺でもホールは食べないって」
「だとしたら……」

俺達が見たのはテーブルの上で鎮座しているキュウベえだった。

「あんた？ あたし達のケーキをつまみ食いしたのは？」
「僕は知らないね。でも食物が無くなっただけでここまで騒ぐ君達
が、わけわかんないよ」

キュウベえはそう言うのとテーブルから飛び降りた。

「そう言えば、魔女は見たよ」
「魔女？ それって……」

キュウベえの言葉にその場にいた全員の視線が二人に注がれる。

「わ、私は魔女じゃないよ!？」
「誰が魔女だ!！」

さやかと杏子だ。

「どうすりゃいいんだ? これ」

目の前でいがみ合う二人と、それを取り囲む氷点下の雰囲気、俺が頭を抱えた時だった。

「ん?」

「どうしたの? 渉君」

俺の服を控えめに引つ張るものがいた。

「いや、シャルロツテが……………」

『……………』

俺の言葉に、全員がシャルロツテの方を見遣る。

「そう言えば、これって……………」

「元々は魔女だったよな」

杏子はゆっくりとシャルロツテに近づくが、何かを感じ取ったのか後ずさりしていた。

「はいはい、お前らも怖がらせない。で、シャルロツテ。お前ここにあったケーキ食べた?」

俺は、二人を止めると、シャルロツテに優しく尋ねた。

するとシャルロッテは潔く頷いた。

「……………」

それを見た全員が固まった。

(なんで気づかなかったんだ)

俺は頭を抱えた。

シャルロッテはお菓子などを好んでいた。

だとすれば、目の前にケーキがあればそれを食べる可能性はあった。

俺は頭を抱えながら、シャルロッテを体の中に戻した。

おそらく当分は外には出さないだろうなと思いつながら。

「と言うことは、シャルロッテが犯人だけど、使い魔である以上涉も悪いことになるよね」

「……………」

俺は嫌な予感がした。

「それじゃあ、渉君に責任を取ってもらおうね」

「……………のオオオオオ!!!」

こうして、俺はなぜか同じケーキを2ホールも買わされた。これが、俺が体験した悲劇の事件だった。

外伝 悲劇の報酬 (後) (後書き)

と言うことで、外伝でした。

次回はサイドストーリーです。

0話 始まりは意外なきっかけ。(前書き)

ようやくのサイドストーリー

今回は涉が世界の意志になるときの様子です。

0話 始まりは意外なきっかけ。

「くたばれ、この裏切り者!!」

「悪魔!!」

「鬼!!」

……それは今まで俺に浴びせられた罵声のほんの一部だ。
人に恨まれることはあれど、褒められたり称えられたりすることなどまずなかった。

何処をどう間違えたのか。

そんなことはどうでもいい。

考えるまでもないことだ。

そして罵声を言われ続けた俺は何者かによって殺された。

所謂暗殺と言うものだ。

不思議と俺は誰かを恨むと言う心はなかった。

逆に納得していた。

自分は殺されて当然だと。

それ相応の事をしてきたのだ。

最初は数字の計算利益が多い方を選択して、友を殺した。

他にも、人質となつている人を犯人と共に殺した事もあった。

一人が嫌で始めたことが、何時しか偽善者へとなっていた。

俺は行き先は地獄だと思いながら、意識を手放した。

しかし、世界は本当に残酷だ。

「初めましてじゃな。無銘の偉人よ」

「どういう事だ？　これは」

俺の前にいるのは老人だった

しかし、その老人から放たれる威圧感、数多の死闘を乗り越えた俺ですら震えるほどだった。

「そう睨まないでくれるかのう？」

「……………」

俺は無言で目を閉じた。

「まずは自己紹介からじゃ。わしの名前はノヴァ……………この世界を統治する三神だ」

「は？」

俺は思わず啞然としてしまった。

なぜなら、俺の目の前に突然神と名乗るものがあるのだ。

（頭でもおかしいのではないか？）

「失礼じゃな。わしはこれでもまだまだ現役じゃぞい」

「なッ！」

俺は自分の心の声が目の前ん老人に聞こえたことに驚きを隠せなかった。

「じゃから言ってるはずじゃ。わしはこの世界を統治する三神の創造の神じゃと」

「……………オーケー、百歩譲ってあんたが神だとしよう。ここはどこだ？　そしてなぜおれがここにいる？」

俺は、神と名乗る老人を問いただす。

「ここは世界の原点じゃ。ここにいれば色々な世界に干渉することが出来る。まあ、むやみやたらに外部世界と干渉するのは禁止されているからの実質的には不可能じゃが」

老人はそう言いながら一人笑っていた。

「して、なぜそなたがここにおるかじゃが……………そなたは非常に運が良い」

「何が運が良いのだ？」

俺は一人で笑う老人に苛立ちを露わにしながら尋ねた。

「そなたは、この世界を統括する三神の一人、世界の意志として選ばれたのじゃよ！」

「は？」

俺は、目の前の人物のいう事が全く理解できなかった。

「じゃから、世界を統治する三神の、世界の意志として選ばれたのじゃー！」

「ちよつと待て、その世界の意志とは何だ？　第一俺は世界の意志とか神とかふさわしくはない」

俺は目の前にいる老人にそう告げた。

「知っておる。その上でそなたを選んだのだ。そなたの生き様は最悪なものだ、場合によっては地獄に落ちても不思議ではない。だが、そなたには反面教師として、同じ過ちをするものが出ぬように導くことも可能じゃろう」

「……………なるほどな」

俺はようやく理解した。

もしこの世界に英雄と言ふ言葉が存在するなら、俺は反英雄だ。そして、ここでは墮天使と言った所か。

「納得してもらえた様じゃな。では、世界の意志について説明する
としようかの」

こうして俺は、老人から世界の意志の役割、能力について長々と説明された。

要約すれば、俺の役割は管轄する世界が常に正常に動くように監視し、場合によっては現地に赴き対処するとの物だった。

そして俺には神術と言う力が与えられた。

ともあれ、これが俺と老人……ノヴァとの出会いでもあり、新たな始まりの時だった。

0・5話 任務(前書き)

今回もサイドストーリーです。

こうして第1話へと話は続いていくのでした。

0・5話 任務

世界の意志となってどのぐらい経ったのか……俺のいる世界は常に明るく時間間隔なんてものはとっくの当に失っていた。

「意志よ」

「何だ、ノヴァ」

いつものように真っ白な地面を見て、世界を見ている俺はノヴァの呼びかけに、視線を外した。

「また世界見物か」

「悪いか？」

俺の言葉に、ノヴァは「そうじゃないが」と歯切れの悪い答えをす
る。

「一応俺のやっているこの行為は、禁止事項ではあるのだがしつかりと役割をこなしていることから特別処置として許可されている。」

「仕方あるまい。こうでもしなければ退屈なのだ」

何も変化しないこの世界に俺は飽きていたのだ。

いや、逆に反吐が出るほど嫌だった。

「退屈……か。ならばちょうどよい、そなたに特別任務だ」

「任務とな？」

俺はノヴァの言う任務に多少の興味を持ち問いかけた。

「ああ、とある世界で不自然な時間経過をしておるのじゃ。その世界は……」

そう言つてノヴァは何もないところに、写真のような映像を映し出す。

この光景もいつもの光景となつていた。

もう何も驚かないぞ。

そしてその映像にはのどかな自然や、そびえ立つビルや工場などの風景が映っていた。

「土地の名称は、見滝原市。世界コードはE - 00004じゃ。ちようどそなたの出身世界じゃな」

「何だと!？」

俺は驚きのあまり大声で叫んでしまった。

そんな俺を咎めるような目で見た。

「……すみません」

「続けるぞ?」

俺は静かにノヴァからの説明を聞いた。

何でもこの世界は観測の結果数回は一定期間内を永遠に繰り返しているらしい。

「確かに、これは以上ですね。因果律も複雑ですし……何だかの外的要因によるものですね」

「そうじゃ。よつてそなたは、この世界に赴き原因の追究、そして事態の解決に導くことを命ずる」

ノヴァはそう言つと、俺の方に「やってくれるな?」と目で問いか

けてきたので、俺は無言で頷いて答えた。

「それと、一つだけ追加事項じゃ」

「何でしょう？」

出る準備を始めた俺に、ノヴァが突然切り出してくる。

「この問題が解決されずに、再び世界の時間軸が戻されるようであれば申し訳ないが、この世界は”破棄”する」

「…………… 全力で解決に当たります」

ノヴァの言う”破棄”とは、世界を滅ぼすことだ。

その世界が存在することにより、周りの世界のバランスが崩れることがあるからだ。

それを防ぐために、問題のある世界自体を滅ぼすのだ。

曲がりなりにも”俺”と言う無銘の偉人が生きた証のある世界だ。

そうやすやすと滅ぼさせはしない。

「それと、その世界に赴くに当たり関係の高そうな人物の情報と、そなたについての説明を行う」

そう言っただけ渡されたのは3人の顔写真だった。

「名前は不明じゃが、可能な限り接触しておくといじやろう」

どうやらこの三人がキーパーソンらしい。

「次にそなたについての情報じゃ。この世界の方にこの通りに登録してある」

俺は手渡された用紙を見る。

世界の意志の基本情報

名前：小野おの 涉わたる

年齢：15歳

所属：見滝原市内の学校

「小野、涉……」

「それがこの世界でのそなたの名前じゃ。向こうではそう名乗るとよい。そして家も用意しておいた。その紙に書かれている通りに行くとよい」

一通り説明を終えたのが、ノヴァは何も話さなくなった。そのうちに、俺は出向の準備が整った。

「それでは、世界の意志、小野涉。行ってまいります」

「うむ、健闘を祈る」

俺は目の前に形成された渦巻の空間に身を投じた。

「……………ここが、その世界か」

降り立った世界は、人気のない場所だった。
だが、久しぶりに感じる風や太陽は非常に懐かしく、そして嬉しい
物でもあった。

「さて、拠点地に向かうとしようか」

そして、俺は拠点地へと向かうのであった。
この時、俺はまさかその後には壮絶な物語になるなど思いもしていな
かった。

0・5話 任務（後書き）

次回は久々の幕間です。

とはいっても皆さんが読みたい（かもしれない）シチュエーションの話になります。

外伝 デート（ほむら編）（前書き）

と言うことで、誰も求めてないかもしれませんが、デート編です。

外伝 デート（ほむら編）

とある休日、俺は駅前である人物と待ち合わせをしていた。

「ごめん、待った？」

「いんや、ちつとも待ってないぞ」

その人物とは暁美ほむらだ。

彼女とは少し前までは色々と敵対していたが、今ではこうして和解している。

そんな彼女は、いつもの姿からは想像もできないおしゃれな服を着ていた。

「それじゃ、行くか」

「う、うん」

暁美さんはなぜか顔を赤くしながら俺の腕に抱き着く。

（恥ずかしいのならやらなきゃいいのに）

心の中ではそう思っても口には出さない。

そして、俺達は目的地のショッピングセンターへと向かった。

「そ、それで今日は何を買うのかしら？」

「何って、前に説明しただろ？ 包丁とか鍋とかそういうのを買うって」

俺はこの間の惨状を思い出した。

前に家に尋ねた時包丁やら鍋などが全くなかったのだ。

それは色々な意味でまずいとのこと、今日のこれを設けたのだ。

「鍋はこれとこれでいいかな？」

「そ、そうね」

「包丁とか、どれがいい？」

「渉が選んで頂戴」

先ほどからだが、彼女は受け答えが適当な気がする。まさかとは思うが、料理に興味がないのだろうか？

「家事ぐらいできないと、良いお嫁さんになれないぞ」

「ッ！！！？」

俺のボヤキが聞こえたのか、暁美さんが固まった。

（あ、怒らせたかな？）

俺は少々嫌な予感がして逃げの姿勢に入った。

「渉！」

「は、はい！！」

突然俺の名前が呼ばれたので、俺は直立不動で返事をした。

「料理の本もお願い」

「へ？」

暁美さんの言葉に、俺は固まった。

「これで終わりだな」

「そ、そうね」

ショッピングを終えた俺と暁美さんは、喫茶店で一息ついていた。

「それにしても、よくそんなに買うよな」

俺は暁美さんの横にある袋を凝視しながら呟いた。

袋の中には料理本総勢25冊が入っていた。

ちなみにこれらの購入代金は会計の際に洗脳してお金を支払ったように思い込ませているので、実質的出費は0だ。

このお店は良いことがあるだろう。

……たぶんではあるが。

「それにしても、暁美さんが料理に興味を持つなんて意外だったな」

「……………ほむら」

俺の言葉に、暁美さんは不服そうな表情をしながら呟く。

「はい？」

「私の事はほむらでいいわ。私だって涉って呼んでるんだから」

曉美さん……もといほむらの提案に俺は乗ることにした。
もとより、さん付けで呼ぶのがちょっと嫌だったただけだが。

「……分かったよ、ほむら」
「……………」

名前で呼ぶと顔を赤くするほむら。

と言つより、恥ずかしいのなら言わなきゃいいのに……。

「それじゃ、そろそろ帰るか」

「そ、そうね。そうしましょう」

そして、俺達は喫茶店を後にした。

ほむらを家まで送って行く途中、突然彼女が声をかけた。

「ね、ねえ、渉」

「ん？ どうした」

俺はほむらに用件を尋ねた。

「その、私が料理を作ったら……私の料理を食べてくれる？」
「あ、ああ、もちろんだ」

ほむらが上目づかいでこつちを見ながら聞いてきたので、若干ドモリながら頷いて答えた。
こつして、俺とほむらのお使いは終わったのだった。

おまけ
悪魔のXXXX

「はい、涉」
「……………なにこれ？」

とある日の昼休み。
ほむらが突然俺の机に置いた物体を俺は間違っただけだと思いつつ欲しいと思いつつ聞いた。

「お弁当よ。涉のために作ってきたの」
「そ、そうか。あ、ありがとうございます」

俺の目の前にあるのは、ここでいうのもあれな奇妙な緑と赤の物体だった。

（と言うよりこれは食べられるのか!？）

匂いも食べ物ではないと告げているが。

「さあ、食べて」

「あ、ああ。いただきます」

俺は周りの友人たちが逃げていくのを恨めしく見ながら、料理を口にした。

「おやおや、何のようじゃ?」

「あの料理は……テロだ」

「ほ、ほ、ほ。好かれるのも大変じゃの〜」

なぜか世界の原点にいるノヴァとそんな話をしたような気がした。
この日、ほむらの料理＝兵器と言う図式が俺達の中で形成されたの
は言うまでもない。

ちなみにその後、孤軍奮闘するほむらは完成するたびに、俺に試食
をさせてくれた。

そのおかげで俺はもう150回ほど端にかけている。
しかし料理の腕はちっとも上がらないのはなぜだろう？
その答えは……

「今日は隠し味にハイパーシオンを……」

彼女しか知らない。

外伝 デート（ほむら編）（後書き）

誰か、この駄作者に温かい感想を！

と言うことで、次回は外伝かサイドストーリーになります。

外伝 デート(マミ編) (前書き)

今回もデート編です。

外伝 デート(マミ編)

さて、突然だが、俺は今おそらく一番のなぞに遭遇している。

「……………あの」

「何かしら？ 渉君」

俺の言葉に首を傾げるマミさん。

「なぜにあなたは俺の腕を掴んでいるんですか？」

「なぜって掴みたいからよ？ 暁美さんだけデートに誘って私をのけ者なんてないよね？」

なぜだろう？

マミさんの万弁の笑みが一番恐ろしく感じるのは。

(きっと俺の心が穢れてるからだ！ きっとそう)

「それで、どこに行くんですか？」

「渉君にももう少し紅茶の魅力を知ってもらうためにティーショップよ」

俺の疑問に、マミさんはそう答えてくれた。

だが、俺紅茶は嫌いではない。どちらかと言えば好きな方だ。

俺は静かに彼女に引っ張られるがまま、ティーショップへと向かうのであった。

「何を買うんですか？」

「そうね……まずはティーカップを2、3個。後は紅茶の葉っぱね」
ティーショップに到着した俺達は、紅茶の道具を選んでいた。
そう言えば俺の家には、こういったものが一切なかったようにも思える。

まあ、あの時にはそんな必要性なんかもなかったしな

「渉君、これとこれ、どっちがいいかしら？」

「えっと……これで」

俺は目の前に差し出された缶を見て、適当に選んだ。
ちなみにこの時の会計も、前のように洗脳で払ったように思わせることにした。

ママさんが非常に申し訳なさそうに店員さんを見ていた。
きっと何かいいことがあるよ、たぶん。

（俺も、何かバイトとやらを始めてみるか）

そんな事を思いながら俺達は帰路についた。

「今日はありがとうございました」

「うっん、気にしないでいいのよ。私は渉君とお出かけをしたかっただけなんだから」

その時のマミさんの笑顔は、前のような恐ろしさもなく、只々光り輝いていたのがとても印象深かった。

おまけ マミさんの地獄レッスン

さて、紅茶の道具を勝手からと言うもの、俺にはある地獄までもが付いて来ていた。

そう、マミさんの紅茶の入れ方講座だ。

一見すると非常にいいことに見えるかもしれないが。

「った!」

「そこが違うのよ。良い? 紅茶と言うのはこうするのよ!」

スパルタなのだ。

今叩いたのは八工叩きという道具だ。

しかもこれ、地味に痛い。

「ちょっと、渉君、聞ってるの!」

「聞いてます…！」

例にもよってまどか達は全員が逃げていく始末だ。

「渉君…！…！」

「つぎやああ…！」

この地獄のようなレッスンは2週間にも及んだ。

外伝 デート(マミ編) (後書き)

次回はおそらくサイドストーリーになります。

それでは、これにて失礼します。

外伝 デート(杏子編) (前書き)

今回も引き続き外伝のデート編です。

そして今回も短いです

外伝 デート（杏子編）

えっと、今俺と杏子はゲームセンターと言う場所に来ている。
なぜかは俺にもよく分からない。

突然電話でここに来いと言われてきたのだ。
しかもなぜか彼女も腕を組んでくるし。

「お、これなんかいいかもしれない」

「……………これか」

そして彼女が向かい合っているのはUFOキャッチャーだった。
ちなみに景品はウサギのぬいぐるみだ。
彼女にもそう言う乙女な心もあるんだな。

「おい、あんたいまなんかものすごく失礼なこと考えてないか？」

「考えてるはずないだろ！」

俺は凶星をつかれたので慌てて否定した。
出ないととんでもない目に合うのが落ちだからだ。

「そ、そうだ！俺が取ってやるよ」

「そ、そうか……………まあ、そんなに取りたいんなら取らせてやる」

なぜかツンデレ風に言う杏子をしり目に、俺はコイン（バイト始め
ました）を入れてプレイする。

1回目……………失敗。

「……………まだまだ！」

2回目……同じく失敗。
折れそうな心を奮い立たせてさらに続ける。
その結果……

「取ったぞ」

「あ、ありがとう。だが、大丈夫か？」

「……………問題ない」

嘘だ。

このウサギのぬいぐるみを取るのに50回くらいはプレイした。
一回100円だから5000円の浪費が。
今月どうするんだよ。

「次はここだ」

その後、杏子に連れられてきたのはお菓子屋だった。
そこで色々なお菓子を（レアチーズケーキとかチーズタルト等々）
を購入した。

「なあ、本当に良かったのか？」

「良いと思う……………たぶん」

帰り道、杏子が不安そうに尋ねてきた。
理由とすれば、お菓子を買う際にお金がなかったので、軽く洗脳したことだろう。

しかもその後、全品無料セールとやらを行っていた。
ものすごく罪悪感がのしかかっていた。

（きっといいことがあるよ。きっと）

俺は心の中でお菓子屋さんの店主の人にそう言っていた。

結局この日の休日はこうして幕を閉じた。

と言うよりも、ここんところ毎週誰かと出かけてないか？

そんな事を思いながら………

俺は今日の前にある”とあるもの”の山に呆然としていた。

「これ何？」

「何ってお菓子だけど」

そう、それはお菓子だった。

量からして2、3週間はこれで食べて行けるのではないかと言っほ
どのだ。

「これをどうしろと？」

「いや、色々大変だろうと思ったから差し入れだよ」

「……………ありがとう」

俺は色々複雑な気持ちになりながら、杏子にお礼を言った。

ちなみに全部甘い系の物だった。

そして約一か月間、この甘さがトラウマになったのは、言うまでも
ない。

外伝 デート(まどか編)

休日の朝、俺はいつものごとく駅前の方に向かっていった。
時間は8時30分。

「あれ、待たせたか？」

「ううん。今来た所だよ」

待ち合わせ場所の駅前には、私服姿のまどかが立っていた。

そう、今日はまどかなのだ。

そのまどかの私服はピンクを基調とした上着に、青と白のチェック柄のスカートの服装だった。

「それじゃ、行くう」

俺は、まどかに急かされるように、電車に乗って隣町に向かった。

向かうは隣町にある遊園地だ。

ちなみにこれはまどかの要望だ。

「ねえ、渉君。あれに乗らない？」

遊園地に入るなり、まどかが俺にそう言って指差したのは……。

「え？あれって……『ジェットコースター』！？」

遊園地定番のジェットコースターだった。

ちなみに俺は、ジェットコースターには一度も乗ったことはない。

「そうだな。それじゃ、乗るか」

「うん！！」

でも俺も男だと、覚悟を決めてジェットコースターに乗る事にした。

この時にまどかが例のごとく腕をからめて歩くのは、微妙に謎だ。

「……」

「わ、渉君。大丈夫？」

そして、ジェットコースターに乗った後、俺はげんなりとしていた。

まどかもその様子を見て、心配そうに声を掛けてきた。
何があったかと言えば、上がったたり下がったり回ったりと繰り返しているうちに、酔ったのだ。

(ジェットコースターとは、ああにもおぞましいものだったのか)
俺は後悔するのと同時に、もう二度とジェットコースターには乗らないと、この時決めたのであった。

「それじゃ、次行くか？」

「うん！」

そして俺達は再び歩き出した。

「……………」

「ごめんね、渉君」

まどかが俺に謝ってくる。

「いや、良いんだ。偶々だったんだから」

俺は、笑顔でまどかにそう言った。
果たして今日は厄日なのだろうか？
あの後俺だけに悲劇が連発して起きた。
例えば……。

「ねえ、あれはどうか？」

「お化け屋敷か。ってまどかはこう言つの苦手じゃないのか？」

まどかが指差したお化け屋敷の看板を見て、俺はまどかに聞いた。

「だ、大丈夫だよ！絶対に怖がりません！！」

そんな強気のみどかを見て、安心した俺達が入ったら……。

「きゃあああああああ！！！！」

「ぐは！！」

まどかが怯えながら、俺に体を寄せて歩いていたのだが、お化けが出た途端まどかは、大きな悲鳴を上げ（しかも俺の耳元で）俺を突き飛ばして走って行った。

ちなみにその直後にも、何回か悲鳴が響き渡った。

気分を入れ直して、占いをやっている場所に行くよ

「あなたに死神が憑いていますよ」

などと言う恐ろしい事を言われた。

しかも、微妙に当たっていきそうな気がするから性質が悪い。

そして、極めつけがコーヒークップに乗った時だ。

「きゃははは！！ これって楽しいね」

「ああ、楽しいけどあまり回さないでくれ！！」

コーヒークップに乗った途端、まどかが大はしゃぎ始めて勢い良く回したため、俺はまた眼を回したのだ。

と言う事で俺は今げんなりしていたのだ。
しかも、もう夕方。

時間が経つのは本当に早い（まあほとんどが俺が回復するのに使ったがな）

「ねえ、今度はあれに乗りたいたんだけど、駄目かな？」

そう言ってまどかが指差した物は、観覧車だった。

「観覧車か、最後だし行こうか」

「うん！！」

そして、俺は観覧車に向けて歩き出した。

まさか観覧車が高速回転するわけじゃないよな？

俺は観覧車に向かう最中、そんな不安を感じていた。

「うわー、きれい」

観覧車に乗り、最上部に達するとまどかが感嘆の声を上げた。

確かに、夕日が沈みかけ空では夕焼けと、夜空が混ざっていた。

その時のまどかの姿は、まるでマリアを思わせるような美しさだった。

「今日は、本当に楽しかったね」

「そうだな」

観覧車から降りた俺達は、遊園地を後にして再び電車に乗り三滝原に向かっていた。

「あ、見て。流れ星」

「お、本当だ」

俺は上空に広がる星空を見ながら、今の幸せが長く続くように祈るのであった。

外伝 デート(まどか編) (後書き)

今回は、おまけはありません。

13・5話 自惚れるなよ？（前書き）

今回からサイドストーリーです。

今回の話は13話のさやかとの会話の跡と彼の自宅までの間の話です。

13・5話 自惚れるなよ？

「やあ、来たぞ恭介」

「ああ、君か涉」

俺は上条邸へと足を運んでいた。
全ては彼のバイオリンを聞くためだ。

「これは退院祝いだ。受け取れ」

「ありがとう」

中身はクラシックCDと譜面だったりするが、それはどうでもいい
だろう。

「さて、早速で悪いがお前のバイオリンを一度聞いてみたい。弾い
てくれるか？」

「もちろんだよ。逆に君に聞いて貰いたかった位さ」

俺の頼みごとに、恭介は嫌な顔一つせずには答えると、戸棚に置かれ
ているケースを開けてバイオリンを取り出した。
そしてそれを構えた。

「それでは……」

そして恭介はバイオリンを弾き始めた。

俺はその音色に耳を傾ける。

曲名は知らない。

そして彼はバイオリンを弾き終えた。

「どつだつた……かな？」
「話にならん」

俺は恭介に包み隠さずに感想を言った。

「お前のは演奏する音色に中身がない」
「中身？」

恭介は分からないのか素で聞き返してきた。

「つまりは心がこもってなくて技術だけだと言う事だ。心を込めて弾くんだ。お前にとって人の不幸や喜び、悲しみ怒りはすべて餌だ。精進すると良い」

「なるほど……ありがとね、涉」

俺の指摘に恭介は考え込むと、俺にお礼を言ってきた。

「別に礼を言われることはないさ。俺のやったことは余計な事だからな。まあ、参考にして貰えるのは有難いが」
「……今でも信じられないんだ」

恭介はバイオリンを見つめながら呟いた。

「何がだ？」
「動かないはずの腕が突然動くようになったんだよ。医者も奇跡だつて言っていた。ねえ、もしかして誰かが僕の腕が動く様に奇跡を起こしたのかな？」

恭介は俺に聞いてくる。

「そつだとしたらどうなる？」

「誰がそれを起こしたのかを教えてほしいんだ」

「それを知って何をする気だ？ お礼でもするのか？」

恭介の頼みごとに、俺はそう告げた。

「それはもちろんだよ。だってまたバイオリンを弾けるようになったんだから。お礼だって言うよ」

「なるほど。ならば、仮にその人がお前の事を心の底から好きだと思っていたとしよう。お前はそいつと付き合っつて結婚でもすると言うのか？」

「そ、それは……」

俺の鋭い指摘に恭介は答えるのをためらった。

「……… 自惚れるなよ？ 一人の人生を狂わせる代償を払って起きたお前の奇跡ならば、お前は己が人生をかけてそいつと付き合わなければ公平じゃないだろ」

「だったら、僕は何をすればいいんだ！」

恭介が半場喚くように俺に問いただしてきた。

「何もしなくていい。お前には唯一の取り柄であるバイオリンを弾くだけだ」

「そんなんでいいの？」

「言いに決まってる。そのバイオリンの音色で、お礼をすればいい」

不安げに聞いてきた恭介に、俺はそう伝えた。

「……… ありがとう。もう一つだけいい？」

「ホントに質問するのが好きだよな…なんだ？」

俺は苦笑いを浮かべながら尋ねた。

「僕の腕を動かせる奇跡を起こしたのって、まさかさや」

「さあな、俺は知らないし、仮に知っていたとしても答えないぞ。名前をいう事は、そいつにとっては最大の侮辱だろうからな」

俺は恭介の推測を遮ってそうつ得ると、立ち上がって出口であるドアの前に向かった。

「帰るのかい？」

「ああ、長居するのも悪いしな」

訪ねてくる恭介に俺はそう答えた。

「何も出来なくてごめんね」

「何、気にするな」

俺は恭介にそう答えるとそのままドアを出て玄関へと向かう。

「お前のバイオリンだが、さっき言ったのを直せば世界一のバイオリストになれるぞ」

「ありがとう」

「まあ、コンサートの約束はちゃんと守ってあげるからその時まで頑張るんだな」

俺は最後にそう告げて上条邸を後にした。

(ホントに鋭いやつだこと)

俺は内心で苦笑いを浮かべながらそう思っていた。
空は、ゆっくりと夜の闇が広がり始めていた。

第20・5話 「やじつていんなん」となるんだ？」（前書き）

再びのサイドストーリーです。

第20・5話 「どうしてこんなことになるんだ？」

ワルプルギスの夜が来るまであと数日。

早速だが、だれか俺の疑問に答えてくれ。

「どうしてこんなことになるんだ？」

一人でとぼとぼと道を歩く俺の手にはスーパーのレジ袋があった。

中身は食料品（お菓子）だ。

ちなみに反対の手にある紙袋の中身は、二人の少女の着替えやら服だったりする。

これを頼んだのは、二人の”元”魔法少女だ。

「ホントにやってくれるな、あの二人は」

まさか俺をパシリにするとは……

俺は、二人をどういびろうかと考えながら拠点地へと戻る俺であった。

「だから、それがおかしいんだって！」

「いや、あんたの方がおかしい！」

拠点地に戻った俺を出迎えたのは、さやかと杏子の口論だった。

「あ、おかえりなさい」

「ああ、ただいま……でこの状況はなんだ？」

俺は奥から出てきたママさんに、今の状況説明を頼むことにした。

「何だかわからないけどお菓子のことで言い合ってるみたい」

「はあ？」

俺は久々に首を傾げた。

と言うより何だよお菓子についてってどういう事だよ？

「「渉！」」

「な、何だよ」

首を傾げていると、二人が俺の真ん前に仁王立ちして大きな声で呼んできた。

俺はそれに若干たじろぎながら尋ねた。

「渉は洋菓子が好きだよね！」

「違うよな、和菓子だよな！」

二人して問いかけてくる言葉で、俺はようやく趣旨が分かった。要するに二人は和菓子と洋菓子の、どっちがいいかで言い争っていたのだ。

「くだらん」

俺は二人の質問をそう一刀両断した。
と言うより本当にくだらない。

「そんな低レベルな事で言い争う暇があったら少しは鍛錬でもしろ。
ワルプルギスの夜までもうそう日はないんだぞ」

「そんなことは分かってるよ」

俺の言葉に、さやかは反論する。

「あ、それとこれ頼まれてたものだ。言っておくが俺は便利屋じゃないからな？」

「あ、ありがとう」

「悪いね」

俺はレジ袋を杏子に、紙袋をさやかに渡した。

「でも、これ全部どうやって持ってきたんだよ」

「今日このについては店員を洗脳して払ったように思わせて、さやか
かについては家にいる人全員を眠らせて侵入……と言った所かな」

杏子の問いかけに答えると二人の表情がこわばった。

「ん？どうした？」

「それって犯罪じゃない!!」

さやかが叫んだ。

言いたいことはよく分かる。

「まあ、少しばかりの横暴は許してほしいかな。一応許容範囲内で

やっってるんだから」

俺はそう言っと、奥の方に向かって行った。

「ワルプルギスの夜。必ず終わらせて見せる」

俺は窓から差し込む月の光を眺めながら決意を固めた。

俺の後ろに二人がいるがそんなことは関係ない。

どちらにせよ、すべてはあと数日で終わる。

「それまでは持つてくれよ？」

こうしてまた一日が過ぎて行った。

True エピソード 約束（前書き）

いよいよ訪れました真の最終回。
衝撃の結末をご覧ください。

True エピソード 約束

それは全てが終わった後の物語。

場所はどこかのコンサート会場を彷彿とさせる講堂。

そこにまどか達の姿があった。

「すごいよね、コンサートに出れるって」

「うん。恭介あれから猛練習していたからね、出れない方がおかしいよ」

まどかの言葉に笑顔で返すさやか。

「ところで、だ」

そんな中口を開いたのは、さよかの隣に座る杏子からだった。

「どうしたのよ？」

「なんであたし達までが付き合わされてるんだ？」

「まあまあ、佐倉さんも落ち着いて」

「そうよ、もうじき始まるわ。そんな時に席を立つのは失礼よ」

不平を言う杏子に対し、マミとほむらは必至に宥めていた。

ほむらの場合は宥めているかは微妙なところであったが。

「わあっ たよ」

彼女も諦めたのか大人しく座っていた。

「あ、始まったよ」

そんな中、まどかは壇上に現れたバイオリンを片手にタキシードを着た少年、上条恭介を見つけると小声で伝えた。
今回のバイオリンのコンクールだ。
演奏者は15人、すでに14人が演奏を済ませていた。
つまり彼は最後の演奏者と言う事だ。

「15番、上条恭介です。課題曲は、アヴェ・マリア」

静かに、しかし周りに聞こえるようにはっきりと伝えると、バイオリンの演奏を始めた。
それと同時に心地よい音色が講堂を満たす。

「これは……」

「中々ね……」

帰ろうとしていた杏子や興味なさげにしていたほむらも、その演奏に舌を巻いていた。

「聴いたり見ていたりするだけでいいのか？ さやか」

「……うん。これでいいよ。私はただ、もう一度アイツの演奏が聴きたかっただけなんだ。あのバイオリンを、もっともっと大勢の人に聴いてほしかった」

突然小声で問いかける人物にさやかは頷いて答えた。

「ほう？」

「それを思い出せただけで、十分だよ。もう何の後悔もない」

その人物はさやかの言葉を聞いて興味ありげに呟く。

「それは本当なのか？」

「まあ、そりゃ……ちよっぴり悔しいけどさ。仁美じゃ仕方ないや。恭介にはもったいないくらいいい子だし……幸せになって……くれるよね」

古傷をえぐるような問いかけに、さやかは静かに答えた。

しかし頬を伝う雫は、それが本心ではない事を伝えていた。

「……まあ、それだけ立派に言えるのであれば、やっと愚か者がら馬鹿者になったと言っ事か」

「うるさいよ！……って、あれ？」

その人物のおちよくる声にさやかは首を傾げた。

「今のってまどか達？」

「ち、違うよ！？」

さやかの問いかけに慌ててまどかが否定する。

「でも、今の声って……」

さやかの疑問を打ち消すように再びその人物は声を上げる。

「今は演奏中だ。静かにしたらどうだ？」

「す、すみません……って、渉君！？」

まどかが声のした方を見ると、そこにはまるで神社の人が着るような袴を着ている渉の姿があった。

まどかの言葉に、渉は無言で『静かにしろ』と言っていた。

そしてまどか達は演奏を聴くのであった。

コンクールが終わり、会場を出た渉は感慨深そうに空を眺めていた。

「ふう、優勝したかあいつ」

「渉、恭介のこと知ってたの!？」

渉の言葉に、さやかが問いかける。

「ああ、お前がその命をかけて奇跡を起こしたいと思う相手がどんな奴かと気になってな。まあ、何度か会ううちにあいつに色々演奏者の心構えとかをアドバイスをしていた」

「そ、そうだったんだ」

渉の言葉に、さやかは頷いて納得した。

「どうして渉君は、ここに来れたのかしら？」

「……………あいつと約束したのだ。」 お前がコンクールかなんかに出ることが出来たら見に行つてやる”とな。その約束を守れないようじゃ、神以前に人として最低だからね」

渉の答えに、全員が相変わらずねと思いながら苦笑いを浮かべた。

「渉」

「同時に呼んだりして、どうしたんだ？ さやかにほむら」

さやかとほむらに同時に呼ばれた渉は、困惑気味に用件を聞いた。

「貴方からでいいわ」

「ありがとう」

用件を話す順番を譲ったほむらに、さやかは軽くお礼を言うと渉を見た。

「前、渉にひどいことを言った。いくら渉が無銘の偉人だと知らなかったとしても、あんなことを言って本当にごめん！」

酷いことと言うのは、渉がさやかを呼び止めた時の一言『私はあんな奴のような馬鹿なことにはしない。打算で友達を殺すなんてそれこそ生きる価値ないよ。もしなるとしても私はちゃんとした形で偉人になる』という一言だ。

「ああ、あれか。本当の事だから謝らんでいい。生きる価値のない屑野郎なことぐらい、自分でもわかってる」

渉の自分を蔑む言葉に、さやか達の表情が暗くなった。

「勘違いするな。何も俺はお前たちに同情してほしいのではない。お前たち如きに同情されるくらいなら、まだ見下らされていた方がましだ。俺はただこういう愚か者がいたと言う事を知って欲しかっただけだ」

「渉……」

渉の言葉に、それ以上何も言うことが出来なくなった。それは渉の強い意志によるものであった。

「それで、あんたは何だ？」

「その、あの時は銃を撃つたりしてごめんなさい」

「あれものすごく痛かったんだからな!？」

ほむらの謝罪の言葉で思い出したのか、渉は何時になく大きな声でツッコむ風に答えた。
どうやら本気で痛かったらしい。

「まあ、ここに来たのは恭介との約束を果たすのと、お前たちに最期の別れを言うためさ」

「え？」

「どういうことだ?! 最期の別れて」

渉の言葉にまどか達は言葉を失い杏子は大声で渉を問い詰めた。

「そのままの意味だ。天界の方で、僕に対する処分が決定したんだ」
「処分？」

渉の答えに、まどかは疑問に思ったのか聞き返した。

「そう。本来死ぬべきものを生かしたり、因果律操作を多用したりして世界その物に多大な負荷をかけたんだ。それに対する僕の処罰が決まったのさ」

「そ、それってもしかして……」

「たぶんお前の予想通りだと思うぞ。人格の抹消……それが僕に下

った罰さ」

渉の説明に、いやな予感を感じたまどかの予想を渉は肯定した。

「そ、そんな」

「酷いよ！ 渉君は、何も悪いことをしてないよ！ 私たちを救ってくれたじゃない！！」

「それが世界と言うものだ。何事も理不尽で不条理の塊だ。こうしてここに来れたのは、かなり無理を言ってお願いをしたからであるんだが」

涙ながらに異論を唱えるまどかに、渉は言い聞かせるように口を開いた。

「ねえ、ここに一生いるのはどうかしら？」

「悪いがそれは出来ない。僕はこれでも世界の意志だし覚悟ぐらいはできてたさ」

ママの提案に渉は首を横に振りながら拒否した。

「それに、俺と言う人格が消えても、俺の志はこいつの中で生き続ける」

「それって、最後の魔女の時の剣だよな？」

渉が取りだしたのは紅く優雅に輝く一つの剣だった。

「俺の後継者はこいつを手にするだろう。その時は俺はこいつと共にその後継者を見て行くんだ。だから俺には全く持って悔いはない……それにここに残ったらあんたらにどんな影響が出るかは分からないしね」

渉の強い決意に、誰も反論することが出来なかった。

「皆さん！ここにいらしたのですね」

「あ、仁美ちゃん！」

突然聞こえた声は仁美の物だった。

まどかは手を振って自分のいる場所を相手に知らせた。

彼女の横には引っ張られるようにして走る恭介の姿があった。

「今日は来てくれてありがとうございます」

「お礼を言われることじゃないって」

普通に会話を始めるさやか達に、渉はため息をつくとき空を見上げた。

「あら？そちらの方はどなたですか？」

「あ、えっと……」

まどかは彼女たちが渉の事を覚えていない事を思い出した。

「小野渉だ。そっちの人物のバイオリンを昔偶々聞いてな、聴きに来たんだ」

「そうだったんだ。僕は上条恭介、よろしく」

渉の自己紹介に、恭介は何ら疑問も持たずに手を差し伸べた。

「今日のお前の演奏は非常に素晴らしいものだった」

「ありがとう。そう言って貰えるとうれしいよ」

握手を交わしながら渉は感想を述べる。

「だが、満足はするな。まだまだ上がある。それを目指して世界のバイオリストになれ」

「ありがとう。肝に銘じておくよ」

渉の言葉に、恭介は素直に聞き入れた。

「あ、そ、そうだ！ みんなで記念撮影しようよ！ 恭介の優勝祝いにさ」

「お、それはいいアイデアだな」

「私も賛成ですわ」

さやか の提案に全員が賛同すると、何処からともなく彼女はデジタルカメラを取り出し、それを近くに立っていた銅像の一か所に設置する。

「それじゃ、みんな固まって」

「お、おい！ 押すなって！」

半ば強引に押される渉は左側が恭介、右側にまどかと言う位置にいた。

「それじゃ、行くわよー」

さやかはそう言うセルフモード状態でシャッターを押して自分も位置についた。

ゆっくりと写真が取られるまでのカウントダウンが始まり、いよいよあと3秒と言う段階まで来た。

「はい、チーズ！」

それを見計らい、さやかが合図を送った。
各々がポーズを決めている。

「……………ッ！！」

ただある人物だけはシャッターが切られる寸前に思いがけない行動をとった。

そしてカメラはそれを記録した。

「こんなところまで、見送らなくていいのに」

「良いでしょ。私たちを救った英雄だよ？ これくらいさせてよ」

渉のため息交じりの言葉に、さやかがそう答えた。

「さて、もう時間だ」

そう言う渉の地面には複雑な模様が描かれていた。
そしてそれは光を発している。

「ありがとね、渉」

「もうお礼は良いって」

お礼を言うほむらに、渉は苦笑い交じりに答えた。

「あ、あの写真現像したらお墓の所に持っていくね」

「出来ればあそこに埋めて置いてくれ」

渉は初めて顔を赤くしながらそう頼んだ。

渉にとってその写真は鬼門であった。

「それじゃ、さようならだ」

渉の言葉と同時に地面に描かれた模様は輝きを増していき、渉を包み込む。

『さようなら。ありがとう!』

全員がそう言って渉を送り出した。

そして、光が消えた時、そこには誰の姿もなかった。

天界には時間と言う概念は存在しない。
なので、期限や日数は個体個体で変わってしまうのだ。

「渉、そろそろ時間じゃ」

「そうか。早かったな」

一人の紳士そうな男が渉に声をかけた。

「そう言うな。これでも最大限引き伸ばしたつもりじゃ」

「分かってている。あんたには感謝しているさ。あいつらに別れをいう事も出来た。もうこれで悔いはないさ」

渉の表情は非常に清々しかった。

「あ、そうだ。俺の後継者が現れたら、時期を見計らってこいつを渡してやってほしい」

「……………確かに引き受けた」

渉が渡した紅い剣を創造の神、ノヴァは大切そうに受け取った。

「全く、俺は幸せ者だ」

「その写真は何じゃ？」

覗きこもうとするノヴァだが、それは渉が写真を隠したことで叶わなかった。

「この写真は永久封印物さ」

そう言いながら渉は写真を見る。

そこには恭介の腕に自分の腕をからめる仁美、そしてその後ろでは写真が苦手なのか視線をそらすほむらと杏子。

二人の左側にいるさやかとママは万弁の笑みを浮かべていて、その前にいるまどかは渉の頬に唇を付けていた。

その写真を紅い剣に入れた。

それと同時に渉の表情が引き締まる。

「さあ、逝こうか」

そして渉は歩き出した。

世界は何時でも回る。
それが例えどのような物でも時間は経っていく。
涉の人格が抹消されてから数百年後。

「答えよ」

創造の神、ノヴァが一人の青年に呼びかける。

「世界の意思よ、答えよ」

「何の用だ？ 神」

二回目の呼びかけに、青年は答えた。

「実はお主の管轄する世界で、理不尽な要素が発見されたのじゃ」
「何だと!？」

ノヴァの言葉に、青年は驚きをあらわにする。

「だったら、今からこっちで修正を
」
「それが無理のようなのじゃ。この要素は完全な形として固定されている。我々として手を出すことはできないのじゃ
」

青年の言葉を遮るようにして、ノヴァが否定した。

「俺にどうしろと？」

「そう急かす出来ない。お主にやって貰いたいのは、その世界に降り立ち不安定な状態を、修復して貰いたいのじゃ
」

青年の問いかけに、ノヴァは答えた。

「了解だ。俺が降り立つ場所の情報と、俺の正式な名前を」

「ああ、お主が降り立つ場所は海鳴市内の公園だ。名前やそのほかの詳しい事は、降り立ってから伝えるとしようかの」

青年にノヴァはその地名を告げた。

「分かった、それでは、世界の意思。行ってまいります！」

そして青年、世界の意志は姿を消した。

「……………あ奴を見守っておくれよ、渉よ。そして頑張るのじゃぞ、
小野渉の後継者、鈴木隆介よ」

そのノヴァの言葉を聞いたものは、誰もいない。
今ここに、新たなる世界の意志による新たな物語が幕を開けようとしていた。

終わりに

皆さん、初めましての方は初めまして、それ以外の方はご無沙汰しております。

今回はこのような駄文を読んでくださりありがとうございます。この作品もようやく最終話を迎えることができました。

True エピローグですが前々からやってみようと思っていたことでもあります。

ああいう終わらせ方は賛否両論もあるでしょうが楽しんで頂けたら幸いです。

この作品を書くきっかけは、自分だったらこうするのと言う妄想からです。

それがここまで形になったので、正直自分でも驚いております。ただ、各キャラの心情など（マミさんの孤独を恐れるところなど）は完全に理解できていなかったため、キャラによっては原作とはかけ離れた存在になってしまったのが、私の反省すべき点です。

ちなみに、この原作の二次創作は二度と書かないと思います。

これを書き上げる為にかなりの料金を消費しているので、かなりきつという面もあります。

要望があればもしかしたら書くかも……ですが。

今後の予定については、『DOG DAYS』の二次創作を書いてみようと考えております。

もし興味がありましたら、ぜひご覧ください。

それでは、最後になります。再びお礼を言ってお別れしたいと思います。

本作をご愛読いただき、本当にありがとうございました！！

ねえ、教えて（前書き）

これは完結記念に私が、初めて書いてみた二人称の小説です

ねえ、教えて

あなたは、いつも格好良かった。

何のとりえもない私がうらやましく思うほどに。

一目で会った時から、私はあなたにひかれたのかもしれない。

私が悲しい時もつらい時も、色々と手を差し伸べてくれたのかもしれない。

ねえ、教えて。

あなたは私の事をどう思っていたの？

私はあなたの事が好きだったよ？

でも、そんな事を言う勇氣は私にはなくて。

そしたらあなたはみんなを守って姿を消してしまった。

ねえ、教えて。

私の事をどう思っていたのかを。

そして伝えたいな。

貴方への私の気持ちを。

大好きだよ

ねえ、教えて（後書き）

……自分で書いていて背筋が凍りつきました。
これこそが本当の黒歴史です。
もう二人称は書かないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7950s/>

魔法少女まどか マギカ～革命を促す者～

2011年10月3日08時40分発行